市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第26集

市原市郡本遺跡群（第15次）

２０１３

株式会社ライフ
市原市教育委員会

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第26集

市原市郡本（こおりもと）遺跡群（第15次）

２０１３

株式会社ライフ
市原市教育委員会

序　文

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれております。そのため、有史以来多くの人々の生活がこの地で営まれ、郷土の歴史が育まれてきました。史跡上総国分寺跡や「王賜」銘鉄剣などに代表される国内有数の文化遺産の数々は、これら先人の足跡を今に伝えています。

本報告書は、宅地造成に伴い実施した郡本遺跡群の発掘調査の成果をまとめたものです。郡本地区は、古代以来の官衙に関連した遺跡が分布する、上総市原の歴史上重要な地域の一つですが、今回の調査では中世の村落跡を確認するという新たな成果が得られました。本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願っています。

最後に、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご指導ならびに、ご協力をいただきました株式会社ライフ、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心からお礼申しあげます。

平成25年3月

市原市教育委員会
教育長　白鳥秀幸

例　言

1　本書は、千葉県市原市郡本１丁目237番地他に所在する郡本遺跡群（第15次）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び整理作業は、市原市教育委員会ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。調査コードは、セ493（確認調査）・セ495（本調査）とし、記録類・遺物注記に用いた。

確認調査	2640㎡のうち264㎡	平成24年　2月28日～平成24年3月12日	担当	牧野光隆
本調査	1050㎡	平成24年　5月28日～平成24年7月27日	担当	小橋健司
整理作業		平成24年11月19日～平成25年2月21日	担当	小橋健司

3　本書の編集・執筆は小橋健司が担当した。中世遺物の分類は櫻井敦史（ふるさと文化課）が行い、貝層の分析・自然遺物の整理については忍澤成視・鶴岡英一から協力を得た。また、ウマ骨について金子浩昌氏（東京国立博物館特別研究員）より玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。

4　座標値は事業者実施の現地測量成果に基づく世界測地系の数値で、図の北方位は座標北である。

5　本書に収録した出土遺物および調査記録は、すべて市原市埋蔵文化財調査センター（千葉県市原市能満1489　電話0436－41－9000）で保管している。

目　次

第１章　発掘調査の概要
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
　第３節　調査の方法 …… 3
第２章　検出された遺構と遺物
　第１節　検出遺構と出土遺物の詳細 …… 5
　第２節　077号地下式坑出土のウマ骨（金子浩昌）…… 39
第３章　まとめ …… 40

第１図　郡本遺跡群と周辺の主な中世遺跡…… 2
第２図　遺跡の位置…… 2
第３図　遺跡の位置と旧地形…… 3
第４図　周辺の調査状況…… 4
第５図　調査区全体図…… 6
第６図　004号台地整形区画全体図・土層断面図…… 8
第７図　004号台地整形区画および周辺遺構土層断面図 9
第８図　004号出土土器実測図…… 9
第９図　004号出土遺物（石製品・金属製品・鉄滓）実測図・拓影図…… 10
第10図　004号周辺遺構出土遺物実測図・拓影図…… 11
第11図　004号区画内主要遺物出土地点…… 12
第12図　確認調査出土遺物…… 12
第13図　004号区画内掘立柱建物跡Ａ遺構図…… 13
第14図　004号区画内掘立柱建物跡Ｂ・Ｃ遺構図……14
第15図　004号区画北東部遺構図…… 15
第16図　008号土壙墓人骨検出状況・土層断面図…… 16
第17図　026・027号遺構図・遺物実測図…… 17
第18図　016号遺構図および遺物実測図…… 18
第19図　030・096号遺構図・遺物実測図…… 19
第20図　022・034・040・041号遺構図…… 20
第21図　038・095号遺構図・遺物実測図…… 21
第22図　042号遺構図・遺物実測図…… 22
第23図　遺構検出貝層の組成…… 23
第24図　024・025号周辺遺構図・遺物実測図…… 25
第25図　024・025号周辺遺構土層断面図…… 26
第26図　048号出土銭拓影図…… 27
第27図　059・068号周辺遺構図…… 28
第28図　059・068号周辺遺構断面図…… 29
第29図　053号遺構図・遺物実測図…… 30
第30図　054・055・056・057号遺構図・055号遺物実測図…… 31
第31図　058・059・068・076号遺物実測図・拓影図…… 31
第32図　080号遺構図・遺物実測図…… 32
第33図　061・065号遺構図…… 33
第34図　067・074号遺構図・082・086号遺物実測図…… 33
第35図　077号遺構図・遺物実測図…… 34
第36図　081・083・094号遺構図・083・094号遺物実測図… 35
第37図　060号遺構図・遺物実測図・グリッド出土遺物実測図…… 36
第38図　090号周辺遺構図…… 37
第39図　087・088号周辺遺構図…… 38
第40図　001・002号遺構図・002号遺物実測図…… 38
第41図　第15次調査出土中世遺物の組成…… 41

表１　郡本遺跡群第15次調査区検出遺構一覧…… 7
表２　出土銭貨一覧…… 27
表３　土製品一覧…… 27
表４　土器観察表…… 44
表５　鉄製品一覧…… 46
表６　鉄滓一覧…… 46
表７　石製品一覧…… 46

図版１　郡本遺跡群第15次調査区周辺
図版２　004台地整形区画
図版３　004台地整形区画・024・025竪穴遺構
図版４　調査区中央部遺構群・同南部遺構群
図版５　004区画・001貝層・021貝層・043溝・008土壙墓・028土坑・034竪穴・040竪穴
図版６　043溝・038竪穴・095火葬遺構・016地下式坑・026地下式坑
図版７　026地下式坑・027地下式坑・030地下式坑・096火葬遺構
図版８　042地下式坑・024竪穴・025竪穴・048ピット・082ピット
図版９　044竪穴・045土坑・046土坑・052土坑・053土坑
図版10　063竪穴・064竪穴・069土坑・062土坑
図版11　061竪穴・065火葬遺構・075土坑・072土坑・059土坑・070土坑
図版12　058土坑・073土坑・068竪穴・085土坑・066土坑・067竪穴
図版13　074粘土貼土坑・081土坑・083土坑・057土坑・076竪穴・078土坑
図版14　077地下式坑・054土坑・080土坑
図版15　087土坑・088土坑・090土坑・091土坑・092土坑・093土坑・060溝
図版16　土器類・土製品・鉄滓・石製品
図版17　鉄製品・石製品・人骨・炭化物
図版18　貝類・シカ骨・ウマ骨

第１章　発掘調査の概要

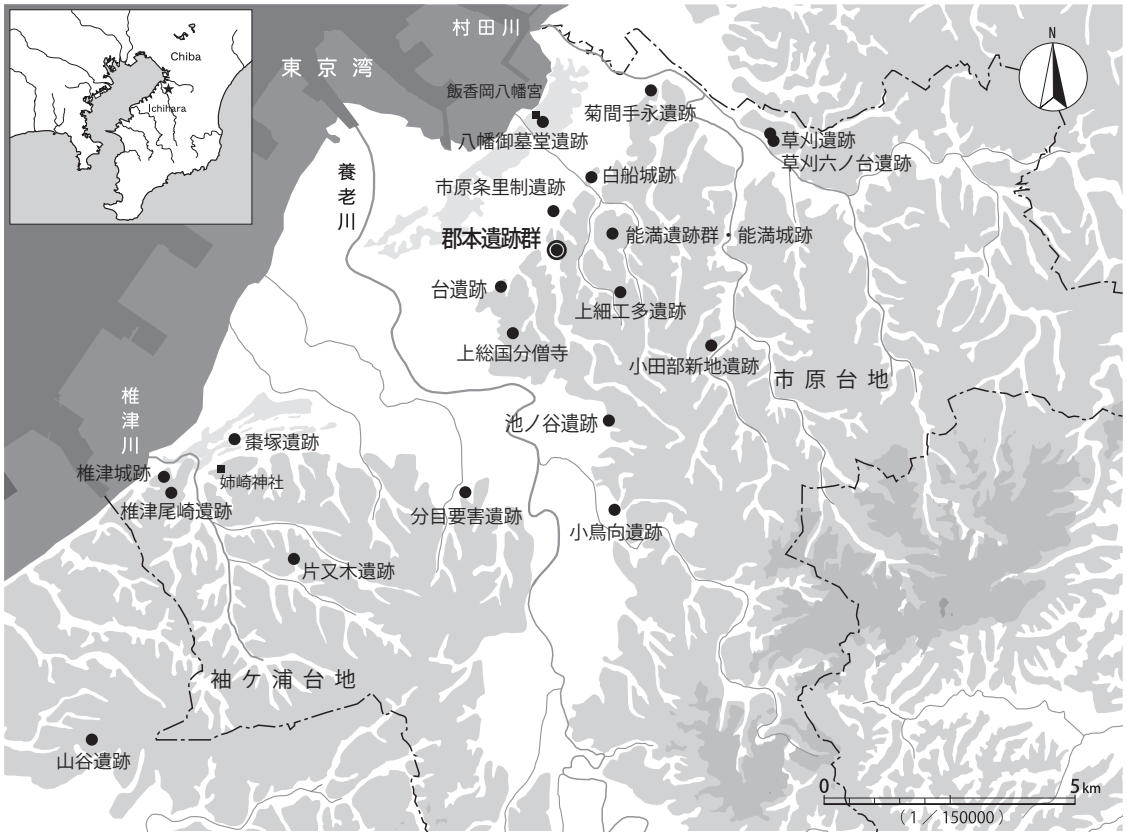
第１節　調査に至る経緯

株式会社ライフ（以下、事業者）が郡本１丁目237番地他（字宮ノ前）において宅地造成事業を計画し、平成23年10月19日、区域内における埋蔵文化財の有無について市原市教育委員会（以下、市教委）へ問い合わせた。これ受けた市教委ふるさと文化課は、事業予定地（3612.5㎡）に周知の埋蔵文化財包蔵地（郡本遺跡群、分布地図番号793、2640㎡）が存在することを確認し、その旨が事業者に伝えられた。事業者は平成23年12月28日付けで、文化財保護法第93条に基づく届出を提出し、これを受けた市教委は平成24年1月19日に試掘を実施した結果、中世期の遺構・遺物が台地平坦面上に広がることを確認した。市教委はこの結果をもとに平成24年1月20日付けで千葉県教育委員会（以下、県教委）へ届出を進達した（市教文第２－55号）。届出を受けた県教委は、試掘結果に基づき市教委と協議を行い、平成24年1月27日付けで事業地内における発掘調査を指示する文書を事業者に通知した（教文第１号の797）。事業者の計画実施の方針に変更はなかったため、まず、遺構分布を把握し埋蔵文化財への影響を判断する材料を得るため、平成23年度事業（市内遺跡発掘調査事業）として、対象面積264㎡（2640㎡の10%）の確認調査を平成24年2月28日から3月12日まで市教委埋蔵文化財調査センターが実施した（小橋他2013）。確認調査の結果を受けた県教委の指導により、本調査必要範囲は1050㎡となり、市教委から事業者にその旨が伝えられた（平成24年3月21日付け、市教埋文第170号）。その後、事業者と市教委が協議を重ねた結果、事業区域内の埋蔵文化財については事業者負担による記録保存の措置をとることが決まり、翌平成24年度、5月21日付けで発掘調査実施について契約を締結、埋蔵文化財調査センターが同5月28日から7月27日まで本調査を実施することとなった。

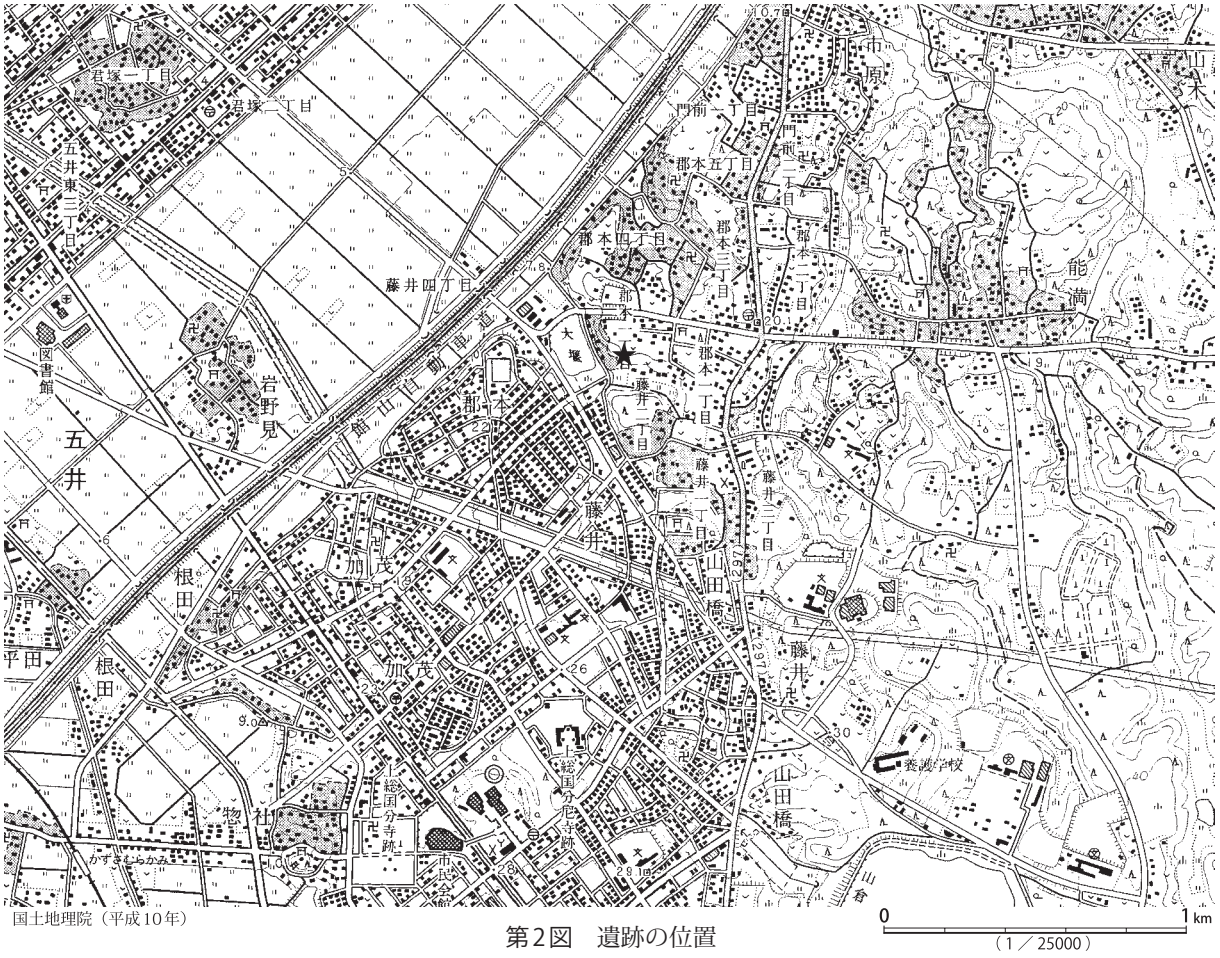
第２節　遺跡の立地と歴史的環境

郡本遺跡群は養老川下流右岸、市原台地の北西部に広がる遺跡である（第１図）。当遺跡群には大まかに、市原郡家推定地の含まれる郡本地区、上総国府推定地の含まれる市原地区・古甲地区があり、今回の第15次調査区は郡本地区の西端、標高21m強の台地平坦面の縁辺にあたり、調査以前は畑として利用されていた。調査区の西側は埋積した洪積台地の開析谷で幅150mほどの谷底平野になっており、台地上との比高差は約10mである（第２・３図）。

今回の調査区は郡本八幡神社参道の西部南側にあたる（第４図、各調査出典は下部注記参照）。最も近い３次調査区においては平安時代の竪穴建物跡１棟と溝状遺構、８次調査区においては平安時代の竪穴建物跡１棟が検出されているが、官衙的な建物跡は未発見である。１次調査区では奈良・平安時代の竪穴建物５棟（他時期３棟）と墨書土器・金銅製巡方が検出されている。５次調査区では県道五井本納線に沿う溝跡が確認され、千葉県文化財センター調査地点の11世紀前半とされた同様の溝跡に関係すると見られる。７次調査では平安時代の竪穴建物跡２棟（他時期３棟）が検出されている。現時点では、13・14次調査において郡本八幡神社参道の北側に中世前期の東西方向の幅5.5m、深さ2.7m、断面逆三角形の大規模な壕が発見されるなど、期待される奈良・平安時代の痕跡にくらべ中世期遺構の存在感が高まりつつある。



第1図　郡本遺跡群と周辺の主な中世遺跡



国土地理院（平成10年）

第2図　遺跡の位置

第３節　調査の方法

確認調査で捉えられた各トレンチの状況から遺構検出面の深さを想定し、50cm程度の表土掘削をバックホーで行った。遺構検出面は調査区全域で立川ローム層中のいわゆるハードローム層である。近辺の似た立地における遺跡の調査ではソフトロームが縄文時代以降の遺構検出面となるのが通例であることからすると、今回調査区では人為的にソフトロームが削平されたものと思われる。

グリッドシステムは、国土座標（世界測地系）に基づく20m四方の大グリッドとそれを100分割した2m四方の小グリッドを設定した（第５図）。大グリッド名は、北から南に数字、西から東にアルファベットを付し、「1A」などとした。また、小グリッド名は大グリッド内、北西角が「00」、北東角が「09」、南東角が「99」とし、合わせて「1A00」などとした。図中、北方位は座標北である。

表土除去と遺構検出は北部から南へ進め、遺構番号は検出順に001から付与した。本報告の遺構番号は遺物注記との対応を優先したため、発掘調査時のままとしている。

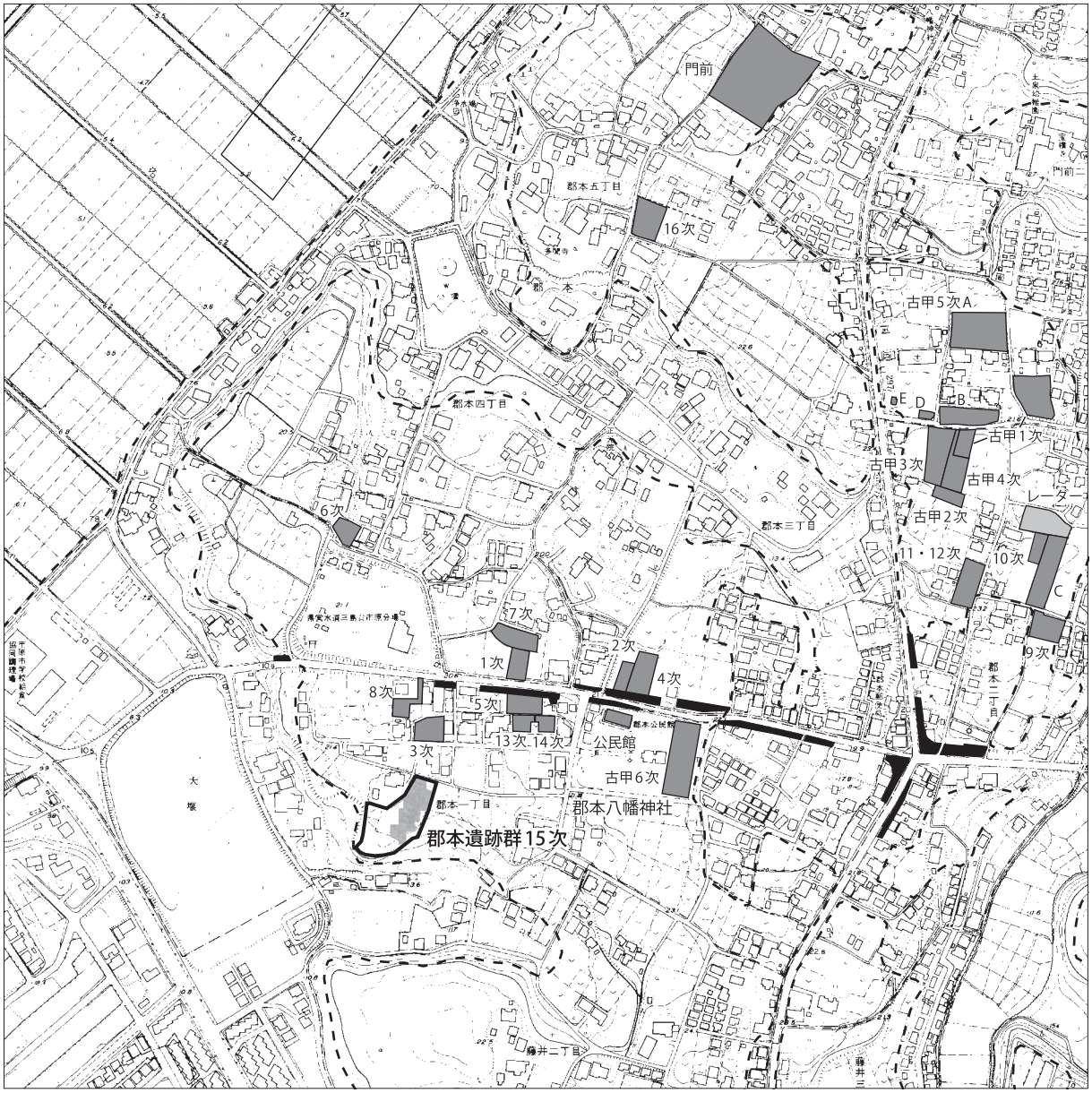
遺構の掘り下げは基本的に、平面精査し形状を把握してから覆土を半截、あるいはセクションベルトを掘り残し、堆積状況を把握しながら行った。この際、土層・断面形状の図化・写真撮影を行い、完掘後に再度記録した。並行して遺物の出土位置の記録も行った。なお、天井部が遺存した地下式坑（016号・042号・077号）は、安全確保のためバックホーで天井部を除去して調査した。

平面図化は1/20実測（メッシュ法）、1/40実測（平板測量）、断面図化は1/20実測を基本とし、一部については1/10でも作成した。写真撮影は6×7判銀塩カメラとデジタルカメラで行った。

迅速測図原図（明治15年）

第３図　遺跡の位置と旧地形

0　1 km
（1／25000）



市原市基本図1/2500（昭和55年）　黒塗り：千葉県文化財センター調査地点（相京・伊藤2004）　破線：遺跡群範囲　0　200m（1／6000）

郡本 1 次【1986　セ39　360㎡本調査】（木對1987）
郡本 2 次【1994　セ186・188　267.47㎡本調査】（田中1994）
郡本 3 次【1997　セ244　60㎡/604.53㎡確認調査　245㎡本調査】（小川他1998）
郡本 4 次【1997　セ246　74㎡/746.01㎡確認調査】（小川他1998）
【1997　セ258　380㎡本調査】（鶴岡1999）
郡本 5 次【1998　セ273　36㎡/368㎡確認調査　240㎡本調査】（北見1999）
郡本 6 次【2004　セ394　12㎡/460.02㎡確認調査　12㎡本調査】（大村・鶴岡2005）
郡本 7 次【2007　セ420　56㎡/568.95㎡確認調査】（小川2008）
郡本 8 次【2007　セ429　34㎡/341㎡確認調査】（牧野2009）
郡本 9 次【2007　セ432　59㎡/596.97㎡確認調査】
郡本10次【2008　セ443　26㎡/253㎡確認調査】（牧野2009）
郡本11次【2008　セ444　79㎡/789.3㎡確認調査】（牧野2009）
郡本12次【2009　セ449　153㎡本調査】（近藤2010）
郡本13次【2009　セ452　26.5㎡/265.36㎡確認調査　2㎡本調査】（牧野2010）
郡本14次【2010　セ459　23.7㎡/237.43㎡確認調査　112㎡本調査】（牧野他2011）
郡本15次【2012　セ493　264㎡/2640㎡確認調査】（小橋他2013）
【2012　セ495　1050㎡本調査】
郡本16次【2012　セ494　48㎡/483.11㎡確認調査　24㎡本調査】（小橋他2013）

古甲 1 次【1991　セ145　300㎡確認調査】（高橋1994）
古甲 2 次【1992　セ166　150㎡確認調査】（高橋1994）
古甲 3 次【1995　セ199　200㎡確認調査】（田所1997）
古甲 4 次【1996　セ220　130㎡確認調査】（田所1998）
古甲 5 次【1997　セ241　441㎡/3240㎡確認調査　120㎡本調査】（田所2000）
古甲 6 次【2001　セ354　200㎡確認調査】（高橋2004）

門前　【2001　セ344　426㎡/4259.04㎡確認調査　64㎡本調査】（小川2004）
公民館　【2002　230㎡本調査】（田所他2003）
レーダー　【1994　638㎡確認調査】（高橋1997）

第4図　周辺の調査状況

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　検出遺構と出土遺物の詳細

今回の調査では多くの中世遺構が検出された。地山整形区画1箇所・掘立柱建物跡3棟・地下式坑6基・小竪穴（・土坑）75基・粘土貼土坑１基・土壙墓１基・火葬遺構３基・溝跡３条・貝層５箇所・ピット群である（表1参照）。ピット群には掘立柱建物の柱穴や他遺構と組み合うものも多いと思われるが、組み合わせが不確定だったため、遺物が出土したものを除いて遺構番号は付与していない。

いずれの遺構もハードロームを掘り込み面としていたらしく、遺構覆土のロームブロックはほとんどがハードローム層に由来するもので、大ぶりなブロックが多く含まれる堆積状態も全体に似通っていた。覆土にハードロームブロックが多いため、特に小ピットは地山乾燥後の検出が困難であった。

出土遺物は通例の中世遺跡と同様で土器類の総量は多くないが、地下式坑からは大量の貝類のほかウマ・シカの骨が検出されている。また、アワが容器と思われる板とともに炭化したものが検出されており、いずれの自然遺物も中世の生活を具体的に復元する際の良好な資料になると思われる。

台地整形区画および関係遺構

004号区画（第６～11図 図版２・３・５・16・17）

調査区北部に検出された台地整形区画で、地山ハードローム面を掘り込んで平坦面が形成されている。後述の出土遺物から中世後期15世紀前半から中葉にかけて機能したと考えられる。

北側の台地側は掘り込みが明瞭だが、谷に向かう西側は調査区外になり、また、南側は掘り込みが不明瞭でどの遺構までを区画内遺構群に含められるか判然とせず、明確な規模は不明である。しかし、区画内の主要建物と見られる掘立柱建物跡３棟が、時期を変えても同じ位置に建てられていることからすると、確認範囲が区画の中心部だった可能性があるため、北側の掘り込みの明確なラインと043号溝に囲まれる範囲を一区画（20×16+ m）と考えたい。掘り込みは北東角最深部で約60cmである。

区画覆土は掘り下げの際には暗褐色を呈する黒味の弱い色調で、色調変化は上下にわたり乏しかった。覆土中で明確な硬化土は検出できず、掘形床面以外に複数の活動面があったようには見受けられなかった。区画北側中央付近を中心に鉄滓・炉壁・台石片など鍛冶関係遺物が出土し、床面に被熱によると見られる赤変硬化面が検出された。混入品の可能性も考えられなくはないが、古代以前に帰属するその他の遺物が少ないことから、中世に属すると考えたい。鉄滓は図化したもの以外に、20点179gを検出している。

区画内には、掘立柱建物跡３棟・地下式坑４基・土壙墓１基・火葬遺構２基・覆土内貝層１箇所があり、ほかにピット・土坑・竪穴が認められる。なお、ピット・土坑・竪穴の区別は、基本的に、直径50cm以内の穴をピット、平坦な掘形のみでその他施設を伴わない長辺2m以内の穴を土坑、掘形以外に床面ピット等の施設の伴う長辺2m以上の穴を竪穴と呼称した。

ピットの掘形は、掘立柱建物跡３棟を除いて、調査区全体の傾向と同じく明瞭な方形を呈する特徴的なものが主体である。ハードロームの土質と掘削具の形状によるものであろう。

出土遺物は第11図のとおり区画内で特定の箇所に偏って出土する傾向は示さなかった。ただ、033号北側の被熱痕近くで素材と見られる内耳鉄鍋片が認められる点や、掘立柱建物跡Ｂの柱穴覆土に金床石の可能性のある石片が見られる点は区画の機能－廃絶過程を示唆しており興味深い。

2A05
2B00
2C00
3A05
3B00
4A05
4B00
4C00
X=-54146
X=-54166
X=-54186
Y=26020
Y=26040
N
掘立柱建物A
掘立柱建物B
掘立柱建物C
0
10m
（1／250）

第5図　調査区全体図

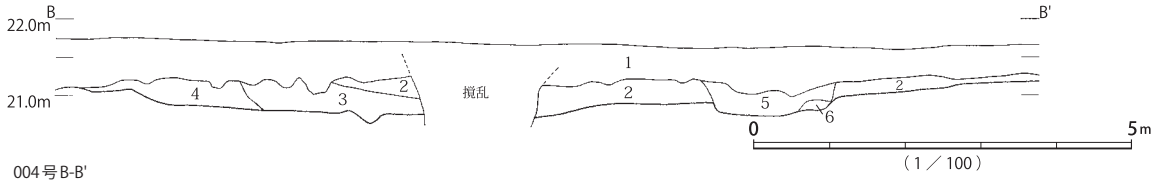
表1　郡本遺跡群第15次調査区検出遺構一覧

遺構番号	種別	時期	形状	概位置	規模 m	深さ cm	特記事項
001	落ち込み	不明	円形	1B55南東	2.51×1.27	7	貝層あり
002	土坑	中世	長方形	2C00北西	1.95×1.03	24	
003	欠番						
004	台地整形区画	中世	方形	2B05	20×16～	―	掘立柱建物3棟
005	欠番						
006	土坑	中世	方形	2B05南西	1.82×0.58	13	少量の貝
007	欠番						
008	土壙墓	中世	隅円方形	2C50北部	1.12×0.82	59	人骨・歯出土
009	溝状遺構	近現代		2C55西部	―	―	赤道
010	溝状遺構	近現代		2C55西部	幅0.6前後	10	道か
011	欠番						
012	土坑	中世	円形	2C50中央	1.20×1.06	12	
013	土坑	中世	円形	2C00中央	0.68×0.54	14	
014	土坑	中世	円形	2C00中央	0.94×0.86	42	
015	土坑	中世	円形	2C00南部	a 0.94×0.78 b 0.64×0.48	13 41	
016	地下式坑	中世	竪坑隅円方形 主室円形	2C00中央	全体2.86×2.00 竪坑1.09×1.04 主室2.00×1.78	― 107 195	主室床面積2.36㎡ シカ骨・陶器片出土 深さは004床から
017	土坑	中世	円形	2C00南部	0.78×0.66	32	
018	土坑	中世	方形	2C50北部	0.92×0.92	14	004区画外
019	竪穴	中世	隅円方形	2C00南部	2.34×1.52	33	
020	土坑	中世	隅円方形	2B50南部	1.32×1.06	45	
021	貝層	中世	平面形不明	2B50北東	―	―	調査区壁面に検出
022	溝状遺構	中世	ほぼ直線	2C50	幅0.6～0.8	10	004号区画に沿う
023	欠番						
024	竪穴	中世	方形	3B05南西	2.02×1.80	41	
025	竪穴	中世	方形	3B05南西	2.64×2.14	26	
026	地下式坑	中世	竪坑円形 主室長方形	2C50北西	全体2.75×1.19 竪坑1.09×1.04 主室1.92×1.24	― 41 134	主室床面積1.92㎡ 床面に薄く炭化物 深さは004床から
027	地下式坑	中世	竪坑円形 主室長方形	2C50北西	全体3.14×1.58 竪坑1.11×1.05 主室2.19×1.58	― 55 126	主室床面積2.45㎡ 床面に炭化物・焼土 深さは004床から
028	土坑	中世	円形・方形	2B55南部	a 1.04×0.96 b 0.98×0.94 c 1.75×0.94	54 47 23	円形・長方形が連結
029	土坑	中世	隅円方形	2C50北東	1.80×1.18	41	
030	地下式坑	中世	竪坑方形 主室方形	2B50東部	全体4.30×2.87 竪坑1.77×1.57 主室2.87×2.69	― 102 194	主室床面積3.43㎡ 壁際天井が一部遺存 深さは004床から
031	欠番						
032	竪穴	中世	隅円方形	2C50北西	1.76×1.44	15	
033	土坑	中世	円形・円形	2B05南東	a 0.77×0.72 b 0.98×0.94 c 0.82×0.80	16 14 10	円形がつながる
034	竪穴	中世	方形	2C50南西	2.00×1.38	14	
035	欠番						
036	土坑	中世	円形	2B55南東	1.92×1.34	10	
037	土坑	中世	隅円方形	2C50北東	1.22×0.68	47	
038	竪穴	中世	方形	3B05北東	3.12×2.12	56	
039	竪穴	中世	方形	3B05北辺	1.38×1.14	10	
040	竪穴	中世	方形	2C50南西	2.12×1.56	40	
041	竪穴	中世	方形	3C00北西	1.94×1.88	29	
042	地下式坑	中世	竪坑円形 主室長方形	3C00北西	全体3.57×3.11 竪坑1.24×1.26 主室3.11×2.57	― 152 266	主室床面積5.85㎡ 竪坑内で貝が大量に出土 深さは検出面から
043	溝状遺構	中世	コ字形	3B05	北　幅0.8前後 東　幅0.6前後 南　0.5～0.8	5～30 5～20 10～20	北辺は004号区画の南限か
044	竪穴	中世	方形	3B05南東	2.14×1.66	47	
045	土坑	中世	方形	3B05南東	1.80×1.78	79	
046	土坑	中世	隅円方形	3B05南東	1.56×1.28	39	
047	落ち込み	中世	隅円方形	3C00北西	2.84×2.12	12	
048	ピット	中世	方形	3C00南西	0.28×0.24	34	銭貨24枚出土
049	ピット	中世	方形	3B05南東	0.30×0.22	51	柱材と見られる炭化物
050	土坑	中世	隅円方形	3B00北東	1.06×0.94	42	
051	土坑	中世	隅円方形	3B05北西	1.04×0.98	13	
052	土坑	中世	隅円方形	3C50北西	1.84×1.14	21	
053	土坑	中世	方形	3B55南東	1.92×1.66	35	
054	土坑	中世	方形	4A05南東	1.42×1.22	24	
055	土坑	中世	隅円方形	4A05北東	2.04×1.42	17	
056	土坑	中世	円形	4B00北西	1.70×1.22	21	
057	土坑	中世	方形	4B00北辺	1.64×1.42	37	
058	土坑	中世	方形	3B55南辺	a 1.70×1.08 b 1.30×0.98 c 0.96×0.34	51 35 37	3基以上切り合う
059	土坑	中世	長方形	3B55南西	a 2.10×1.72 b 1.08×1.00 c 2.48×1.00	57 23 21	3基切り合う
060	溝状遺構	中世	ほぼ直線	4B50	幅0.9～1.2	10～25	
061	竪穴	中世	方形	3B50北東	2.42×1.96	81	
062	土坑	中世	隅円方形	3B55北辺	a 1.12×0.88 b 1.68×0.98	31 9	
063	竪穴	中世	隅円方形	3B55中央	2.30×1.92	19	
064	竪穴	中世	方形	3B55北東	1.30×1.04	26	
065	火葬遺構	中世	隅円方形？	3B50北東	0.96×0.50	9	061号竪穴を切る
066	土坑	中世	方形	4B05北西	1.18×1.18	32	貝層検出
067	竪穴	中世	方形	3B50中央	1.78×1.44	76	
068	竪穴	中世	方形	4B05北辺	2.62×2.04	94	
069	土坑	中世	方形	3B55北西	2.38×1.80	31	
070	土坑	中世	方形	3B55南東	1.22×1.20	27	
071	土坑	中世	円形	3B00中央	1.16×1.04	27	
072	土坑	中世	長方形	3B55西辺	1.84×1.14	35	粥状？炭化物検出
073	土坑	中世	方形	3B55南西	1.32×1.14	47	アワ状炭化物検出
074	粘土貼土坑	中世	方形	3B50北東	1.76×1.62	57	壁面全体に粘土貼り付け
075	土坑	中世	長方形	3B55中央	1.48×1.12	61	
076	竪穴	中世	長方形	3B55中央	1.54×1.02	32	
077	地下式坑	中世	竪坑方形 主室方形	4B05北東	全体3.66×3.58 竪坑2.16×2.02 主室3.58×2.30	― 144 241	主室床面積5.64㎡ 深さは検出面から
078	土坑	中世	長方形	3B55西辺	a 1.08×0.88 b 2.30×0.90	24 20	
079	土坑	中世	隅円方形	4B00北東	1.20×0.98	43	
080	土坑	中世	方形	4B00西辺	1.72×1.60	56	
081	土坑	中世	方形	3B50南辺	1.20×1.14	25	
082	ピット	中世	方形	3B50中央	0.40×0.36	45	完形カワラケ出土
083	土坑	中世	長方形	3B50中央	1.52×0.98	43	
084	竪穴	中世	方形	4B05北西	2.74×2.08	51	
085	土坑	中世	長方形	4B05北西	2.32×1.20	53	
086	ピット	中世	円形	3B50中央	0.60×0.54	28	
087	土坑	中世	方形・円形	4B50北東	1.82×1.42	76	天井部を持つ
088	土坑	中世	方形	4B50北東	1.34×1.06	48	
089	欠番						
090	土坑	中世	長方形	4B00中央	2.80×1.72	92	
091	土坑	中世	方形	4B00中央	2.22×1.60	56	
092	土坑	中世	方形	4B00東辺	1.00×0.82	43	
093	土坑	中世～近世	方形	4B00中央	1.24×0.94	56	
094	ピット	中世	円形	3B50中央	0.46×0.30	33	鉄鏃出土
095	火葬遺構	中世	長円形	3B05北東	1.50×0.54	36	038号竪穴を切る
096	火葬遺構	中世	長方形	2B55南東	0.84×0.82	20	030号地下式坑の竪坑を利用
097	土坑	中世	長方形	4B00中央	2.00×1.60	12	

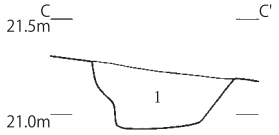
004号A-A'

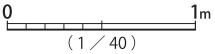
1：10YR4/2灰黄褐土　ローム粒（～1cm）・焼土粒・炭化物混じる
　上位20cm程度が耕作等で撹乱される
2：10YR4/3にぶい黄褐土　～2cmのロームブロックが多く混じる
　炭化物粒・焼土粒（各～5mm）・明灰色粘土粒混じる
3：10YR4/2灰黄褐～4/4褐色土　ロームブロックが多く混じる　やや締まる
4：10YR4/2灰黄褐土　ロームブロック（～5cm）混じる
5：10YR4/3にぶい黄褐土　焼土粒・ロームブロック（～5cm）混じる
　やや締まる　027号覆土上面
6：10YR4/3にぶい黄褐～3/2黒褐土　10cmを超えるロームブロック混じる
7：10YR4/2灰黄褐土　ロームブロック（～3cm）混じる　締まる　022号覆土
8：10YR4/3にぶい黄褐～4/4褐土　ロームブロック（～5cm）混じる
9：暗褐～黒褐土　炭化物が多く焼土粒・ローム粒・ロームブロック（～3cm）
　混じる　やや締まる　掘立C柱穴f覆土
10：暗褐土　焼土粒・炭化物が多い　やや締まる　掘立B柱穴d覆土
3'：暗褐土　ロームブロックの少ない3層

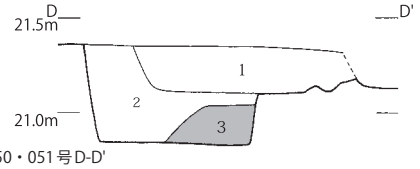
第6図　004号台地整形区画全体図・土層断面図



004号B-B'
1：撹乱表土
2：暗褐土　ローム粒（2～10mm）が多い　炭化物粒少し混じる
3：混貝土　ローム粒（～1cm）混じる　021号覆土
4：ローム粒（～2cm）が多く混じる　炭化物少量含む
5：暗褐土　黒褐色土が目立つ
6：ハードロームブロック主体土







043号C-C'
1：ハードロームブロック（～3cm）混じりの10YR3/2黒褐土　締まる

050・051号D-D'
1：ハードロームブロック（～5cm）・焼土粒・炭化物粒混じりの10YR3/2黒褐土
よく締まる
2：ハードロームブロック（～5cm）主体土
10YR3/2黒褐～4/3にぶい黄褐土混じる　締まる
3：ハードロームブロック（～5cm）混じりの10YR3/2黒褐～4/3にぶい黄褐土
炭化物が多く混じる　やや締まる　粘性あり

第7図　004号台地整形区画および周辺遺構土層断面図

掘立柱建物跡群（第６・13・14図 図版２・3）

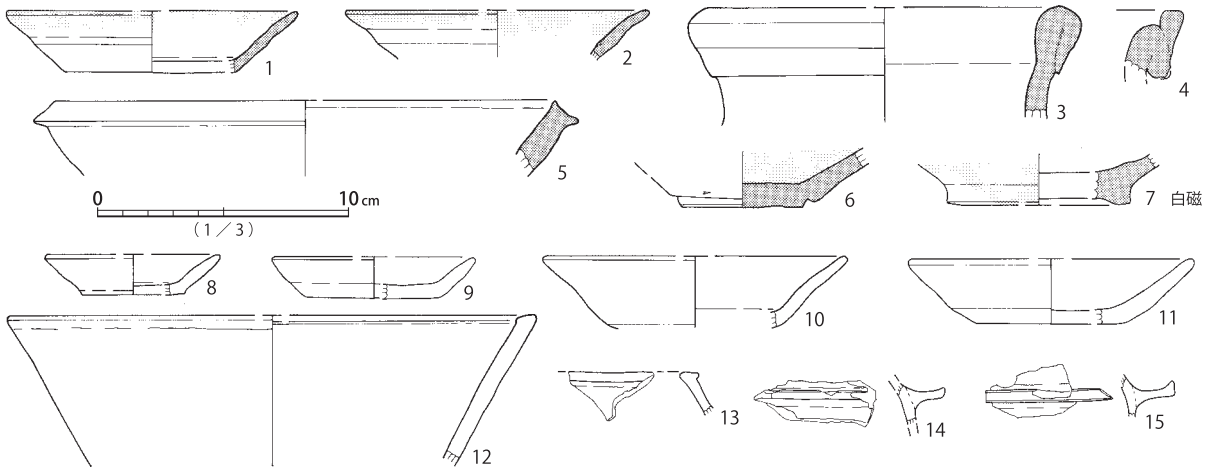
2×3間のA、1×3間のB・C、計3棟の円形掘形を持つ掘立柱建物が、004号区画の方形プランに合致する配置で検出された。3棟はほぼ同規模で位置関係からそれぞれ先後して建てられたものと見られる。規模はA＞C＞Bという序列である。なお、各柱穴は小ピットとして掘り始め徐々に規模が拡大するという調査過程を経たためいずれも土層断面図は作成していない。覆土はハードロームブロックが多い今回調査区通有のもので、一部の上層凹面に焼土・炭化物の堆積が認められた。

掘立柱建物跡A　（第13図）　主軸方位：N-30.5°-E

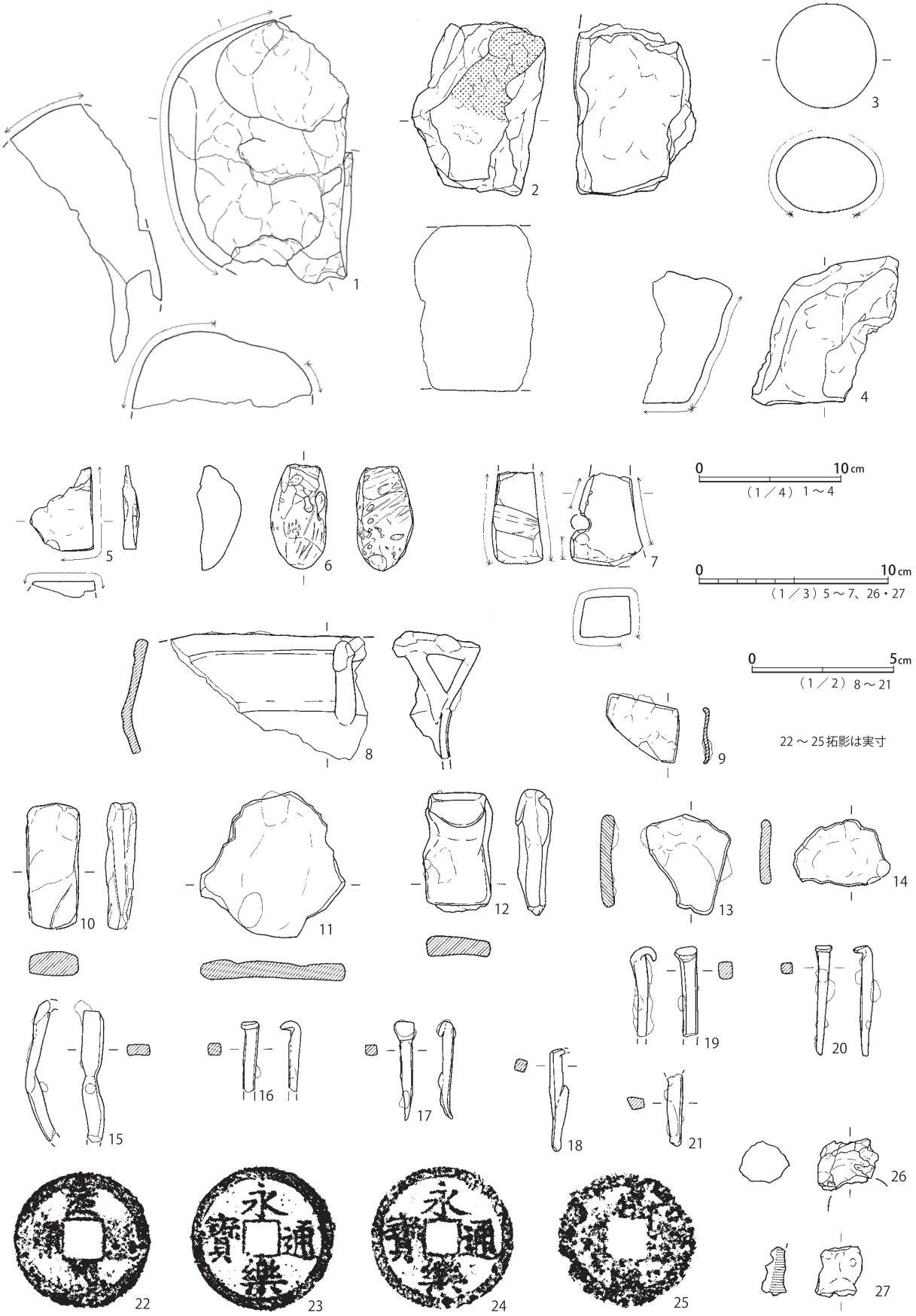
柱穴は上端4～50cm、下端2～30cm程度の規模で、上面は円形から隅円方形を呈する。底面には明確な柱痕跡は確認できなかった。梁間には主柱穴より小型の柱穴があり、若干推定線から外れるが、これらを加え、2×3間の建物を推定した。

梁間は3.51m、桁行は6.26mで、11×20尺、12×20尺、12×21尺いずれかのプランと思われる。梁：桁は1：1.78、面積は22.0㎡である。

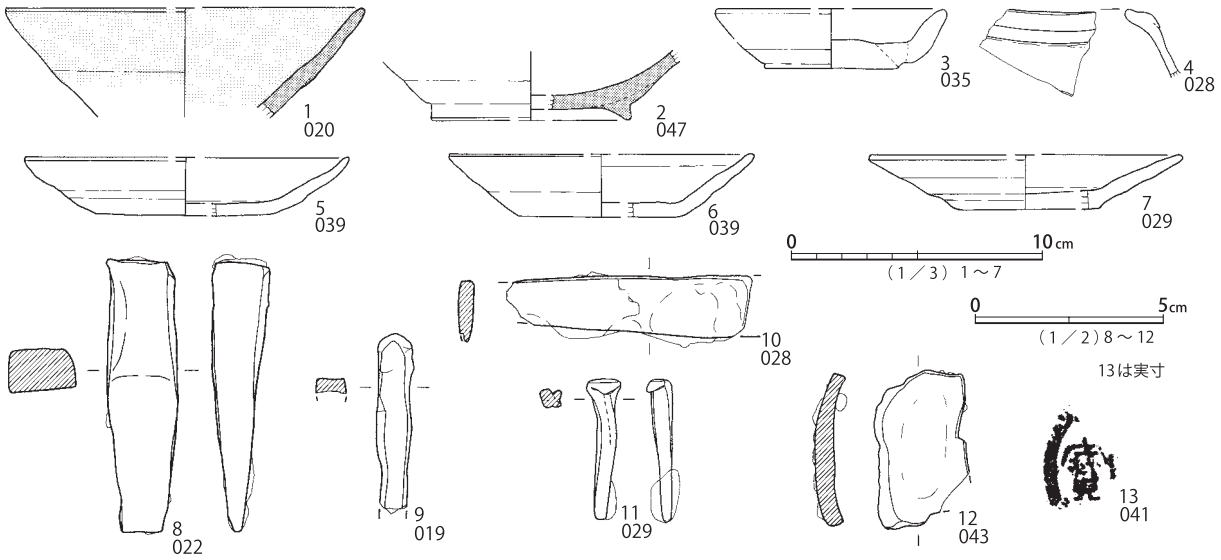
各柱間は図のとおりで、梁間は平均1.76m（6尺）、桁行は平均2.1m（7尺）である。



第8図　004号出土土器実測図



第9図　004号出土遺物（石製品・金属製品・鉄滓）実測図・拓影図



第10図　004号周辺遺構出土遺物実測図・拓影図

柱穴の深さは梁間の小さい穴jを除いて、7～80cm程度で一定する。平均は78cmである。柱穴の切り合い、柱痕跡とも不明瞭で、同一位置での建て替えは不明である。

030号地下式坑と接する位置に柱穴iが位置する事実から、030号は掘立柱建物跡Aより後に掘削されたと考えるのが自然である。

掘立柱建物跡B　（第14図）　主軸方位：E-26.5°-S

柱穴は上端4～50cm、下端2～30cm程度の規模で、上面は不定円形、下面は隅円方形を呈する。明確な柱痕跡は認められなかった。

梁間1間×桁行3間の構成、梁間3.04m、桁行5.62mで10×18尺のプランと思われる。梁:桁は1:1.85、面積は17.1㎡である。東側桁方向は建物Aの東側梁方向とほぼ一致する。

各柱間は図のとおりで、梁間は平均3.04m（10尺）、桁行は平均1.87m（6尺）。柱穴の深さは平均で76cmで、d・e・fが60cm台のほか、a・b・c・g・hが78～96cmとやや深くなっている。仮に用材の調整を反映しているとするなら、建物の変遷における転用材の利用を示唆するのかもしれない。

柱穴g・hはそれぞれ隣接して柱穴状の穴があるため、建物Bが同位置で建て直された再建築も考えられるが、積極的に全体的な建て直しを示唆するわけではなく、副え柱や部分的な改修に伴う可能性も考えられる。

柱穴c・dの覆土上層には焼土・炭化物の堆積が認められた。埋積後の柱穴の凹みに火災等で発生したものが溜まったと考えられる。廃絶した後に焼土が発生する状況があったことを示唆する。

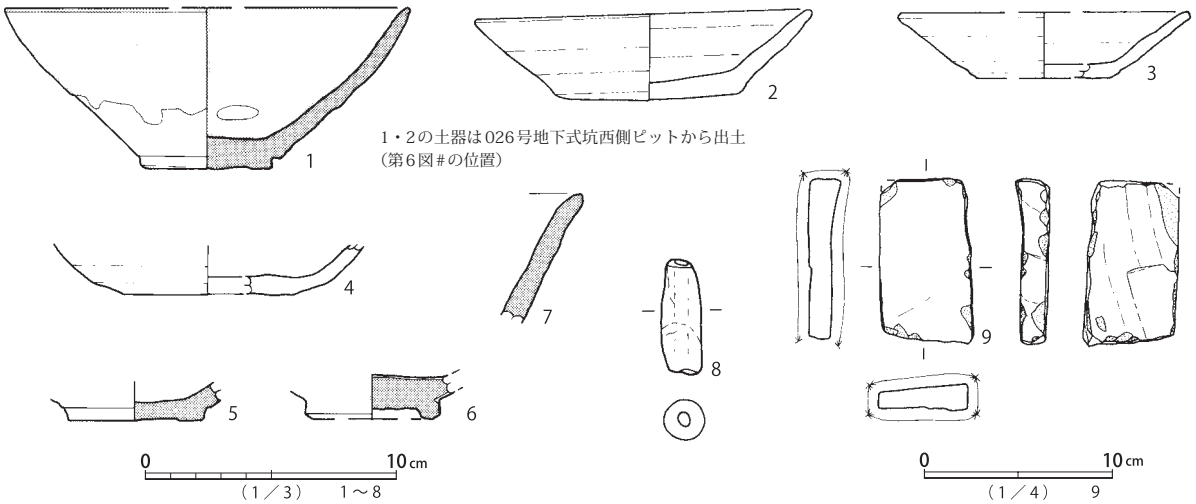
建物BはCと同時存在することはありえないため、先後関係にあるはずだが、どちらが先行するか、確たる根拠はない。建物AはBとは同時存在可能だが、Cとは不可能である。するとCは単独で配置されていたことになり、この建物群は1棟でも成り立つ機能が与えられていたと推察できる。

すなわちA・Bも並存可能ではあるものの、それぞれ独立した時間幅をもって機能していたものと考えておきたい。

掘立柱建物跡C　（第14図）　主軸方位：E-28°-S

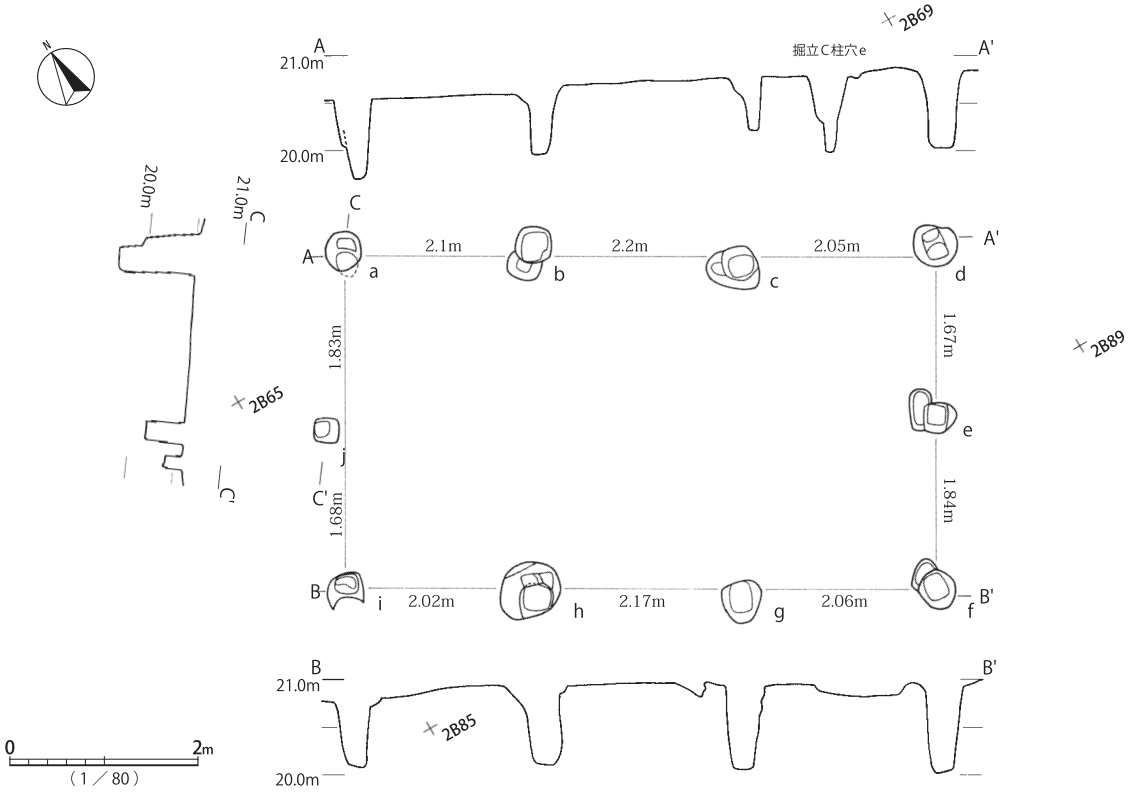
梁間1間×桁行3間の建物と推定した。梁間3.21m、桁行5.84mで、10×18尺あるいは11×20尺のプランと思われる。梁：桁は1：1.82、面積は18.7㎡である。主軸方位はほぼ建物Aと直角の関

第11図　004号区画内主要遺物出土地点



（セ493確認調査　小橋2013他より）

第12図　確認調査出土遺物



第13図　004号区画内掘立柱建物跡A遺構図

係になる。建物Bとは同時存在できない。

各柱間は図のとおりで、梁間は平均3.21m（10尺）、桁行は平均1.94m（6尺5寸）である。

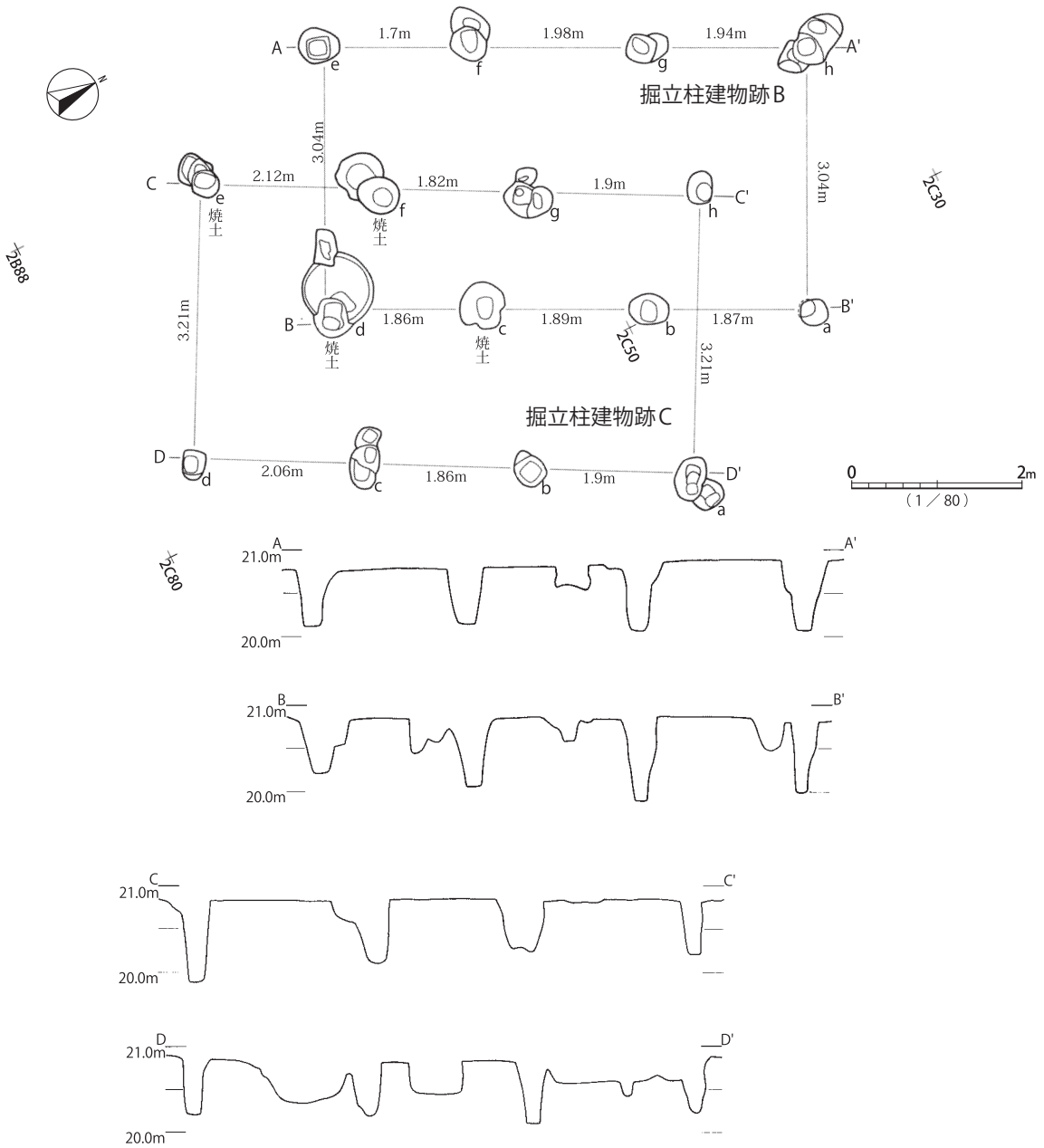
柱穴は上端4～50cm、下端2～30cm程度の規模で、上面は円形から隅円方形を呈する。柱穴gを除き、明確な柱痕跡は確認できなかった。柱穴の深さは平均で70cmだが、柱穴eのみ95cmと深い。

032号小竪穴、026・027号地下式坑が柱間にちょうど納まる配置になっているが、直接の切り合い関係はない。可能性としては地下式坑入口を施設に含む建物であったとも考えられるが、026号・027号の竪坑は50cm程度の階段状のもので、地下式坑の機能時、建物Cの壁面内から出入りするのは難しかったものと思われる。仮に壁が構築されておらず、屋根も東側の地面に葺き下ろされていたとすれば、外からの視線や雨水の流入を阻止するには好都合だったかもしれない。しかし、他の2棟は地下式坑竪坑の覆い屋としての機能は果たしていたようには見受けられないため、建物Cについても同じく、無関係と推定したい。

建物Cに接する027号地下式坑は、床面に炭化物・焼土が面的に検出されていることからすると、区画内で火災等が発生した影響を受け廃絶したと見られることから、建物Cの存続時期以外の建物Aあるいは建物Bに伴うことが想定できる。

008号土壙墓　（第15・16図　図版2・5・17）

004号区画北東隅付近に位置する1.12×0.82mの隅円長方形の土壙墓で、人骨1体が検出された。掘形は区画東辺に長軸を合わせるかたちで、傾斜面の下に掘り込まれている。人骨は南頭位の横臥屈葬で、歯と大腿骨付近のみが遺存していた。骨は遺存不良で土中で著しく軟質化していた。歯は切歯2本・臼歯5本と砕片が認められる。臼歯の遺存部の最大幅は9mmで、全体的に小さいが咬合面がかなり水平磨耗しており、成人と見られる。帰属時期を示す共伴遺物は得られていない。



第14図　004号区画内掘立柱建物跡B・C遺構図

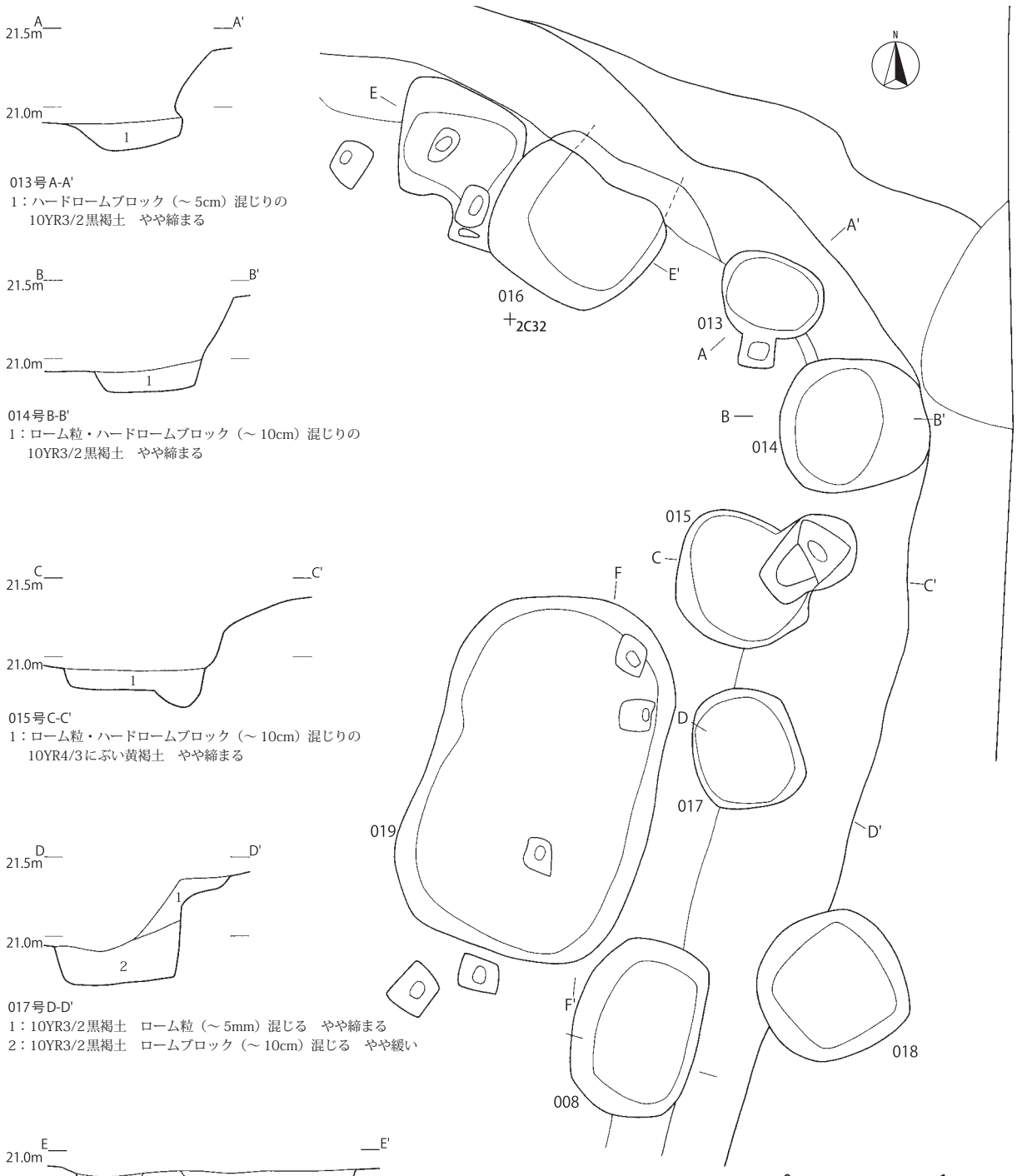
008号周辺には013・014・015・017号と近い規模の土坑が検出されている。人骨は遺存していないが、土壙墓が含まれるのかもしれない。いずれも区画覆土を掘り込んだ跡はなかった。

026号地下式坑　（第17図 図版7・16）

階段状の竪坑、長方形の主室で構成される。全長2.75m、竪坑は1.09×1.04m、主室は1.92×1.24m、主室面積は1.92㎡である。竪坑から昇降するために主室壁面に足掛けの凹みが掘られている。004号床面からの深さは竪坑0.41m、主室1.34mと地下室としては難があるように感じられる。

覆土は、上層が天井崩落土に由来するハードロームブロックで、下位も人為的な埋め戻しによるものか、ハードロームブロック主体の粒径が大きく土壌化していない土で埋まっている。

天井崩落土は主室に落ち込んで堆積していた。崩落に伴って地上（004号床面）に生じた凹みに堆積した土はハードローム層に近い土で、当初、明確な遺構覆土とは認識できなかった。平面検出時は



013号A-A'
1：ハードロームブロック（～5cm）混じりの
10YR3/2黒褐土　やや締まる

014号B-B'
1：ローム粒・ハードロームブロック（～10cm）混じりの
10YR3/2黒褐土　やや締まる

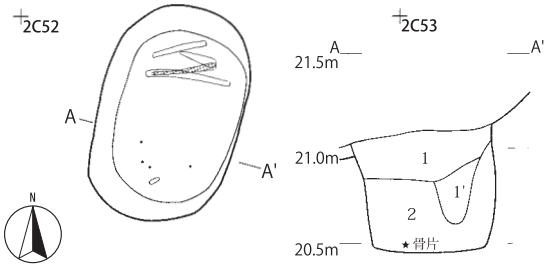
015号C-C'
1：ローム粒・ハードロームブロック（～10cm）混じりの
10YR4/3にぶい黄褐土　やや締まる

017号D-D'
1：10YR3/2黒褐土　ローム粒（～5mm）混じる　やや締まる
2：10YR3/2黒褐土　ロームブロック（～10cm）混じる　やや緩い

016号E-E'
1：10YR3/2黒褐土混じりのロームブロック主体土　やや緩い
2：10YR4/2灰黄褐土　ローム粒（～1cm）混じる　緩い
3：10YR4/1褐灰土　炭化物・焼土粒混じる　やや緩い
4：ロームブロック（～5cm）の混じりの3層
5：ロームブロック（～15cm）主体の10YR4/2灰黄褐土　緩い
6：10YR4/3にぶい黄褐土　ローム粒・ブロック混じる　やや締まる

019号F-F'
1：10YR3/2黒褐土　ロームブロックの少ない緩い層
2：10YR4/4褐土　ロームブロック（～5cm）・ローム粒多い　やや締まる
3：10YR4/3にぶい黄褐土　ロームブロック（～10cm）が混じる　やや締まる

第15図　004号区画北東部遺構図



008号A-A'
1：10YR3/1黒褐土　ローム粒（～3cm）混じる　やや緩い
2：ハードロームブロック（～15cm）主体の10YR3/1黒褐土
　最下層に人骨片あり　やや締まる
1'：ローム粒の多い1層　やや緩い

第16図　008号土壙墓人骨検出状況・土層断面図

色調の変化が不明瞭だった。

主室内は天井崩落土と竪坑からの流入土で充満しており、空隙は少なかった。人為的な廃絶処理が行われたことを反映するのかもしれない。

天井崩落土のハードロームブロック主体の覆土が徐々に締まった結果、掘形に沿った浅い窪みが生じたと見られるが、その窪みの堆積土は、周辺の004号平坦面とあまり変わらないほど締まっており、026号廃絶後にも平坦面が機能していたことを示唆する。すると026号の機能時は区画の最終段階ではないことも想定できる。また、ほぼ同規模・同形の027号とは軸を揃えて隣接することから、同時に構築された可能性が考えられる。

出土遺物にはカワラケ小片と瀬戸美濃縁釉小皿片（第17図1）がある。後者は後Ⅳ期（古）と見られ、遺構の廃絶以後の一時期を示すと考えておきたい。

027号地下式坑　（第17図　図版7・16・17）

階段状の竪坑、長方形の主室で構成される。全長3.14m、竪坑は1.11×1.05m、主室は2.19×1.58m、主室面積は2.45㎡である。竪坑から昇降するために主室壁面に足掛けの凹みが掘られている。004号床面からの深さは、竪坑0.55m、主室1.26mと026号と近似する。

覆土は、天井土が崩落し主室に充満した状況を示す。主室床面直上には竪坑付近から炭化物・焼土の広がりが検出された。炭化物はアシあるいはワラなどの植物質の形状を残すもので、面的に認められた。葭簀や敷物などであった可能性がある。

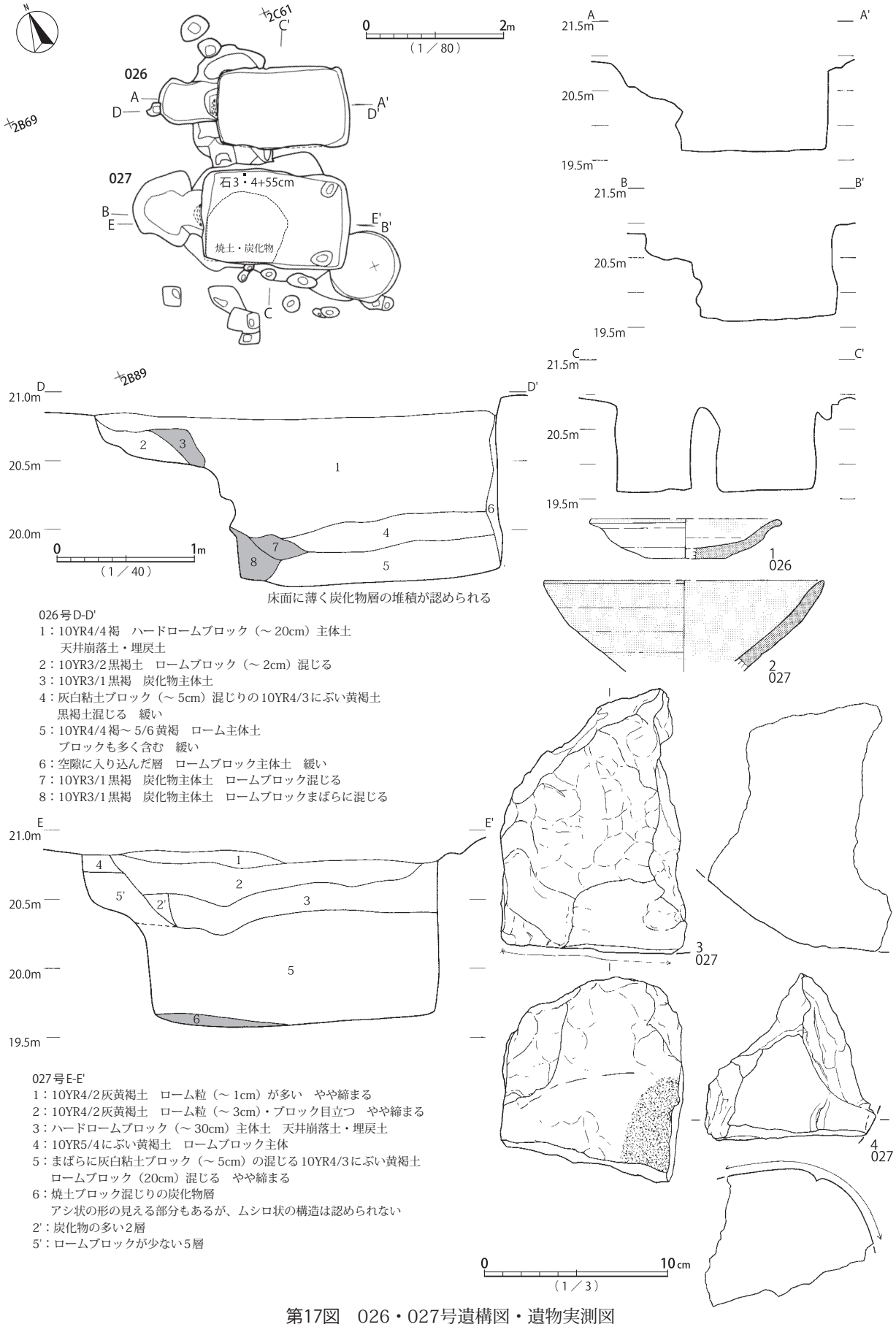
炭化物の検出は天井崩落前に004号区画から焼土・炭化物がもたらされたことを示しており、開口時に004号区画内で火災が起きたことを強く示唆する。よく似た形状で隣接する026号地下式坑と同時期に機能・廃絶した可能性がある。

出土遺物の比較から時期差を見出すならば、火災を示唆する027号からは古瀬戸後期様式、後Ⅰ～Ⅱ期と見られる平碗小片が出土しており、026号より先行する可能性がある。ただ、いずれも小片であり確実とは言い難いため、やはり026・027号はほぼ同時期に存在、廃絶したと考えたい。

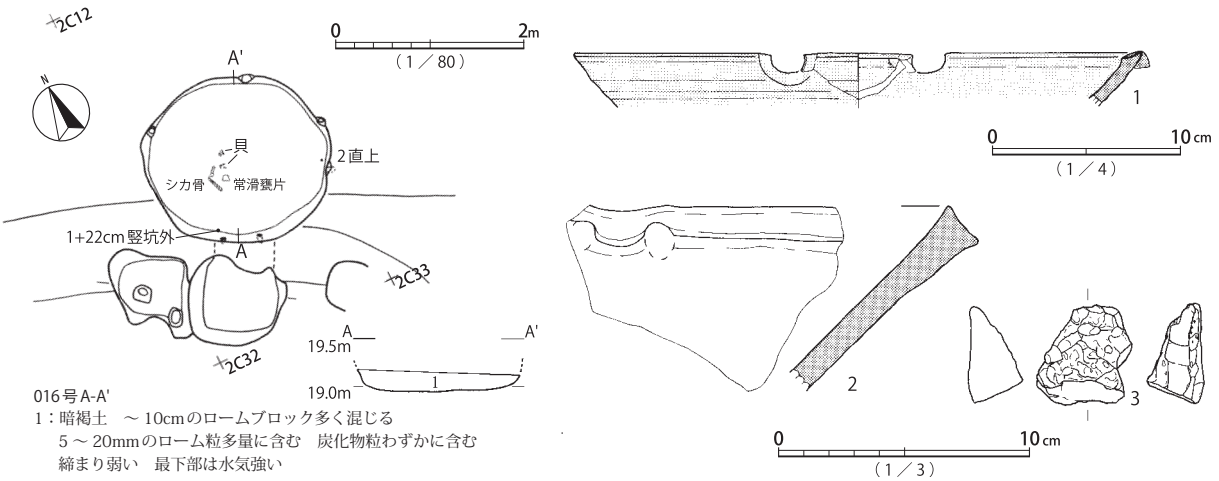
また、金床石あるいは台石の破片（第17図3・4）が埋土の比較的上位で出土していることから、区画の機能に変化が生じる機会と本遺構の廃絶が関連する可能性が考えられる。具体的には、区画内建物が焼亡した際には開口していたが、それを機に埋め戻され、区画内あるいは外に別の地下式坑が設けられたという経過を推定できる。なお、関係はわからないが、確認調査の際、竪坑西側のピットから瀬戸美濃平碗（第12図1　後Ⅱ期）とカワラケ（同2）が出土している（小橋他2013）。

016号地下式坑　（第15・18図　図版6・16・18）

全長は2.86m、竪坑は隅円方形で1.09×1.04m、深さ1.07m、主室の平面形は楕円形、2.00×1.78m、深さ1.95m、主室床面積は2.36㎡である。004号区画北辺東端付近に位置し、区画外北方に向けて主室が掘り込まれていた。主室はほぼ流入土で充満していた。004号覆土掘り下げ時に、016号竪坑付近に色調の淡い部分を認識していたが、明確な掘形がなかったため、上層からの不規則な撹乱土（木根跡充満土など）と考えた。しかし、016号竪坑が単なる土坑ではなく、地下式坑入口であ



第17図　026・027号遺構図・遺物実測図



第18図　016号遺構図および遺物実測図

ることから推察すると、区画埋没後に主室空隙に土・水分が流入するいわば「みずみち」だった可能性が高い。区画埋没後も016号主室空間は完全には充満していなかったこと、埋め戻しというよりは自然な埋没過程を経たことが推定できる。

遺物は、竪坑上面に、第18図1の瀬戸美濃卸目付大皿口縁片、主室床面直上に同2常滑片口鉢II類片が認められる。主室床面にはシカの中足骨（全長201mm）・中心足根骨・第三指基節骨（同45.0mm）・第四指基節骨（同47.5mm）・第三指中節骨（同33.2mm）・第四指中節骨（同33.5mm）・第二・第三足根骨（同18.6mm）・末節骨が繋がった状態で検出された。遺存不良で軟質化が著しい。他の部位は検出されておらず、有用部位を除いた残滓として廃棄されたものと考えられる。

030号地下式坑・096号火葬遺構　（第19図　図版7・16・17）

全長4.3m、竪坑は隅円方形で1.77×1.57m、深さ1.02m、主室の平面形は方形で2.87×2.69m、深さ1.94mである。主室の推定室内高は1.2m程度、床面積は3.43㎡である。

一部を残して天井が崩落した地下式坑で、入口は2段の階段状の竪坑である。竪坑周囲には図のとおり覆屋柱穴と見られるピット群がある。

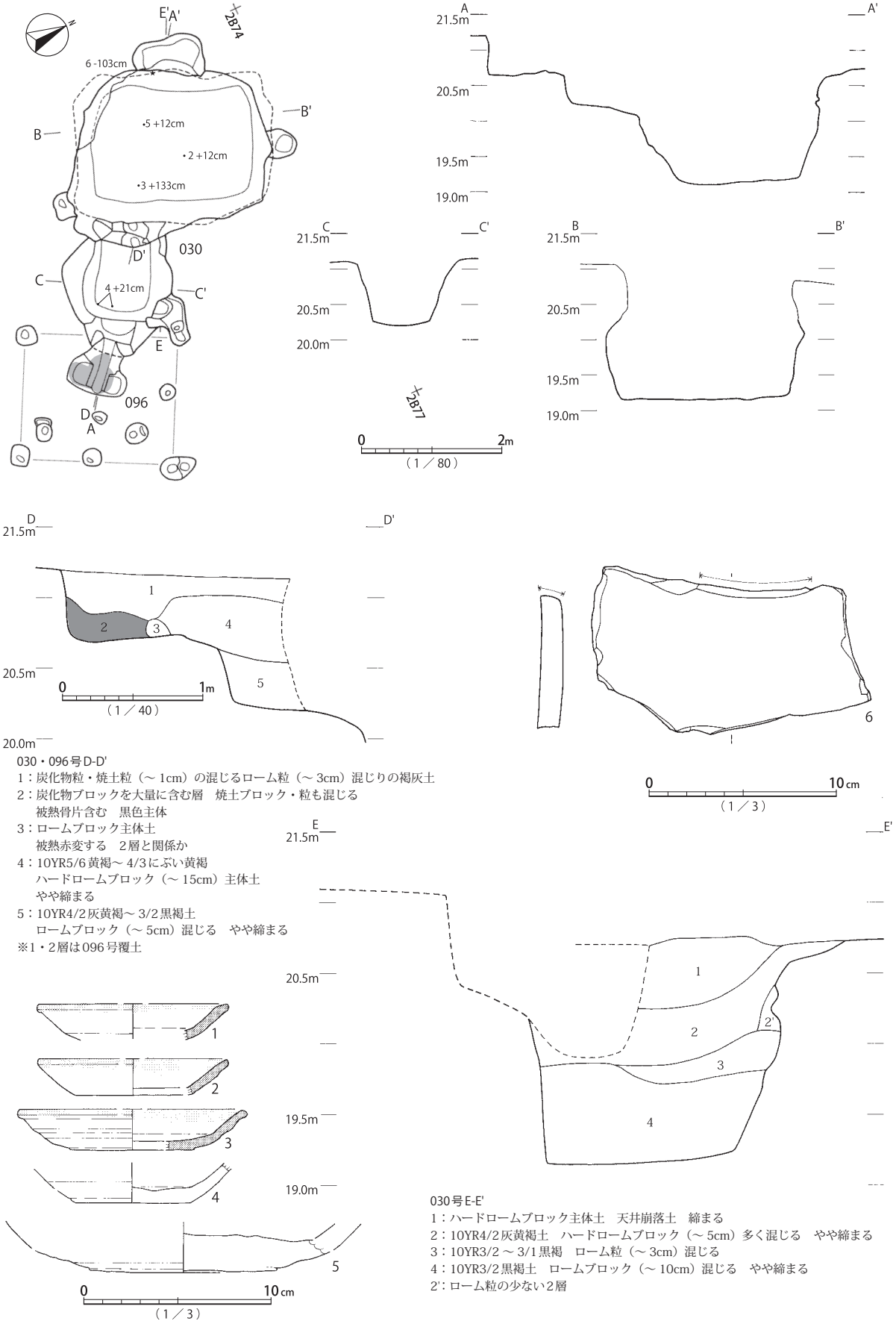
030号廃絶後は埋没した竪坑の窪みを利用して、096号火葬遺構が掘り込まれている。炭化物と被熱骨片が検出されているが、頭骨・歯・大腿骨など土壙墓では目立つ部位は認められず、掘り込みも小規模なため、墓ではなく埋葬骨を火で処理した遺構と考えられる。

030号出土遺物には瀬戸美濃後III期の縁釉小皿（第19図1・2・3）があり廃絶時期以後の一点を示すものと思われる。096号はこれを下る時期に帰属する。

034・040号竪穴　（第20図　図版5）

004号区画東壁と切り合う浅い小竪穴で034号→040号の順に構築されている。土層断面観察によるといずれも004号覆土に切られているため、004号区画に先行する遺構と見られる。区画が成立する前に遺構が分布していたことを示す資料である。両遺構とも遺物は乏しく図化していないが、カワラケ片と南伊勢系土器片が含まれており、区画とさほど時間差がない所産なのかもしれない。

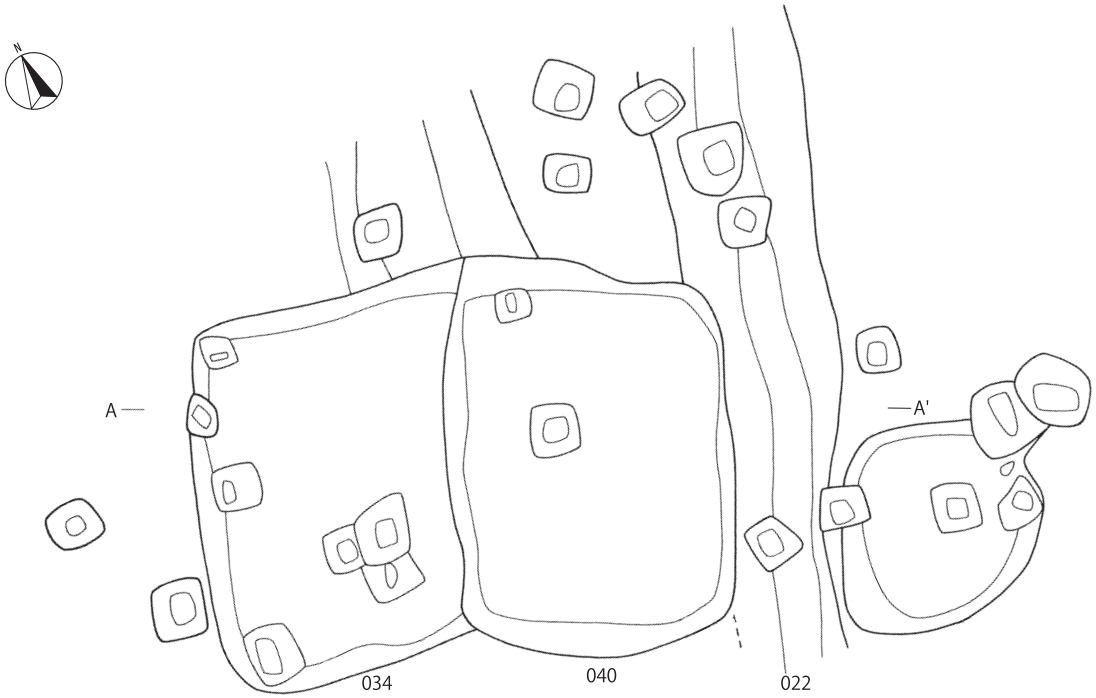
区画東辺に並行する022号溝状遺構は帰属時期を明確に出来ないものの、004号と共通する覆土を示すため、区画機能期間に当たる可能性もある。041号竪穴は042号地下式坑竪坑に接続しており一体の施設だったとも考えられるが、貝を含まない点など土層に違いがあるため別遺構とした。

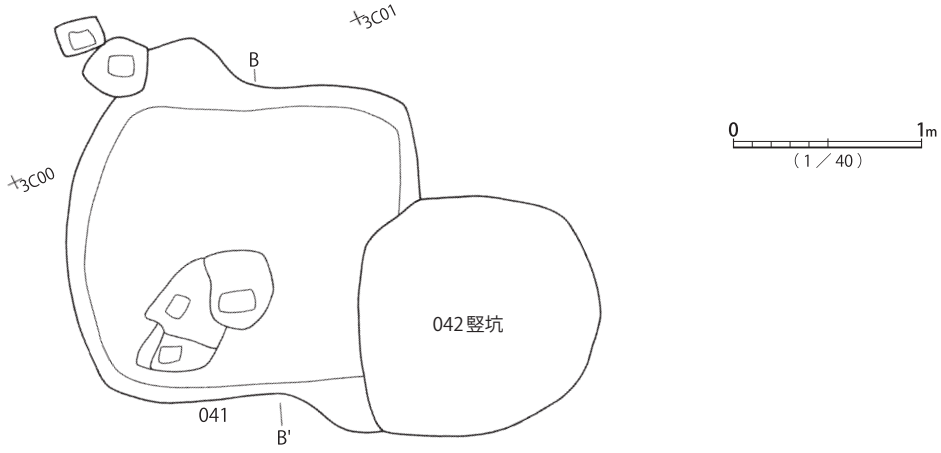


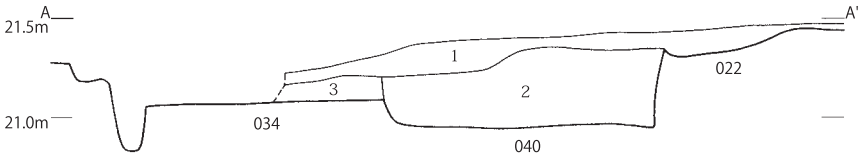
030・096号D-D'
1：炭化物粒・焼土粒（～ 1cm）の混じるローム粒（～ 3cm）混じりの褐灰土
2：炭化物ブロックを大量に含む層　焼土ブロック・粒も混じる
　被熱骨片含む　黒色主体
3：ロームブロック主体土
　被熱赤変する　2層と関係か
4：10YR5/6黄褐～ 4/3にぶい黄褐
　ハードロームブロック（～ 15cm）主体土
　やや締まる
5：10YR4/2灰黄褐～ 3/2黒褐土
　ロームブロック（～ 5cm）混じる　やや締まる
※1・2層は096号覆土

030号E-E'
1：ハードロームブロック主体土　天井崩落土　締まる
2：10YR4/2灰黄褐土　ハードロームブロック（～ 5cm）多く混じる　やや締まる
3：10YR3/2 ～ 3/1黒褐　ローム粒（～ 3cm）混じる
4：10YR3/2黒褐土　ロームブロック（～ 10cm）混じる　やや締まる
2'：ローム粒の少ない2層

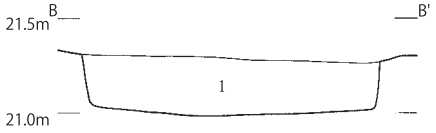
第19図　030・096号遺構図・遺物実測図





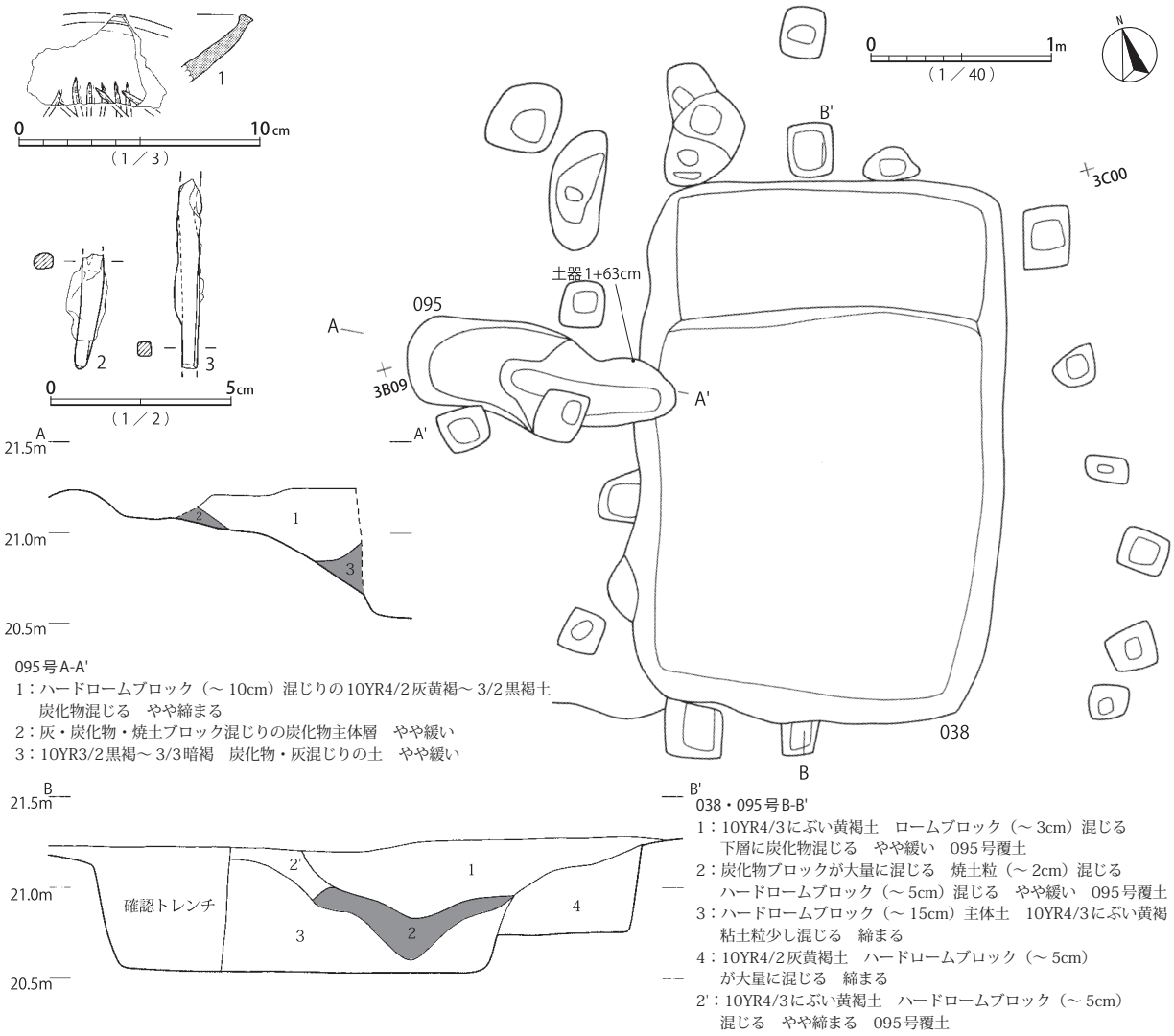


034・040・022号A-A'
1：10YR4/2灰黄褐土　ローム粒（～1cm）・ブロック（～5cm）混じる　やや締まる　004号覆土か
2：ハードロームブロック（～10cm）主体の10YR4/3にぶい黄褐～3/2黒褐土　黄灰粘土ブロックが少し混じる　040号覆土
3：ハードロームブロック（～5cm）混じりの10YR3/2黒褐土　034号覆土



041号B-B'
1：ハードロームブロック（～10cm）が多く混じる10YR4/2灰黄褐～3/2黒褐土
やや締まる

第20図　022・034・040・041号遺構図



第21図　038・095号遺構図・遺物実測図

038号竪穴・095号火葬遺構　（第21図 図版6・16・17）

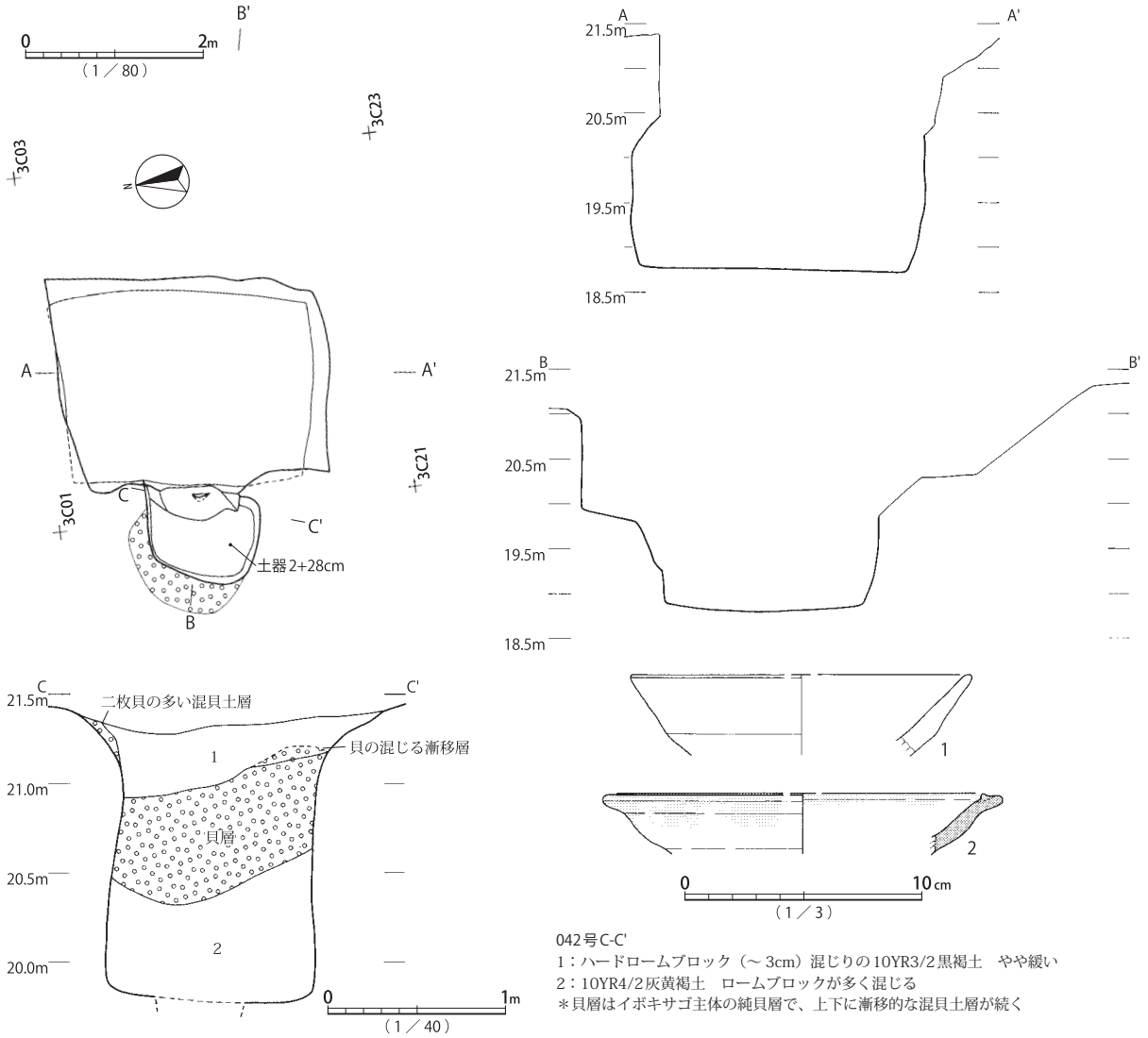
038号は004号区画南東隅に位置する竪穴遺構で、長軸一端が階段状を呈する。段差は竪穴内の施設ではなく、切り合う別遺構の可能性もある。周辺にはピットが見られるものの、長軸両端、中央付近に検出された穴（B-B'図化後に検出）以外は組み合わせが不明である。

覆土各層はいずれも埋め戻したようなハードロームブロックの多いもので、埋積したのち、西辺から095号火葬遺構が掘り込まれている。095号からは明確な骨片は確認されていないが、形状と炭化物・焼土の集中から065・096号と同様の火葬遺構と判断した。

038号の機能は不明だが、区画内で埋め戻されている点は026・027号と共通するので、同時期の遺構なのかもしれない。出土遺物は第21図1の瀬戸美濃卸皿片（中I期）があるものの、区画に先行する古い一群の遺構に由来する可能性がある。

042号地下式坑　（第22・23図 図版8・16・18）

階段状の竪坑、長方形の主室で構成される。004号区画外にあるように見えるが、北辺東部の016号と同じように区画から東側に向けて掘り込まれた可能性も考えられる。主室天井部が遺存しており、竪坑のみが平面検出できた。天井土の除去後、堆積土が崩落したため土層断面図は作成できなかった。



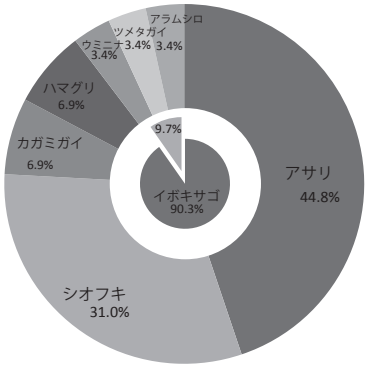
第22図　042号遺構図・遺物実測図

全長3.57m、竪坑は円形で1.26×1.24m、主室は3.11×2.57m、主室面積は5.85㎡である。竪坑から昇降するために主室壁面に足掛けの凹みが掘られている。検出面からの深さは、竪坑1.52m、主室2.66mと今回検出された地下式坑では最も深い。外周遺存部から主室の天井は床から1.6mを超える高さにあったものと思われる。

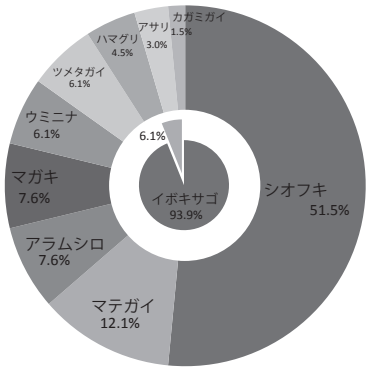
遺物は主室中央床面から出土したカワラケ片（第22図1）と竪坑覆土下層から出土した瀬戸美濃卸皿片（同2　後Ⅲ期）があり、後者が廃絶時期を示すと考えられる。

竪坑の中～上層に充満する貝層は96.6%がイボキサゴで占められる特徴的な組成を示す（第23図）。

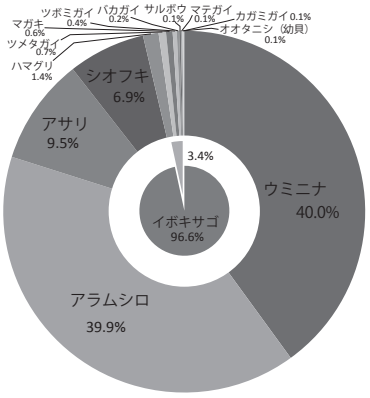
なお、今回調査で検出されたまとまった貝層の分類からは、077号地下式坑の竪坑内で検出されたブロックを除き、同様にイボキサゴが大部分を占める組成が浮かび上がっている。077号はカガミガイとオオタニシで4割を占める組成であり、他とは異なった背景があるものと思われるが、いずれも生活残滓の廃棄場所として埋没中の地下式坑が利用された例と考えられる。004号区画内の貝層021号はその検出位置から、区画廃絶後に生じた可能性が高いので、区画廃絶後の021号貝層（第8図図版5）の組成と似た001号落ち込み（第40図）・066号土坑（第27図）の貝層も近い時期に位置づけられるかもしれない。



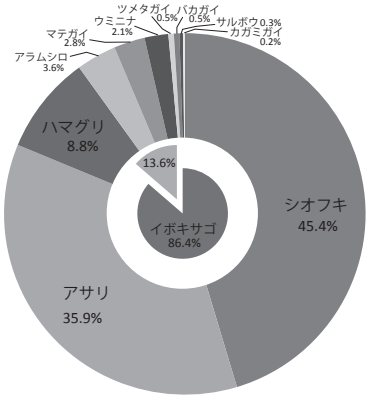
001号落ち込み



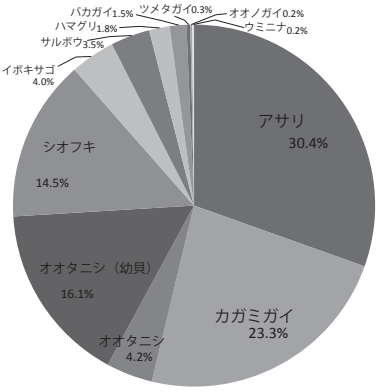
021号区画内貝層



042号地下式坑



066号土坑



077号地下式坑

遺構	腹足綱								二枚貝綱																	
	イボキサゴ	オオタニシ	オオタニシ幼貝	ウミニナ	ツボミガイ	ツメタガイ	アカニシ	アラムシロ	サルボウガイ		マガキ		アサリ		カガミガイ		ハマグリ		シオフキ		バカガイ		マテガイ		オオノガイ	
									L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
001	269			1		1		1					9	13	2		2		9	2						
021	1018			4		4		5			5	1	1	2	1		3	2	34	31			3	8		
042	38777		1	545	5	9		544	2	2	8	6	130	113	1		19	19	94	73	3	1	2	1		
066	3879			13		3		22	2				191	220	1	1	36	54	278	264	3		10	17		
077	24	25	97	1		2			16	21			183	180	140	134	11	11	78	87	9	5				1

遺構	サンプル		水洗前重量(g)	水洗後重量(g)				土壌重量	混土率	分析率（重量比）	貝殻		
	全数	対象		10mm	4mm	1mm	計				総重量(g)	カウント対象貝重量（g）	破砕率
001	2	1	10,000	261	372	774	1,407	8,593	85.9%	57.0%	935.9	166.4	82.2%
021	2	1	6,100	1,078	905	378	2,361	3,739	61.3%	50.8%	755.0	475.4	37.0%
042	82	6	569,100	330,650	22,172	28,300	381,122	187,978	33.0%	9.9%	36,516.8	33,706.2	7.7%
066	15	7	115,600	8,731	5,391	6,072	20,194	95,406	82.5%	54.4%	11,305.8	4,274.4	62.2%
077	5	5	39,700	9,104	1,141	1,936	12,181	27,519	69.3%	100.0%	12,181.0	6,802.8	44.2%

遺構	土器			フジツボ		カニ類	ウニ類	礫			微小貝
	10mm	4mm	1mm	4mm	1mm			10mm	4mm	1mm	
001	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
021	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
042	3	1	0	6	50	33	7	1	5	32	33
066	6	6	0	0	0	0	0	0	1	4	5
077	1	1	2	0	1	0	0	0	0	5	5

第23図　遺構検出貝層の組成

024・025号竪穴周辺遺構　（第24・25図　図版3・8～10・16～17）

043号溝状遺構に囲まれた空間に1辺2m前後の竪穴遺構と方形土坑が切り合わず隣接して並ぶ一画がある。このうち024・025号は床面に検出された焼土、中央に掘られた深いピット（覆土は有機質が多く黒みが強い）の存在が特徴的である。出土遺物は025号においてカワラケ片・常滑甕片（6b型式）・砥石片が得られている（第24図）。

馬小屋遺構の研究成果（篠崎2010）によれば、馬小屋を構成する竪穴部床面の穴は、肥料として用いられたウマの尿を溜める機能を有していたとされ、また、虫除けのために草を燃焼した痕跡（焼土等）が認められる場合があるとされる。馬小屋遺構の認定基準には、「①カマド・炉はない」「②竪穴が設けられている」「③床面は傾斜している」「④尿溜めがある」「⑤張り出しがつくものがある」「⑥スロープが設けられているものがある」が挙げられ（篠崎2010）、すべての条件ではないが、特に024号は断面図に表れるとおり床面中央ピットに向かって緩く傾斜している点、025号は張り出しを持ち外周がスロープ状に掘り下がる点も含め一致する点があり、周辺の小ピットによる小屋組と組み合わさり馬飼育施設を形成していた可能性が示唆されており興味深い。他の小竪穴・方形土坑にも中央ピットが認められるものは存在するが、024・025号ほど深く明瞭なものはなく、今次調査区では円形に近いピットは方形基調の中で例外的なものであり、柱穴とは断定しがたいと思われる。両遺構は、四街道市権現堂遺跡で検出された、中央へ傾斜する床面と2つのピットと張り出しを持ち馬小屋遺構の特徴を示す570号室状遺構（高橋2004）に類する遺構であることを指摘しておきたい。

また、遺構検出時、024・025号の並ぶ方向から谷に向けて（2条のゴボウ穴列沿い）は、浅いくぼ地をなしていた。中世期の掘り込みも少ないため、現在の大堰池のある谷底平野近辺に推定できる水田域・湧水地点へ向かう生活道路として利用されていたのかもしれない。

004号区画の南辺と考える043号北辺溝の南側に、これに沿って柵をなしたと見られるピット列が推定できることは、これらによって限られた北方に人の生活空間が展開していたことを示すと言える。077号地下式坑におけるウマ骨の検出を考え合わせると周辺遺構で厩をなしていた可能性も無視できないと思われる。馬小屋の存否はいずれにしろ、帰属時期を示すような出土遺物が乏しいものの024・025号遺構と周辺は004号区画の生活空間と一体をなしていたと考えたい。

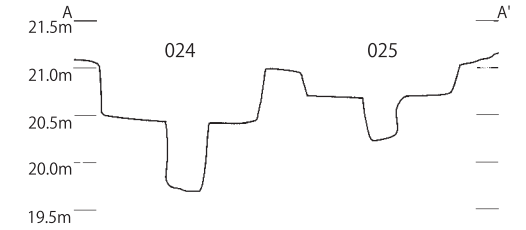
048号ピット　（第24・26図　表2）

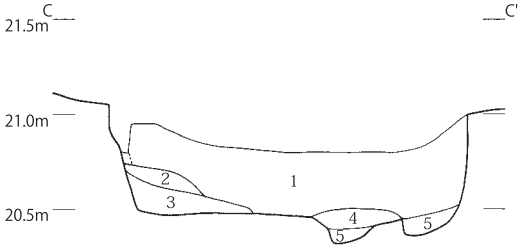
043号溝状遺構の東辺が北辺に折れ曲がる手前の東側で検出されたピットで、覆土中から24枚の銅銭が出土した。他に伴出遺物はなく時期は不明だが、ピット掘形は方形で他の中世遺構と類似することから同時期と見られる。銅銭の組成は表2のとおりで、004号区画の永楽通寶（1408年初鋳）より古相を示しているが、遺物の性格上そのまま時期差を表すか否かは決しがたい。

059・068号竪穴周辺遺構　（第27・28・31図　図版3・11・12・16～18）

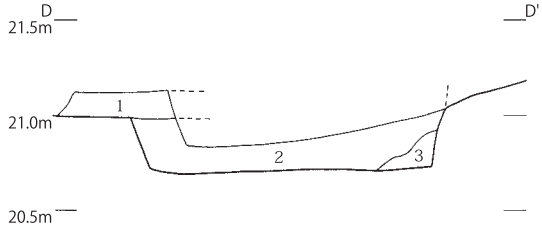
024･025号遺構の南方に方形竪穴･方形土坑がやや集中して分布する。最大の方形竪穴は068号で、長軸2.62×短軸2.04m、深さ0.94mの規模を示し、概算で5㎥近い容積を持つ。058・059・084・085号は土坑・竪穴が切り合うものの、軸がほぼ揃っており、群が無秩序に形成されたようには見えない。また、075・076・072号は、接するが切り合わない点でやはり意図的な配置に感じられる。これらが全体的に004号の方形区画に近似した方位を志向するのは､周辺の遺構群も含めてある程度、043号溝状遺構南辺と調査区南端の060号溝状遺構（第37図）に規定されていたことを示すと思わ

第24図　024・025号周辺遺構図・遺物実測図

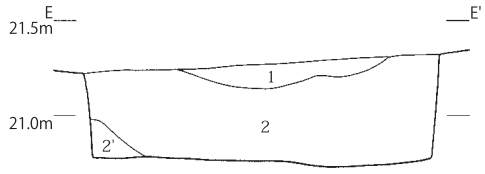




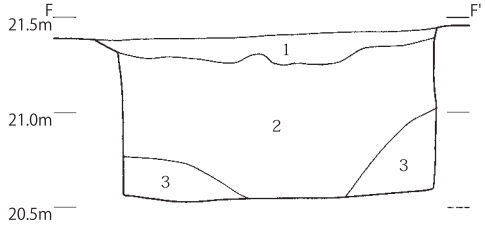
024号C-C'
1：5cm大のロームブロック混じりの10YR4/2灰黄褐土　やや緩い
2：灰白粘土ブロック主体土
3：10YR4/4褐　ハードロームブロック（～ 10cm）主体土
4：10YR5/6黄褐　ハードロームブロック主体土　灰白粘土混じる
5：10YR4/2灰黄褐土　ハードロームブロック（～ 3cm）混じる　緩い



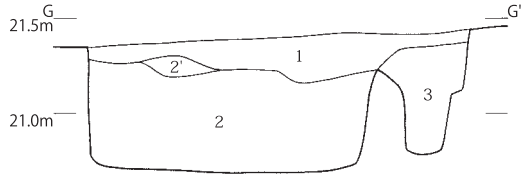
025号D-D'
1：10YR4/3にぶい黄褐土　ローム粒（～ 1cm）が混じる　やや締まる
2：10YR4/2灰黄褐土　ハードロームブロック（～ 10cm）が多く混じる　やや締まる
3：10YR4/2灰黄褐土



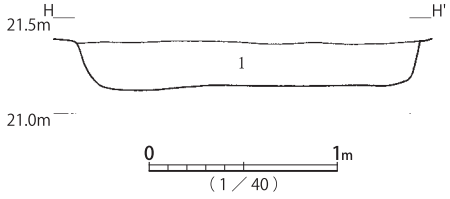
044号E-E'
1：10YR4/2灰黄褐～ 4/3にぶい黄褐土　ロームブロック・粒（～ 3cm）混じる　締まる
2：ハードロームブロック（～ 10cm）多く混じる　10YR4/3にぶい黄褐土　やや締まる
2'：ロームブロックの少ない2層



045号F-F'
1：ローム粒（～ 1cm）・炭化物微粒混じりの10YR4/2灰黄褐土　締まる
2：10YR5/6黄褐　ハードロームブロック（～ 10cm）主体土　やや緩い
3：10YR4/3にぶい黄褐　ハードロームブロック（～ 10cm）が多く混じる　やや緩い

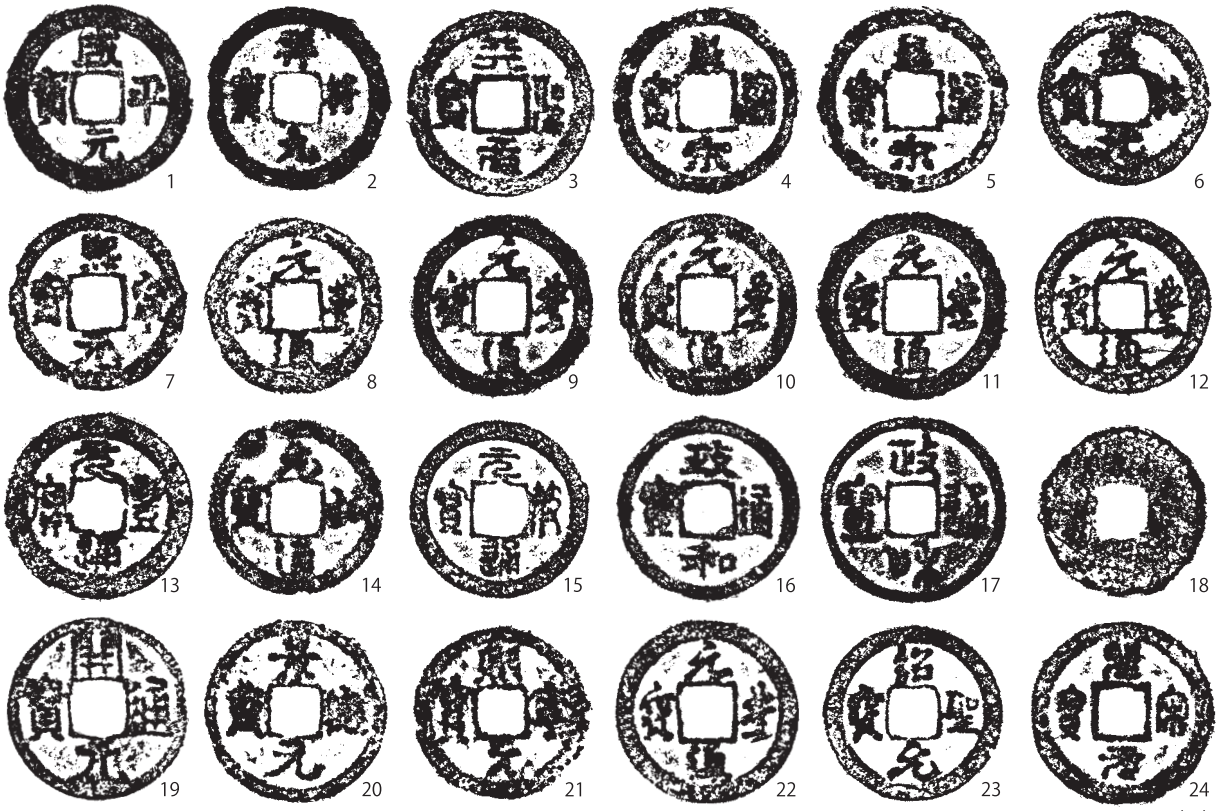


046号G-G'
1：10YR3/2黒褐土　ハードロームブロック（～ 3cm）がまばらに混じる　締まる
2：10YR4/3にぶい黄褐土　ロームブロック（～ 5cm）が多く混じる　やや締まる
3：10YR4/4褐　ハードロームブロック（～ 15cm）主体土　やや緩い
2'：10YR3/2黒褐～ 4/3にぶい黄褐土　漸移層



052号H-H'
1：ハードロームブロック（～ 5cm）を多く含む10YR3/1 ～ 3/2黒褐土　締まる

第25図　024・025号周辺遺構土層断面図



実寸

第26図　048号出土銭拓影図

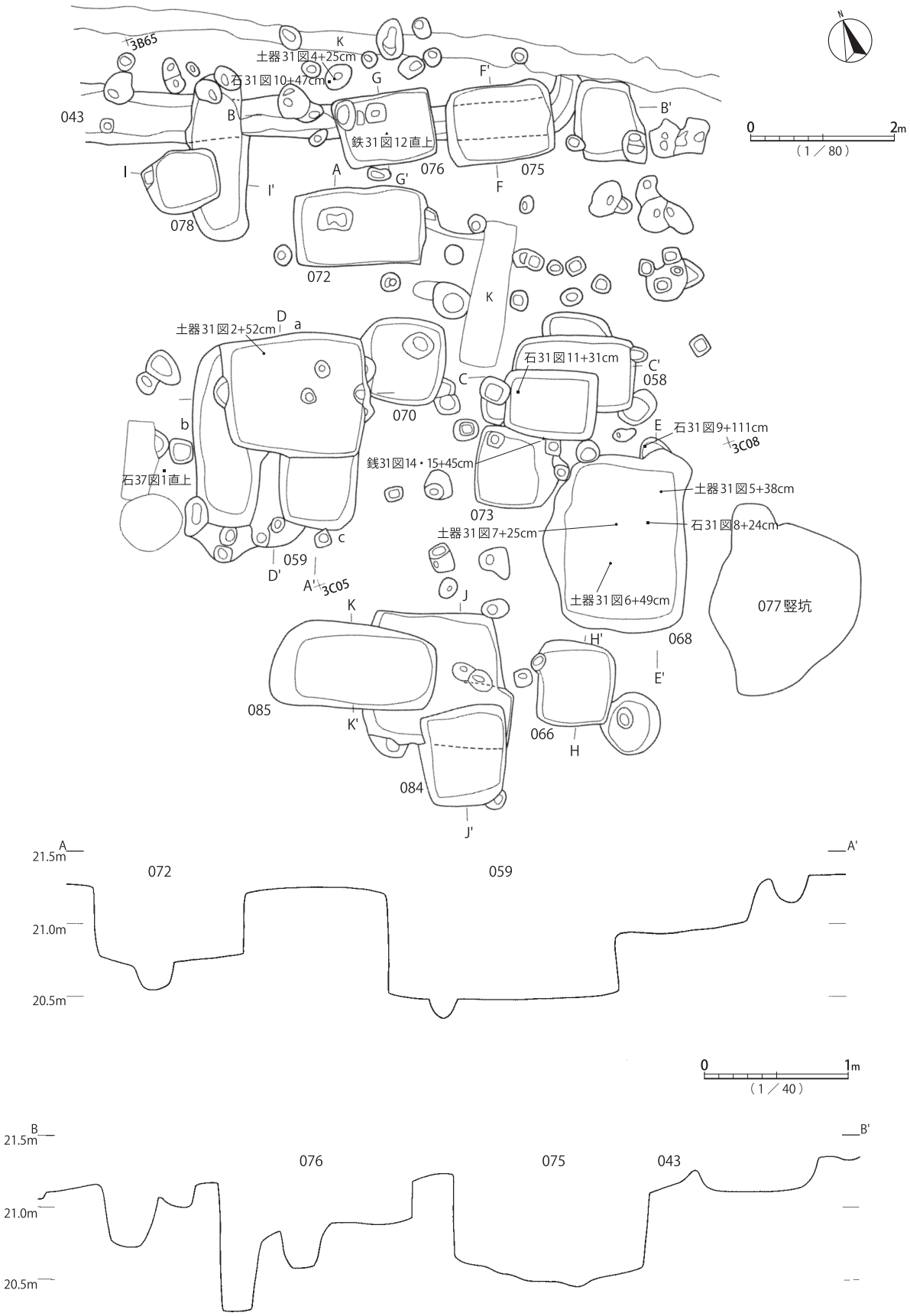
表2　出土銭貨一覧

図番号		遺構番号	注記	銭種	初鋳年	重量g	径mm
9	22	004	196	元符通寶	1098	3.1	24.0
9	23	004	205	永楽通寶	1408	3.9	25.4
9	24	004	205	永楽通寶	1408	3.5	25.1
9	25	004	123	無文不明	―	2.1	25.2
10	13	041	1	（政和通？）寶	―	0.5	1/4弱
26	1	048	1	咸平元寶	998	3.5	24.9
26	2	048	1	祥符元寶	1009	3.7	24.3
26	3	048	1	天聖元寶	1023	3.6	24.9
26	4	048	1	皇宋通寶	1038	3.4	25.0
26	5	048	1	皇宋通寶	1038	2.5	25.1
26	6	048	1	嘉祐元寶	1056	3.3	23.1
26	7	048	1	熙寧元寶	1068	3.2	23.7
26	8	048	1	元豊通寶	1078	3.1	23.8
26	9	048	1	元豊通寶	1078	3.6	23.9
26	10	048	1	元豊通寶	1078	2.9	24.3
26	11	048	1	元豊通寶	1078	3.1	24.8

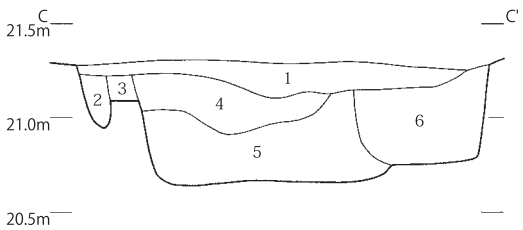
図番号		遺構番号	注記	銭種	初鋳年	重量g	径mm
26	12	048	1	元豊通寶	1078	4.0	24.0
26	13	048	1	元豊通寶	1078	3.3	25.1
26	14	048	1	元祐通寶	1086	2.7	23.6
26	15	048	1	元符通寶	1098	3.9	23.8
26	16	048	1	政和通寶	1111	3.8	24.3
26	17	048	1	政和通寶	1111	2.6	25.0
26	18	048	1	無文不明	―	2.1	22.0
26	19	048	2	開元通寶	960	2.9	24.7
26	20	048	2	景徳元寶	1004	3.2	24.4
26	21	048	2	熙寧元寶	1068	3.5	23.2
26	22	048	2	元豊通寶	1078	3.1	24.7
26	23	048	2	紹聖元寶	1094	3.6	23.8
26	24	048	2	聖宋元寶	1101	3.6	24.6
31	14	058	6	熙寧元寶	1068	2.8	23.2
31	15	058	6	元祐通寶	1086	3.4	24.3

表3　土製品一覧

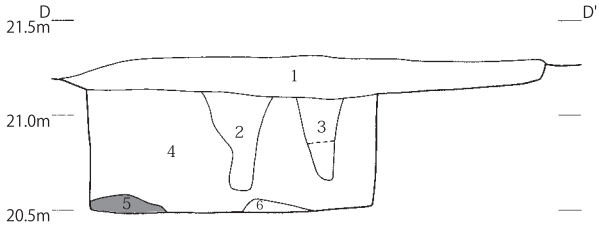
図番号		遺構番号	注記	種別	寸法cm					特徴
					長軸	短軸	高さ	重量g	その他	
19	6	030	030-4	転用砥石？	14.7	8.8	―	211.6	厚1.2cm	常滑甕体部片を利用した砥石か。破断面の一部が摩滅する。
31	13	058	058-1	管状土錘	4.6	3.2	3.2	38.9	孔径8mm	一端を欠損する土錘。長軸に貫通孔（直径8mm）あり。



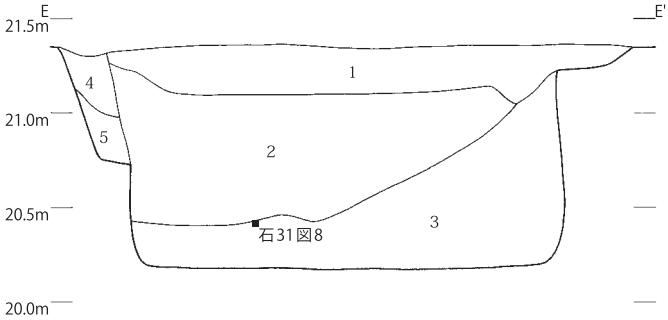
第27図　059・068号周辺遺構図



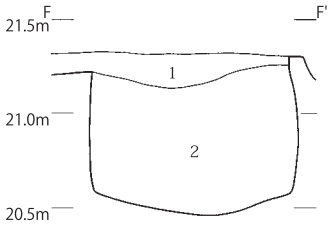
058号C-C'
1：10YR4/2灰黄褐土　ロームブロック（～3cm）多く混じる
　焼土・炭化物粒少し混じる　締まる
2：10YR4/2灰黄褐土　ロームブロック（～1cm）混じる　緩い
3：10YR4/2灰黄褐土　ロームブロック（～5cm）多く混じる　締まる
4：10YR4/2灰黄褐土　ロームブロック（～10cm）が主体　焼土粒がわずかに混じる
　よく締まる
5：10YR4/2灰黄褐～3/2黒褐土　ロームブロック（～10cm）が混じる　締まる
6：ハードロームブロック（～15cm）主体土　まばらに黒色土ブロック混じる　やや緩い



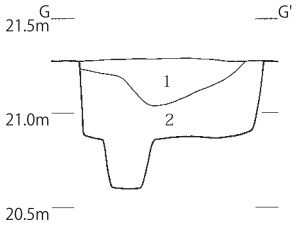
059号D-D'
1：10YR4/2灰黄褐土　やや締まる
2：10YR4/2灰黄褐～3/2黒褐土　やや締まる
3：2層に炭化物・焼土が混じった層　下部に密に認められる　やや締まる
4：10YR4/4褐土　ハードロームブロック（～10cm）主体　やや締まる
5：ハードロームブロック主体土に炭化物が大量に混じる　緩い
6：黄灰粘土ブロック主体土　炭化物が少し混じる　やや締まる



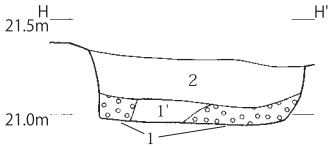
068号E-E'
1：10YR4/2灰黄褐～3/1黒褐土　炭化物・焼土粒混じる
　ロームブロック（～5cm）含む　やや締まる
2：ハードロームブロック（～25cm）主体土
　炭化物・焼土粒少し混じる　やや緩い
3：10YR4/3にぶい黄褐～3/2黒褐土
　ハードロームブロック（～20cm）が混じるものの小片が多い
　炭化物（～5cm）・被熱赤変したロームブロックが混じる　やや緩い
4：10YR3/1黒褐～3/2黒褐土　ローム粒（～5mm）混じる　やや緩い
5：10YR4/3にぶい黄褐土　ロームブロック（～5cm）混じる　やや緩い



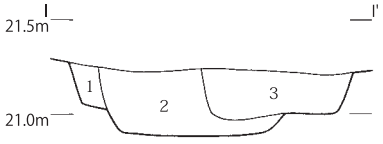
075号F-F'
1：10YR3/2黒褐土　ハードロームブロック（～2cm）
　締まる　043号溝覆土か
2：ハードロームブロック（～20cm）主体土
　10YR4/2灰黄褐土混じる　締まる
　下位ほどブロックが大きい



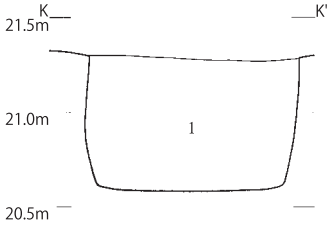
076号G-G'
1：10YR4/2灰黄褐～3/2黒褐土
　ロームブロック（～10cm）まばらに混じる　締まる
2：10YR4/3にぶい黄褐土
　ロームブロック（～10cm）が多く混じる
　やや緩い　下位ほどブロックが大きい



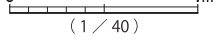
066号H-H'
1：10YR3/1黒褐　貝主体土　やや緩い
2：10YR4/3にぶい黄褐～3/2黒褐土
　ハードロームブロック（～5cm）が多く混じる
　やや締まる
1'：10YR3/1黒褐土
　ローム粒（～1cm）が少し混じる　やや締まる



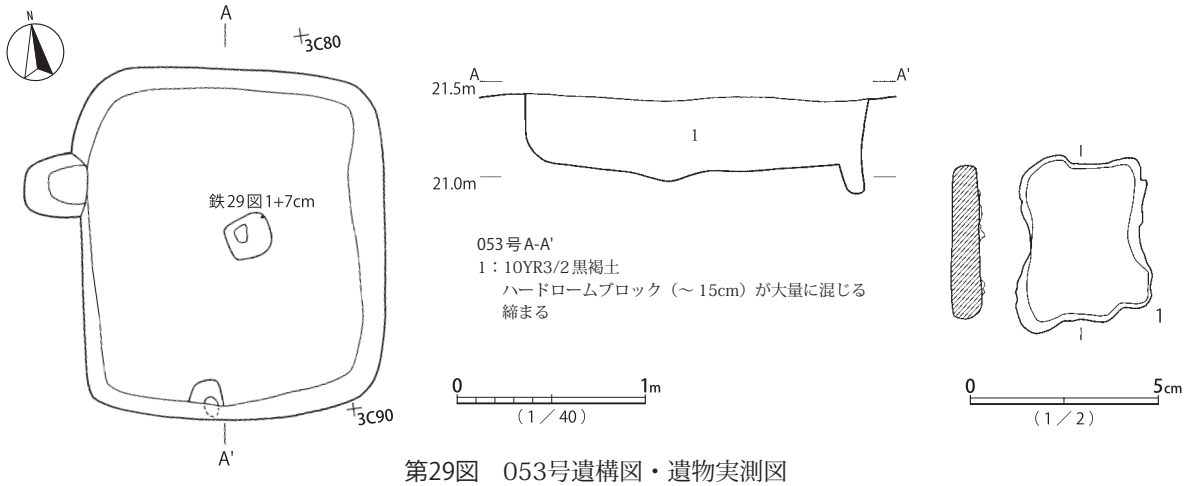
078号I-I'
1：10YR4/3にぶい黄褐土　ハードロームブロック（～3cm）混じる　やや緩い
2：10YR4/3にぶい黄褐土　ハードロームブロック（～5cm）が多く混じる　やや緩い
3：10YR4/2灰黄褐土　ロームブロック（～5cm）混じる



085号K-K'
1：10YR4/3にぶい黄褐土
　ハードロームブロック（～5cm）が多く混じる　やや緩い



第28図　059・068号周辺遺構断面図



第29図　053号遺構図・遺物実測図

れる。なお、043号溝南辺は075号･076号覆土の状況から、方形土坑を切って構築されている可能性がある。

特徴的な遺物としては、068号の石製硯片（第31図8）と072・073号で確認された炭化物（図版17）が挙げられる。前者は、068号が土器（第31図5・6・7）から15世紀に機能していたことが推定されるため、中世の所産と考えられる。後者の炭化物は、072号資料が柾目板に載ったアワがそのまま炭化したように見受けられ、073号資料は豆の入った粥や味噌あるいは樹脂などが炭化したように見える興味深いものである（図版17）。科学的分析は行っていないが、当時の食文化を示す貴重な資料である。他には、069号土坑から、いずれも一括取り上げ遺物ながら、白磁皿片（第24図7）と玉髄製の火打石（同10）が出土している。

066号土坑　（第23・27・28図　図版3・12）

068号竪穴の南に隣接する、ほぼ正方形の土坑で、覆土下層に貝層が含まれる。覆土の色調は黒みが強く、他の中世遺構とは異なるが、貝の分類の結果は042号地下式坑などと同様にイボキサゴが主体をなすもので、やはり中世の所産と考えられる。

053号土坑　（第29図　図版9・17）

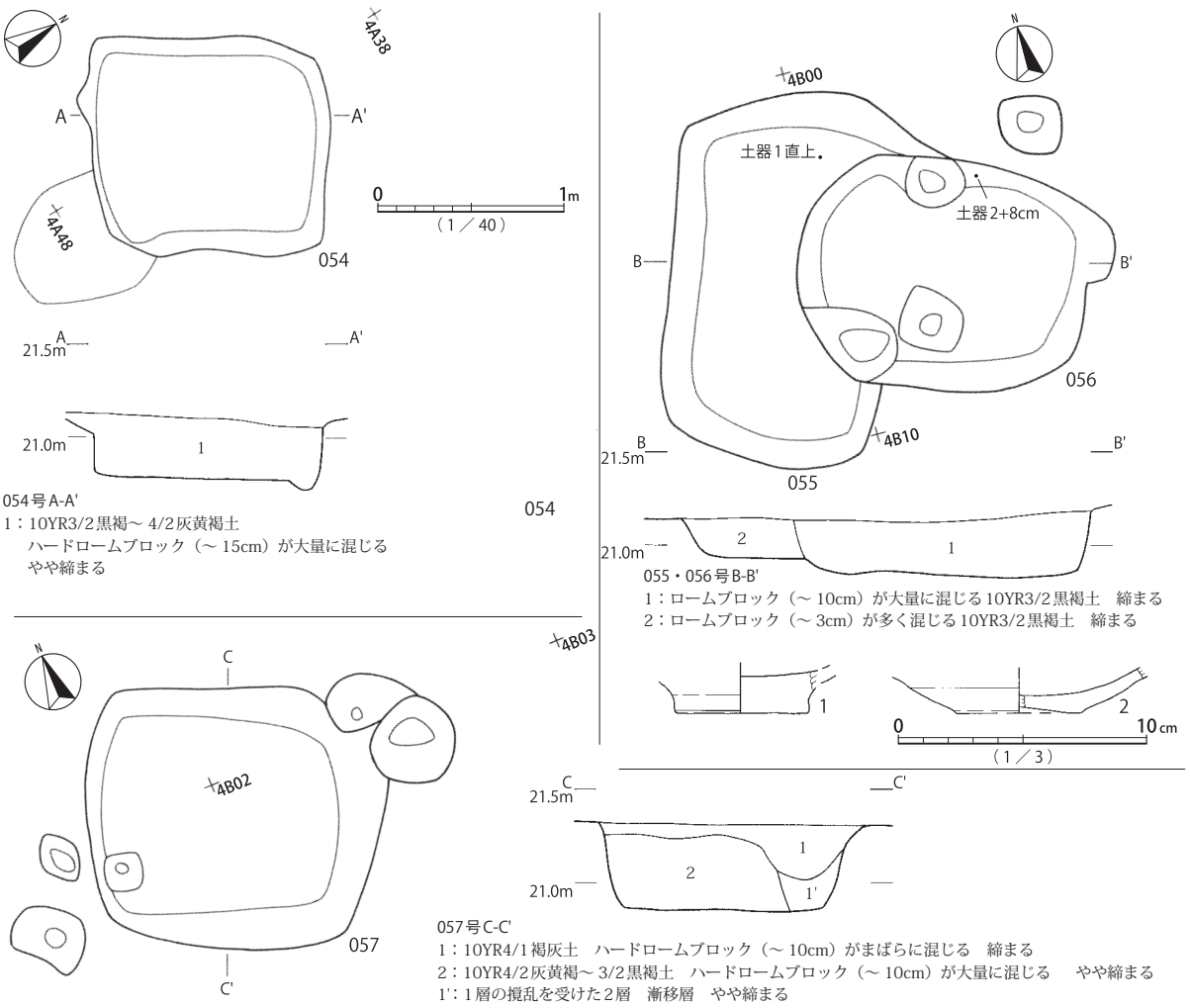
調査区東端付近に位置する性格不明の方形土坑である。明確な加工痕を持たない鉄片が出土している（第29図1）。今回調査では、このような鉄片が少なからず出土しているが、再利用に用いられた素材だった可能性も考えられる。

054・055・056・080号土坑　（第30・32図　図版14・16）

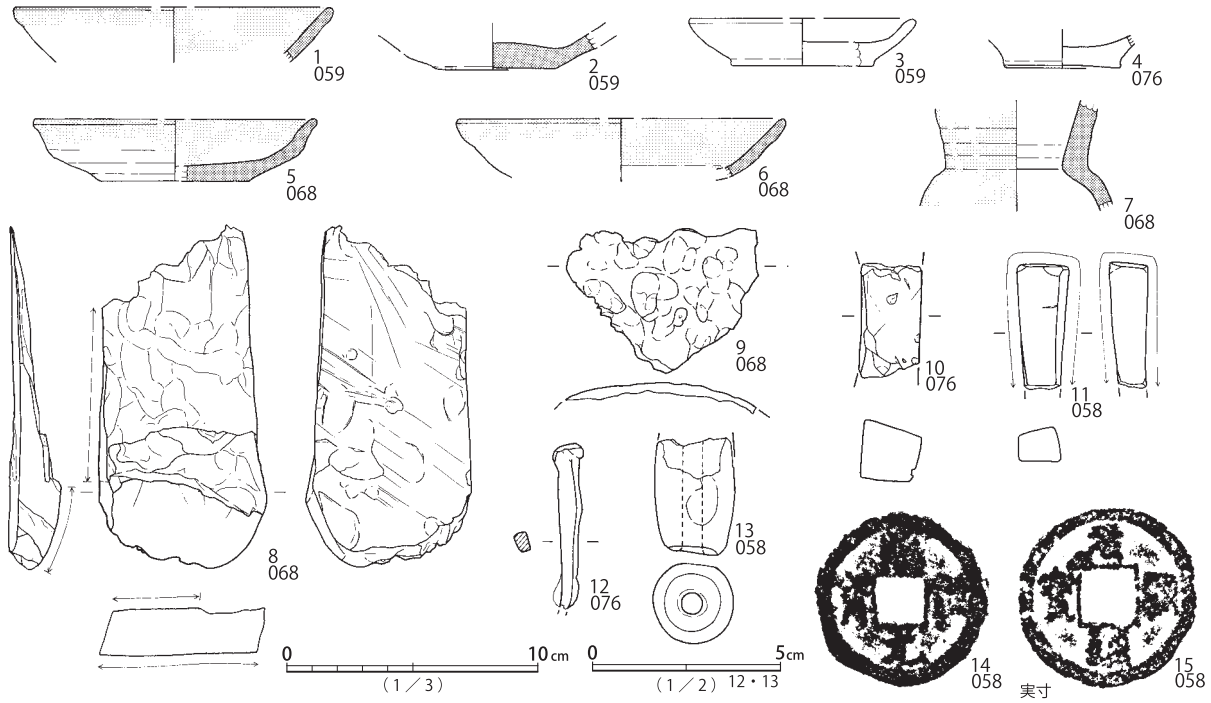
調査区南西部で検出された性格不明の方形土坑の一群である。貝の出土した066号土坑と掘形が似ていることから、散見される同様の土坑は廃棄に利用された可能性がある。055号（第30図1・2）と080号（第32図1）からはカワラケ片が出土している。それぞれ、上総国分僧寺跡のXIII期（13世紀後半、常滑6a・6b型式並行）とXI期（12世紀）に位置づけられる（櫻井2009）。004号区画が成立する前段階の時期を示すものだろうか。

061号土坑・065号火葬遺構　（第33図　図版11・17）

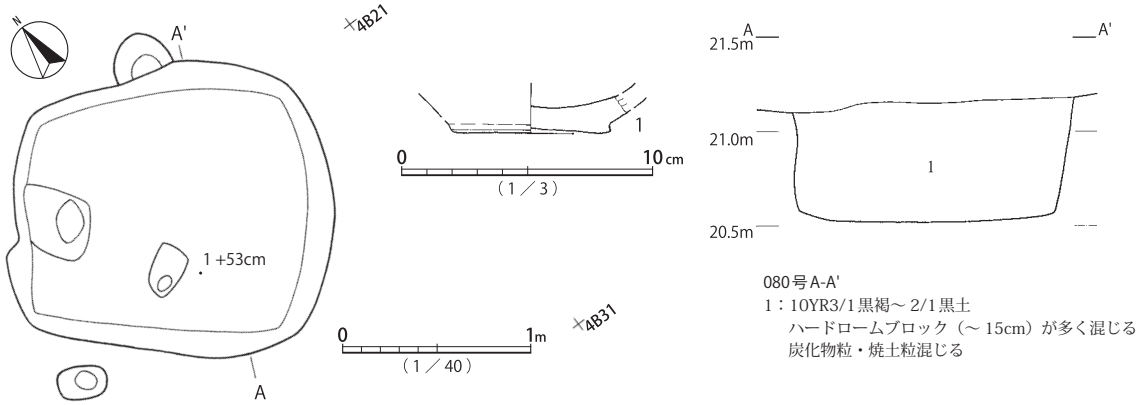
061号は深さ80cmを超える大型の方形土坑で、覆土下層に灰白色粘土ブロックが大量に見られる特徴的な堆積を示す。近くにある076号粘土貼土坑と関係があるのかもしれない。また、床面には一部に被熱による赤変も認められた。



第30図　054・055・056・057号遺構図・055号遺物実測図



第31図　058・059・068・076号遺物実測図・拓影図



第32図　080号遺構図・遺物実測図

065号は061号竪穴が埋没した後に掘り込まれた、火葬遺構である。炭化物・焼土とともに被熱した骨片が出土している（図版17）。機能時期を示す遺物はないが、095・096号とともに墓域として利用されうる程度まで004号区画の生活空間としての性格が希薄になった時期の所産であろう。

074号粘土貼土坑周辺遺構　（第34図 図版13・16）

馬小屋遺構と推定した024・025号の西方に074号粘土貼土坑が構築されており、これに接するかたちで067号竪穴が掘り込まれている。074号は掘形全面に5～10cmの厚さで灰白色粘土が貼り付けられており、水はけの良い台地上面という立地と、酒々井町墨古沢遺跡で井戸とともに検出されている事例（柴田2006）から考えて、水溜めとして利用されたと考えられる。004号区画内ではなくむしろやや離れた位置にあることから、その用途に馬飼育が含まれていた蓋然性は低くないと思われる。想像をたくましくすれば水汲みにも畜力が活用されたのではないだろうか。出土遺物はないが、機能想定が正しければ他の遺構群の多くと同じ15世紀に近い年代が与えられよう。

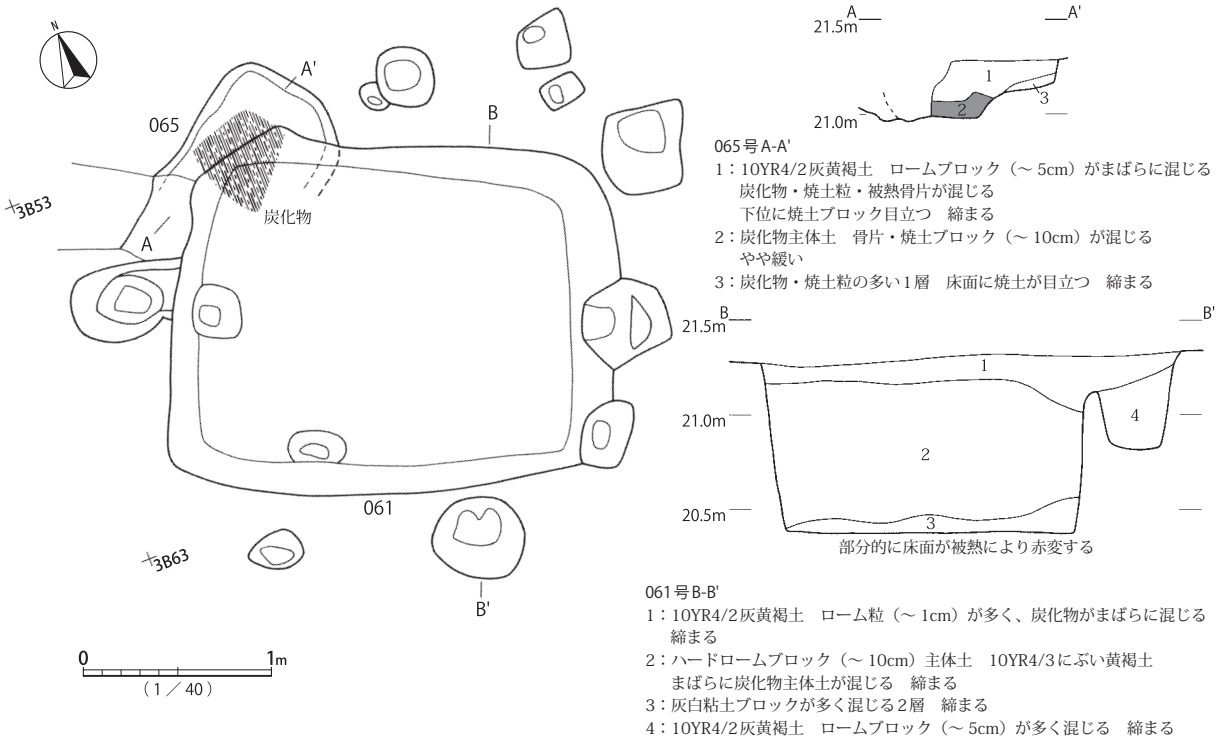
付近のピットからは、082号と086号からそれぞれ14～15世紀に位置づけられるカワラケが出土している（第34図1・2）。082号出土例はほぼ完形であることから、遺構は柱穴とは考えにくい。

077号地下式坑　（第23・35図 図版14・16～18）

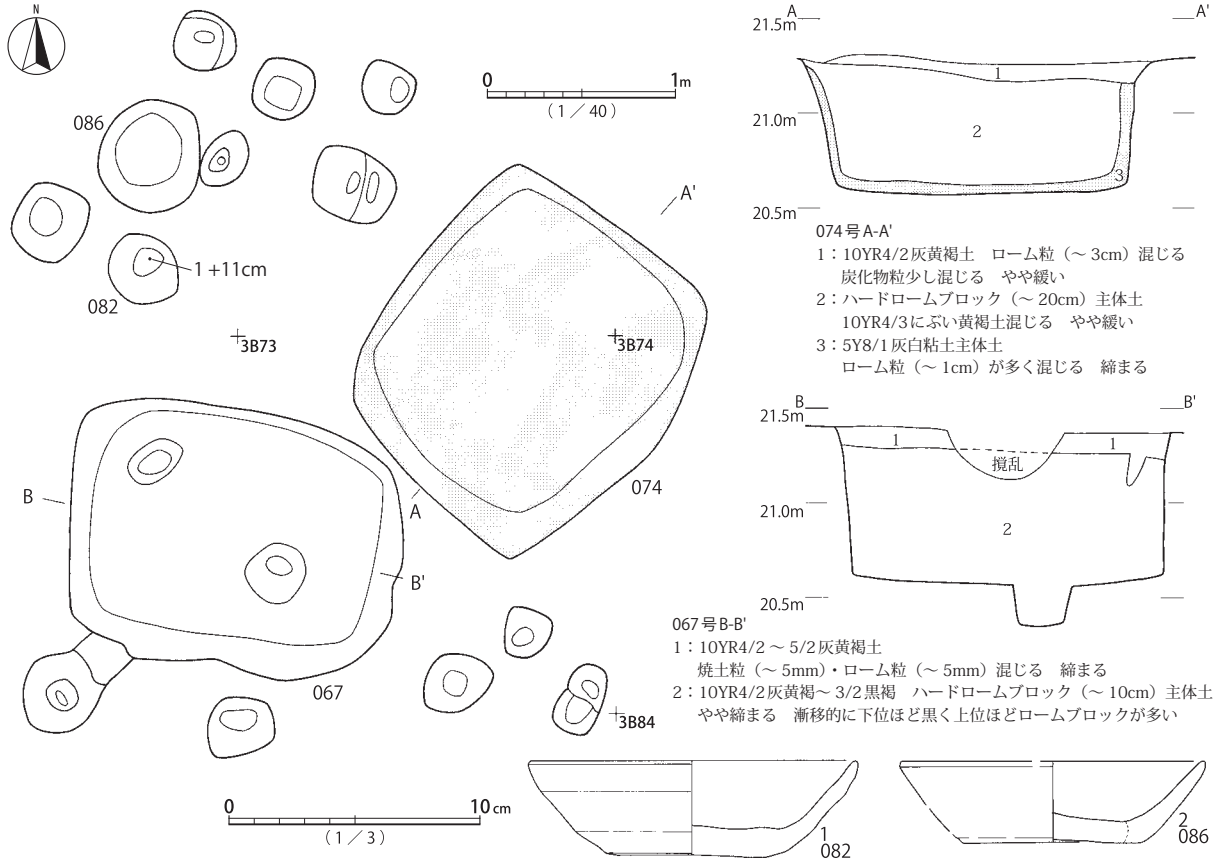
大型の竪穴遺構068号の東に竪坑が隣接する地下式坑である。全長3.66m、竪坑は方形で2.16×2.02m、主室は3.58×2.30m、主室面積は5.64㎡である。竪坑から昇降するために主室壁面に足掛けの凹みが掘られ、竪坑床面主室側の縁には水切りと見られる小溝と土手状隆起が認められる。検出面からの深さは、竪坑1.44m、主室2.41mである。外周遺存部から主室の天井は床から1.5mを超える高さにあったものと思われる。本遺構は検出中最大の042号地下式坑とほぼ同じ規模・形状であり、築造時期も近い可能性がある。なお、検出時には天井部が遺存していたためバックホーで除去して調査を進めた。主室覆土は明瞭に黒みを帯びた層が認められ、天井下面が崩落を始める以前にある程度開口したままの期間のあったことが示唆される。

出土遺物には、図示していないが古代の土師器片が少なからず含まれている。多くは中世の造成で破壊された周辺の古代遺構の遺物が流入したものと思われる。金床石片（第35図2）と鉄滓（同3）も出土しているが、古代・中世いずれに帰属するかは確定しがたい。ただ、遺構自体については、床面近くで出土したカワラケ（同1）が15世紀第2四半期頃に位置づけられるため、15世紀ごろに帰属する可能性が高い。

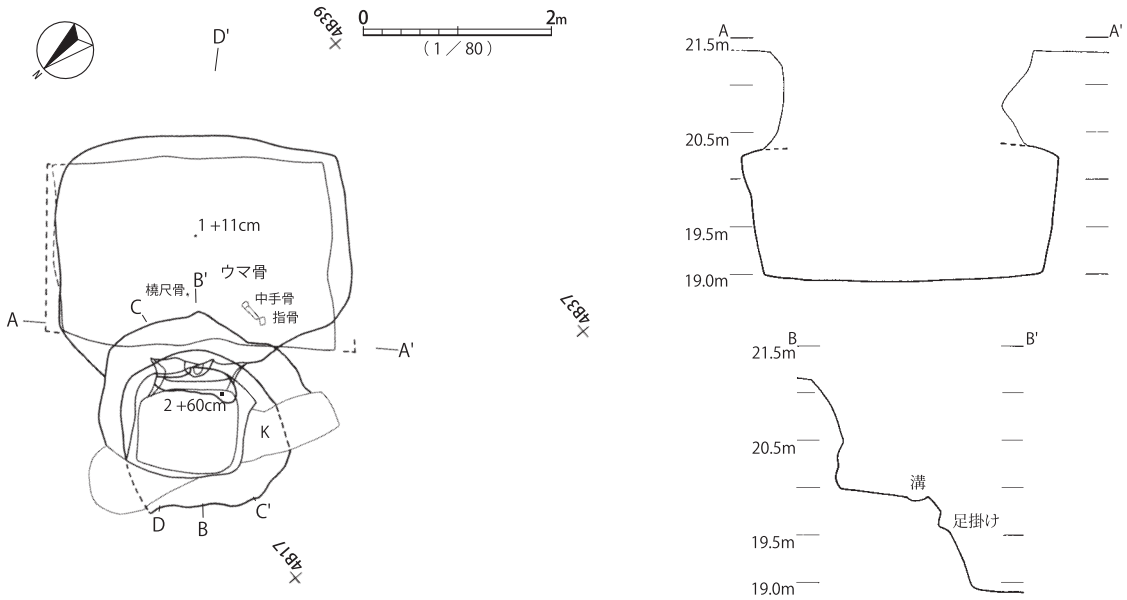
自然遺物としては、竪坑覆土中に貝層、主室床面にウマ骨が検出されている。貝層の組成は第23

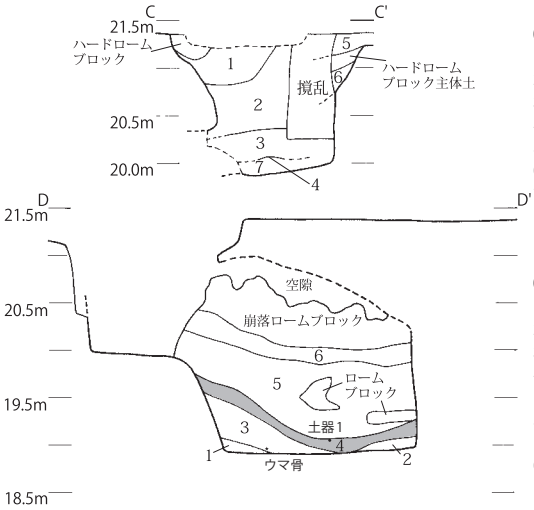


第33図　061・065号遺構図



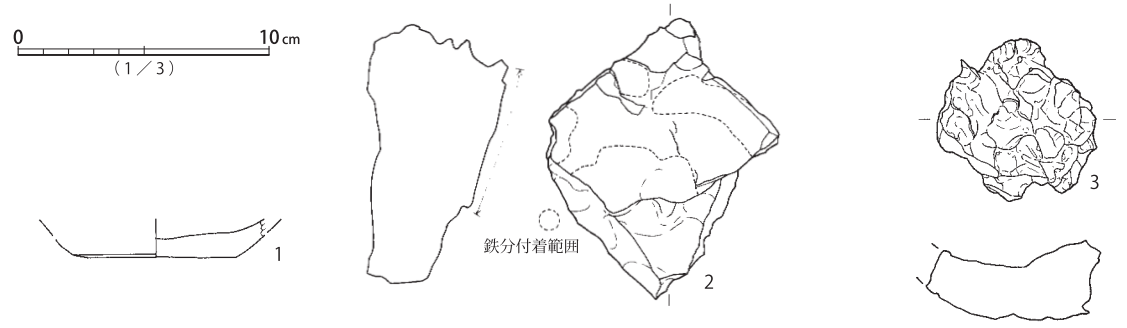
第34図　067・074号遺構図・082・086号遺物実測図



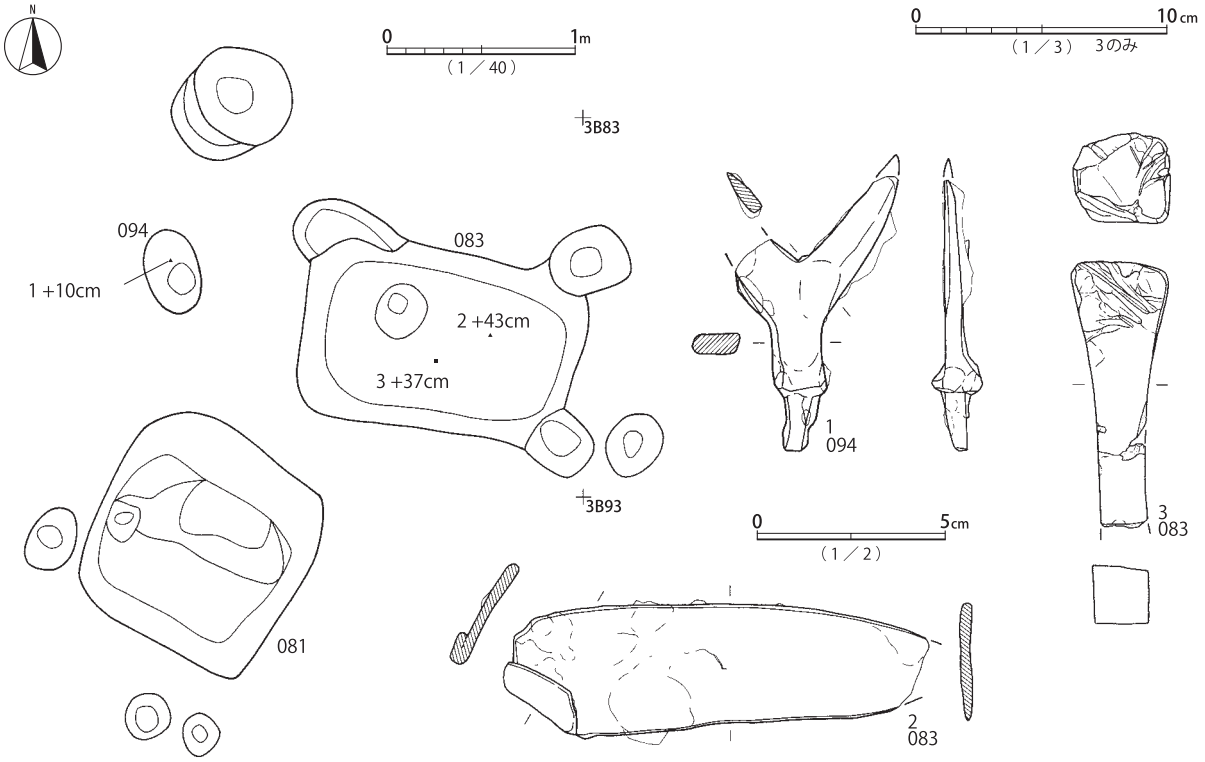


077号C-C'
1：10YR4/2灰黄褐土　ハードロームブロック（～5cm）混じる　やや緩い
2：10YR4/2灰黄褐土　ハードロームブロック（～10cm）が大量に混じる　やや緩い
3：10YR4/2灰黄褐土　ハードロームブロック（～5cm）が少し混じる　締まる
4：二枚貝主体の貝層混じりの10YR3/2黒褐～4/2灰黄褐土　緩い
5：10YR4/1褐灰～4/2灰黄褐土　ロームブロック（～5cm）少し混じる　やや締まる
6：10YR3/2黒褐～4/2灰黄褐土　緩い
7：10YR4/2灰黄褐土　ハードロームブロック（～5cm）が多く混じる　やや締まる

077号D-D'
1：10YR4/3にぶい黄褐土　ロームブロック（～3cm）混じる　緩い
2：10YR5/6黄褐土　ロームブロック主体土　やや締まる
3：10YR3/2黒褐土　ロームブロック（～10cm）が混じる　緩い
4：10YR3/1黒褐～2/1黒土　まばらにロームブロック（～10cm）が混じる
　焼土粒・炭化物粒を含む　やや緩い
5：10YR4/2灰黄褐土　ローム粒（～2cm）がまばらに混じる
　天井崩落土の特大ロームブロックが認められる　やや緩い
6：10YR4/3にぶい黄褐土　ロームブロック（～15cm）が大量に混じる　やや緩い



第35図　077号遺構図・遺物実測図



第36図　081・083・094号遺構図・083・094号遺物実測図

図のとおりで、他の遺構と傾向が異なり、カガミガイ・オオタニシが一定量含まれる点が特徴的である。オオタニシは谷底平野にあった池や水田からもたらされたものであろうか。ウマ骨は主室床面、竪坑近くで検出された前肢の骨である（第2節で詳述）。近隣の中世遺跡では、千葉市生実城跡の地下式坑主室から埋葬跡（長原他2002）、市原市棗塚遺跡第1次調査区から仔馬の土壙墓が検出されている（蜂屋2000）（第1図）。しかし、本例では遺存しやすい歯や他の部位は見られなかったため、埋葬というよりは不要物として廃棄されたと考えられる。帰属時期については、床面から出土したことからウマ骨も15世紀のものと考えるのが自然である。

083号土坑周辺遺構　（第36図 図版13・17）

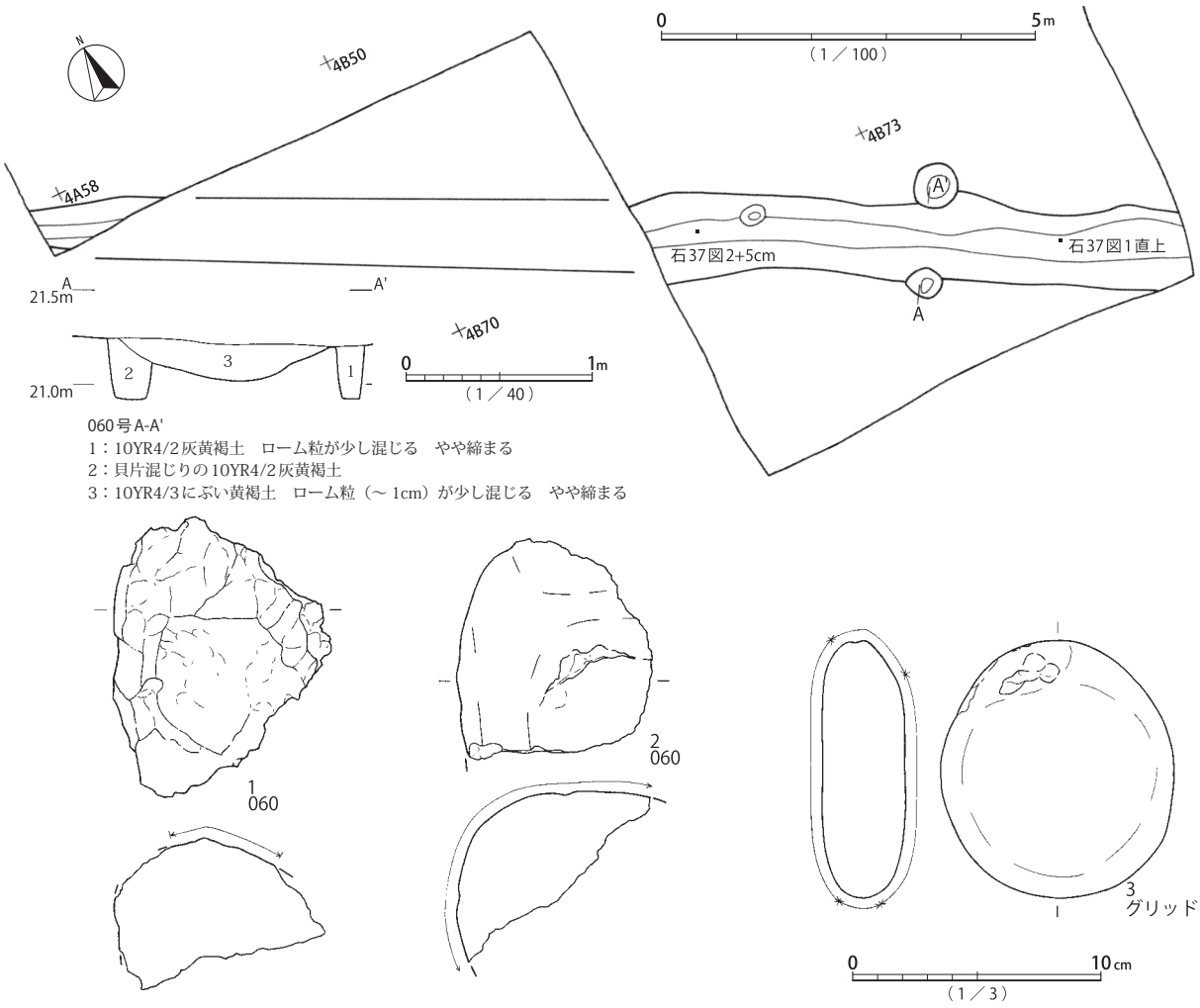
074号粘土貼土坑の南方の土坑群である。083号土坑からは鎌と砥石が覆土上層から出土している（第36図2・3）。094号は小ピットだが雁又鏃が出土している（同1）。両遺構とも性格不明である。

060号溝状遺構　（第37図 図版15・16）

調査区南端を東西に走る溝状遺構である。方位は004号区画・043号溝状遺構の東西方向に合致する。043号寄りから060号の方へ遺構密度の下がる傾向が見て取れるため、060号は生活空間の限界を区切る、台地平坦面の外郭区画溝として掘削されたものと推定できる。覆土からは常滑甕体部片が出土している程度で時期を示す資料は得られていない。土器の他は大型の石製品の破片が検出されている（第37図1・2）。

090号土坑周辺遺構　（第38図 図版15）

長軸2.8mを超える大型の土坑090号と接するように掘り込まれた土坑群である。090号は断面図のとおり壁面が内側に倒れる特徴的な形状を呈している。出土遺物はごく少量で時期不明のカワラケの小片が得られた程度である。090号の南西に接する091号は、先後関係は不明だが、090との間に



第37図　060号遺構図・遺物実測図・グリッド出土遺物実測図

屏風状に地山が掘り残されている。097号はごく浅い落ち込み状の土坑である。

出土遺物はいずれも少量だが、091号からは白磁のごく小さい破片（IX-2類）やカワラケ片が得られている。覆土もハードロームブロックが多く共通するので、これらの土坑も中世遺構と考えたい。

087・088号土坑　（第39図　図版15）

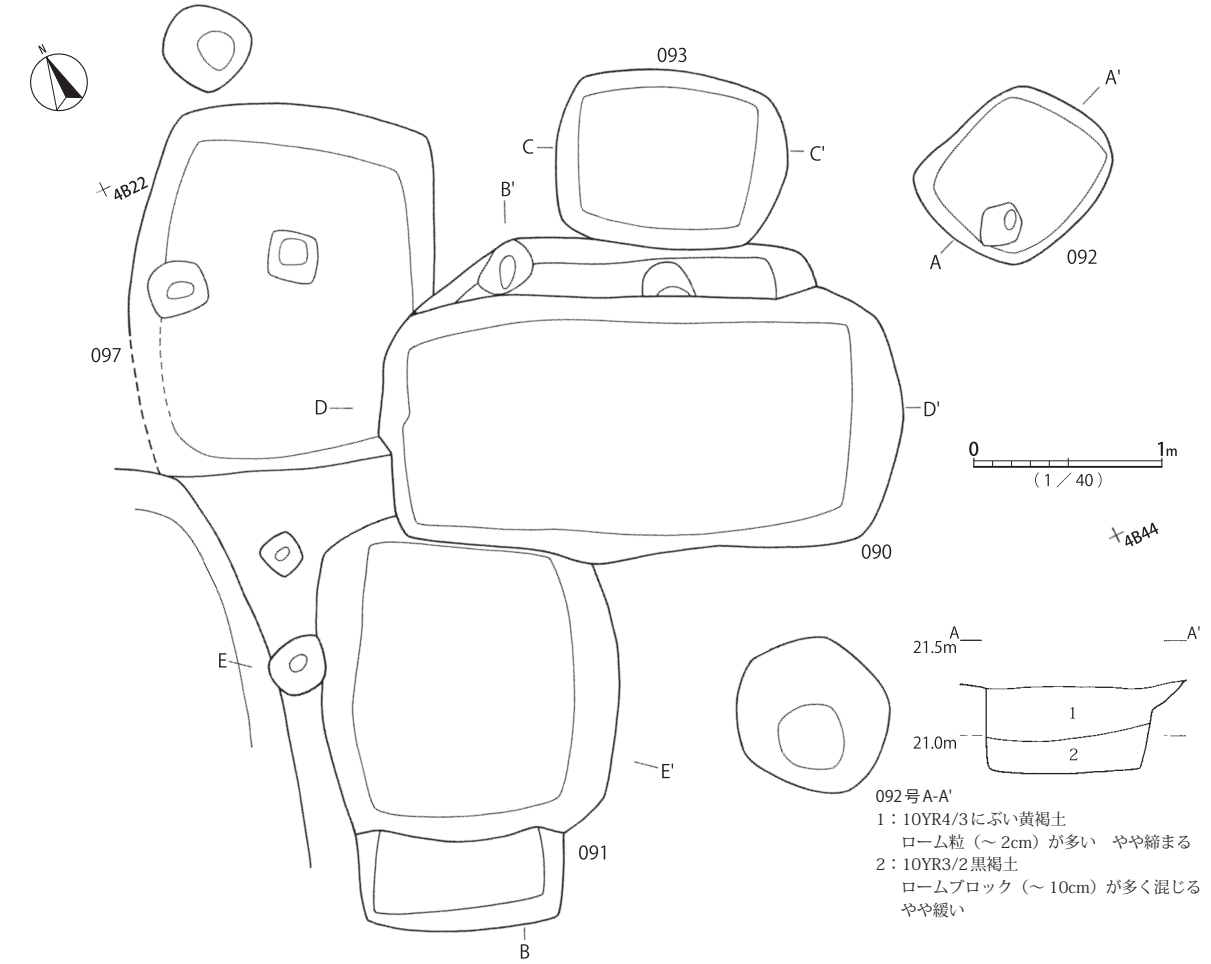
調査区南部、060号溝状遺構の北に位置する2基の土坑である。087号は有天井の方形土坑に後から円形土坑が追加されたような形態をとる。欠損した有天井土坑あるいは掘削途中で放棄された地下式坑とも考えられるが、不明である。土壙墓の一種だろうか。088号土坑は柱穴のような堆積状況を示す。出土遺物は087号で時期不明のカワラケ小片、088号で常滑甕小片が出土しており、両者とも中世遺構と思われる。

001号遺構　（第23・40図　図版5）

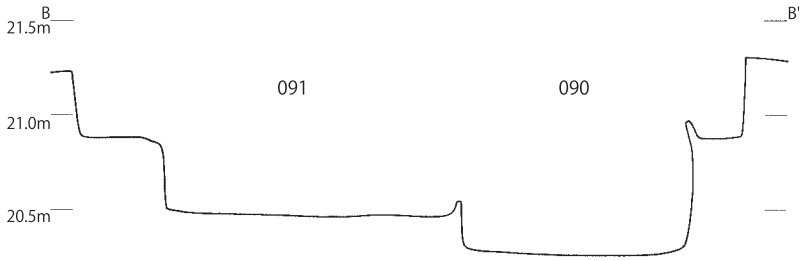
調査区北端で検出された浅い掘り込みに堆積した貝層である。人工遺物がなく時期は不明だが、第23図のとおりイボキサゴが90.3%を超える中世遺構と共通の組成を示す。

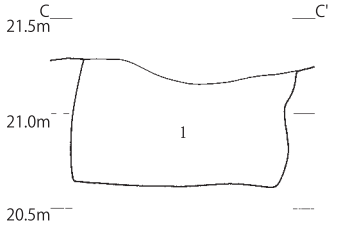
002号遺構　（第40図　図版16）

004号区画の北辺に接して掘り込まれた性格不明の方形土坑である。覆土は15世紀代の遺構より黒みの強いもので区画に先行する可能性もある。出土遺物には中世在地土器片（第40図1）がある。

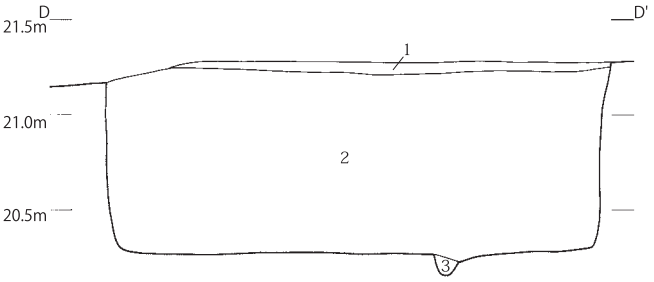


092号A-A'
1：10YR4/3にぶい黄褐土
　ローム粒（～2cm）が多い　やや締まる
2：10YR3/2黒褐土
　ロームブロック（～10cm）が多く混じる
　やや緩い

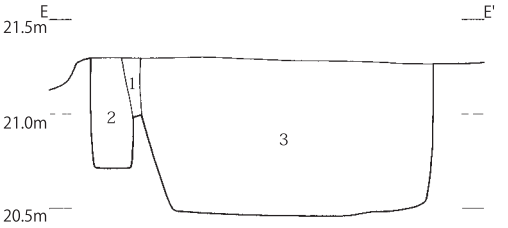




093号C-C'
1：10YR4/2灰黄褐～3/2黒褐土
　ハードロームブロック（～3cm）が混じる
　やや締まる

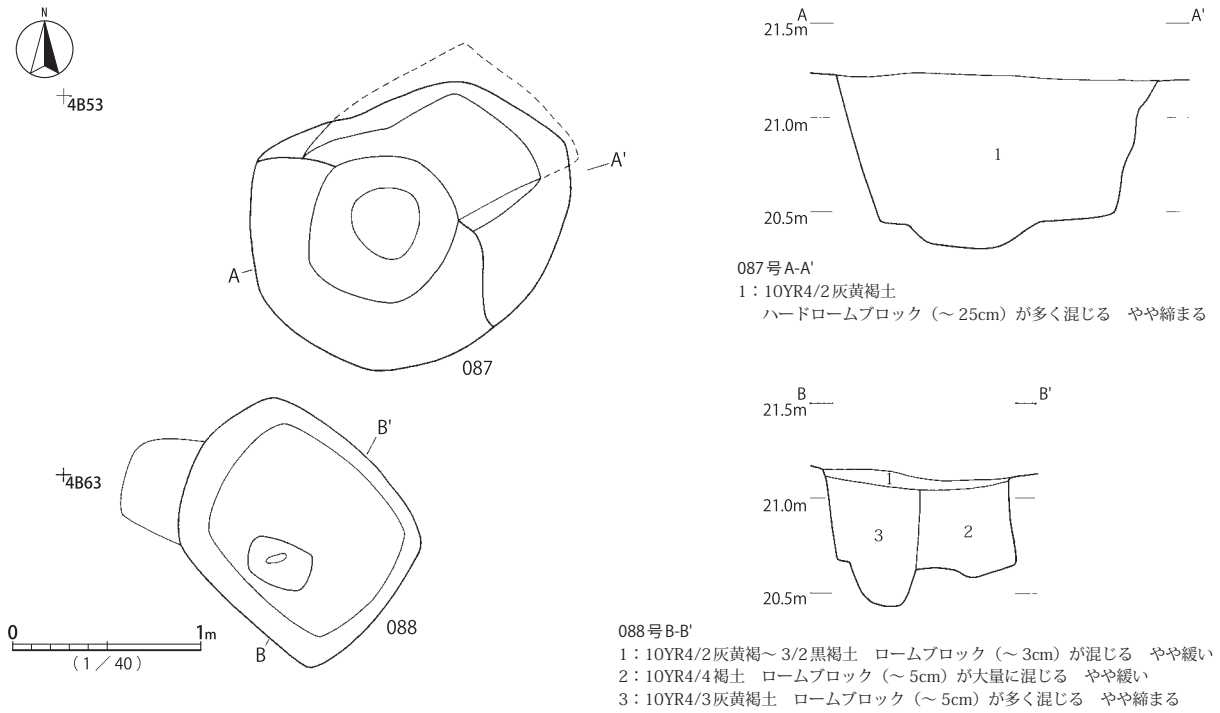


090号D-D'
1：10YR4/2灰黄褐～4/3にぶい黄褐土　ロームブロック（～3cm）混じる　締まる
2：10YR4/3にぶい黄褐土　ハードロームブロック（～5cm）が大量に混じる　やや緩い
3：10YR4/2灰黄褐土　緩い

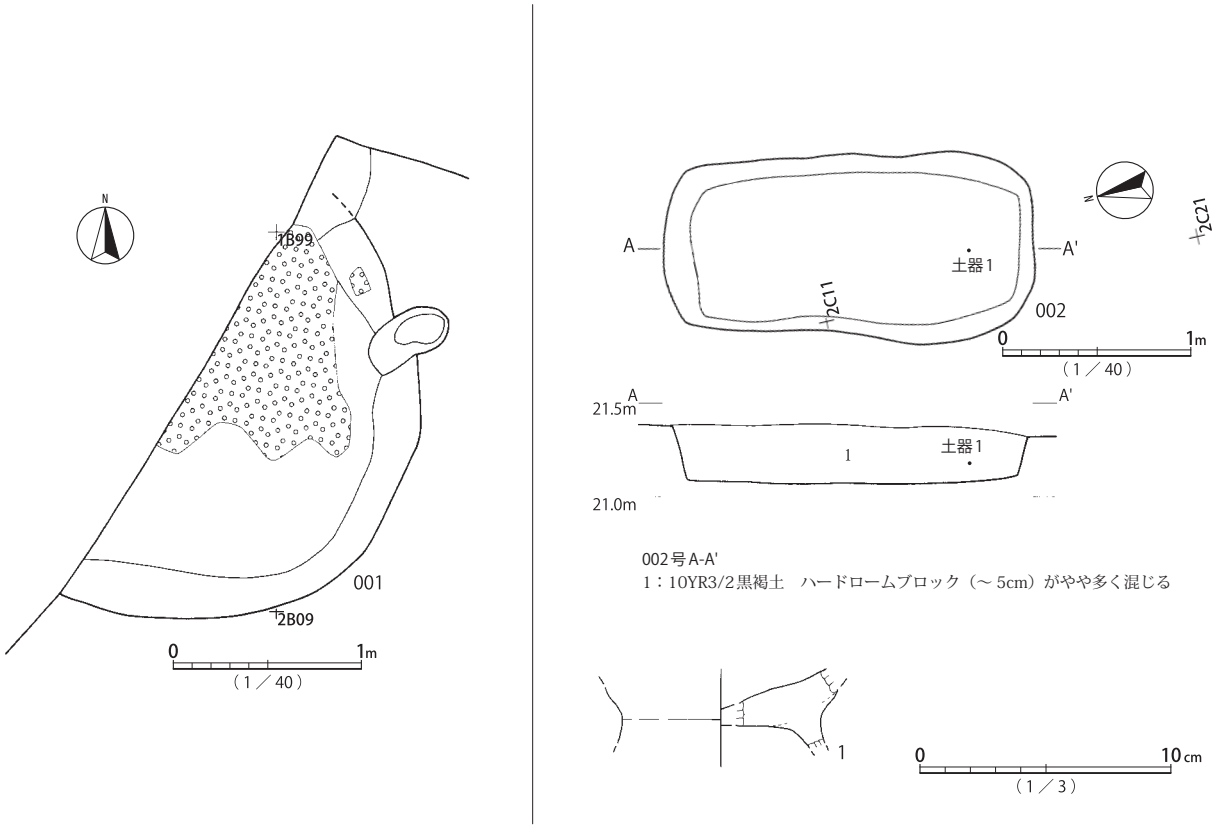


091号E-E'
1：ロームブロック主体土　10YR4/2灰黄褐土混じる　やや緩い
2：10YR4/2灰黄褐～4/3にぶい黄褐土
　ハードロームブロック（～5cm）が多く混じる　やや緩い
3：10YR4/2灰黄褐土
　ハードロームブロック（～5cm　1cm以下が主体）が多く混じる
　焼土・炭化物粒が少し混じる　やや締まる

第38図　090号周辺遺構図



第39図　087・088号周辺遺構図



第40図　001・002号遺構図・002号遺物実測図

第2節　077号地下式坑出土のウマ骨

金子 浩昌（東京国立博物館特別研究員）

【ウマ骨の計測表】単位mm（括弧内はトカラ馬雌の計測値[註1)]）

右側橈骨　　近位骨端幅67.5±（69.2）

右側第3中手骨　全長193 （199）　近位骨端幅40.1（42.2）

第3指骨基節骨　全長 73.3（74.5）

第3指骨中節骨　全長 39.6（39.7）　近位骨端幅39.1

ウマ骨は中世後期（15 ～ 16世紀）の地下式坑主室の床面近くから検出された（図版14）。

出土した部位（図版18）

右側前腕骨（橈骨、尺骨）

右側中手骨（第2、第3、第4）

右側手根骨（橈側手根骨、中間手根骨、尺側手根骨、第3手根骨）、

右側指骨（第3指骨・基節骨、中節骨、末節骨）

出土したウマ骨は同一個体のものと思われ、サイズは現生する日本在来ウマで、もっとも小さいトカラ馬サイズであった。トカラ馬の推定体高は雄117.4cm、雌116.8cmである。本例は改良以前の小型馬であり、当時広く飼われ、その遺骸を各地でみる。

出土状況

前腕骨と手根、中手、指骨が離れて出土しているのは、解体されていたからであろう。北側に右側前腕骨（橈骨、尺骨）があり、60cm程南に離れて、右側手根骨、中手骨と指骨が出土した。手根骨、指骨はややずれた状態であった。

ウマ骨にみる切痕

尺骨の近位骨端、第3中手骨の近位骨端と骨体部と末節骨の遠位骨端周辺には顕著な打撃痕がみられた（図版18参照）。蹄＝ひづめを剥がすような加工をした際の痕跡ではないかと思われる。筆者の調査例では、基節骨の裏側に腱を切った横方向の切痕をみる例[註2)]がある。中節骨、末節骨をいっしょに外したのであろう。今回の郡本遺跡例のように、末節骨に加工痕をみるのは初見である。本例は解体された肢骨の利用目的の一つを知る興味ある例である。

註1）西中川　駿　1988『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究－とくに日本在来種との比較－』昭和63年度文部省科学研究　鹿児島大学

註2）金子浩昌　1993「西新宿三丁目遺跡出土のウマ及びその他の動物遺体」『東京都新宿区西新宿三丁目遺跡―オペラシティ建設に伴う緊急発掘調査報告書』東京オペラシティ建設・協議会、東京オペラシティ建設用地内埋蔵文化財発調査団（遺跡は19世紀）

第3章　まとめ

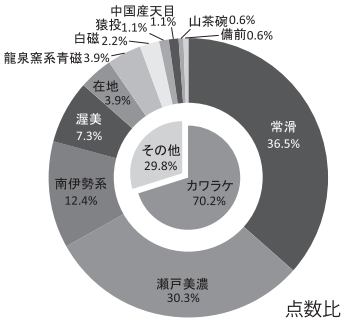
今回の調査区では中世の台地整形区画とそれに伴う遺構群が検出された。南北約20mの区画004号内には軸を揃えた掘立柱建物跡3棟が建て替えられながら存続し、地下式坑も対応する時期に機能していたと推定できる。また、調査区南端に東西に走る060号溝状遺構は別の区画の意識を反映していたと思われ、散見される14世紀以前の遺物の存在も、004号区画に若干先行する時期の生活空間が営まれた可能性を示唆する。出土遺物に目を向けると第41図の表・グラフに示される組成のとおり、今回調査で検出された遺構はほぼ15世紀に限定されることがわかる。擂鉢がほとんど含まれない点は、調査区内遺構群の盛期が15世紀前半にあることを示す。

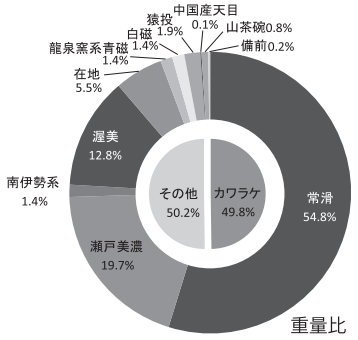
特徴的な遺物には、077号から出土したウマ骨、073号出土のアワ・板の炭化物が挙げられる（図版17・18）。特にウマ骨は024号竪穴周辺が馬小屋遺構である可能性にも関わるものであり、金子浩昌氏が明らかにした蹄の加工痕とともに興味深い資料が得られることとなった。また土器類では、南伊勢系（伊藤2005）の羽釜片が少なからず認められたことも、他の煮炊具がほとんど出土していない点をふまえると、当遺跡の立地や性格を考えるうえで参考になるだろう。

カワラケの比率が点数比で約7割と通例の中世遺跡より高いのはその使用場面が多かったことの直接的な反映と思われるが、鉄滓や生活雑器も含まれることからすると、一概に区画の性格を館や社寺・墓域のように限定するのは困難と言わざるを得ない。区画内に土壙墓・火葬遺構が認められるのは事実だが、区画と遺構群は屋敷跡と考え、土地利用の変遷の終盤で火葬遺構が進入したものと考えたい。北東隅にある土壙墓008号は区画覆土からの掘り込みが不明なため、区画機能時のものと思われる。

区画内の3棟の掘立柱建物跡の建設順序は確定できないが、026号・027号地下式坑の主室床面に顕著な炭化物・焼土が認められることから、同時に存在していた建物が火を受ける機会があったものと思われる。また、026号・027号の覆土最上面はよく締まり整地された可能性があるため、これらの廃絶後にも区画の機能期間の存在が示唆される。掘立柱建物は、B棟とC棟は配置上同時存在できず、A棟とB・C棟はほぼ同規模を示すため（第6図）、それぞれ単独で機能を果たしたと考えられる点を勘案すると、区画の存続期間は主要建物に対応する3時期に分かれると想定できる。つまり、屋敷跡と考えられる004号区画は、大別的には、①区画成立前、②区画成立後（区画A期）、③区画B期、④区画C期、⑤区画廃絶後、の5段階に変遷が想定でき、区画の機能した期間、A期～C期がおおむね15世紀前葉から中葉にあたると考えたい。14世紀後半から15世紀前半にかけては、竪穴建物から地下式坑へと比率の重心が動きながらも両者が併存する時期と捉えられていることからすると（簗瀬2004）、確実な伴出遺物は少なく細かい動態は把握困難だが、今次調査区の様相はこの動向に合致すると言える。

中世遺物の出土密度は櫻井敦史の研究によると、市内の尾崎遺跡が0.09点/㎡（51点/567㎡）（櫻井1997b）、小鳥向遺跡が0.2点/㎡（145点/740㎡）（櫻井2002）、八幡御墓堂遺跡が0.65点/㎡（2664点/4082㎡、カワラケ比率20%）、姉崎の棗塚遺跡（1次・2次）が0.94点/㎡（2133点/2266㎡）（蜂屋1998・小橋2006）となっており（櫻井2005）、今回の0.57点/㎡は、御墓堂遺跡・棗塚遺跡に近い様相にあることがわかる。いずれも沿岸部の流通の中心に関係する遺跡と位置づけられていることから、今回の遺物相がいかなる性格を反映したものなのかという分析が今後の問題になるだろう。





大別	点数	重量（g）	細別	点数	時期比定
カワラケ	417	4,602	小皿	103	僧寺XI～XII：4、僧寺XII～XIII：3、僧寺XIII：4、僧寺XIII～XIV：1、15世紀以前：6、15世紀：7、白船城II：7
			中皿	9	15世紀：1、白船城II：5
			杯	177	僧寺XI：3、僧寺XIII：11、僧寺XIV：1、14～15世紀：3、15世紀以前：1、、15世紀：7、白船城II：24
			大型杯	1	15世紀以前
			柱状高台小皿	1	僧寺XII～XIII
			不明	126	―
			※うち白カワラケ21点（小皿3・杯13・不明4・柱状高台小皿1）		
常滑	65	2,541	片口鉢	2	6a型式：1
			片口鉢I類	3	3型式：1、5型式：1
			片口鉢II類	8	8型式：1、10型式：2
			甕	46	6b型式：1
			広口壺	5	6b型式：1、10型式：1
			不明	1	―
瀬戸美濃	54	914	縁釉小皿	25	後I期：3、後II期：6、後II～後III期：2、後II～後IV期：1、後III期：5、後IV期(古)：2、後IV期(新)：1、後IV期：5
			平碗	15	中期～後期：1、後I～後II期：1、後I～後III期：3、後II期1、後期：6（第4型式：後II期：1、第5型式：後III期：1を含む）
			卸皿	3	中I期：1、後III期：1、後期：1
			深皿盤類	3	後I～II期：1、後I～III期：1、後期：1
			卸目付大皿	1	後II～後III期
			浅碗	1	後I～後II期
			天目茶碗	1	後II～後IV期
			擂鉢	1	―
			花瓶III類	1	後III期
			壺	1	―
			不明	2	後期：1
渥美	13	594	片口鉢	1	12世紀
			壺	2	12世紀
			甕	10	―
猿投	2	86	広口壺	1	11～12世紀
			甕	1	12世紀
東海	1	36	山茶碗	1	12世紀半ば～後半
備前	1	11	擂鉢	1	―
南伊勢系	22	64	羽釜等	22	15世紀
在地土器	7	257	擂鉢	1	後IV期並行か
			内耳鍋	2	―
			鍋	1	―
			高杯	1	12～13世紀
			土玉	1	―
			不明	1	―
龍泉窯系青磁	7	64	碗	7	I-2類：1、I-2a類：1、I-5b類：3、B-I類：1
白磁	4	65	碗	2	IX-2類：1、15世紀：1
			小皿	1	1-VIII類：1
			皿	1	―
中国（建窯？）	2	5	天目茶碗	2	12～13世紀：2
合計	595	9,239	本調査面積：1,050㎡　1㎡当たり0.57点・8.8g		

第41図　第15次調査出土中世遺物の組成

藤井地区に伝わった郡本八幡神社に由来するとされる、胎蔵界大日如来像懸仏（現在所在不明）には「（表）守公神御正体　所者上総国府府中国庁　国御目代日高　弾正朝光沙弥道光　（裏）金資弘覚大勧進沙門　応永九年（1402）六月一日」の銘があり（篠崎1980・木下他1999）、実態は不明ながら15世紀においても「国府」の意識が続いていたことを示している。主体が変化しながらも政治的中心が近傍に存在するという状況が経済的な求心性に結びついた結果、このような遺物相として表れたのかもしれない。

北東約120mの13・14次調査区検出の大規模な壕跡からは13世紀代のカワラケが大量に出土しており（牧野2010、牧野他2011）、一般の集落とは隔絶した様相を示している。今回調査区の時期を大きく遡るが、その遺構・遺物が中世前期の何らかの権力主体による所産であるとすれば、それらがどのように変遷して周辺に004号のような区画を発生させるに至ったのか、そして、15世紀に下ってもカワラケの数比が依然として高いことは何を示しているのか、などの問題も浮かび上がってくる。

また、中世後期に、厚いローム層や地形に変化がないにもかかわらず地下式坑という新たな構造物が生み出され盛行する背景には、地質などの自然環境というよりは社会的な要因が大きく作用したとされている。事実、すでに古代の墓制として地下式壙は存在しており（小川・蜂屋2000）、中世を待たねばならないほどの技術革新が必要とされなかったことは間違いない。上総本一揆に際し平三（平蔵）城を攻めるため（飯香岡）八幡宮に鎌倉公方の軍が集結したのは1418年のことであり、その後関東地方を戦国時代へと導く永享の乱（1438年）、享徳の乱（1455年）を遡る時期である。当時、上記のような主要地域であった郡本周辺がこれらの世相と無関係であったとは考えにくいので、近辺では、これまでの指摘どおり、今次調査区例のような倉庫としての地下式坑は、騒がしい世の中を背景に登場、浸透したことを示唆するように思えるのである（簗瀬2000）。

今後、郡本遺跡群・能満遺跡群等の発掘調査で明らかになった様相をもとに、国衙周辺の変遷と歴史的背景との関係が、より具体的に解明されていくことを期待したい。

引用・参考文献

相京邦彦・伊藤智樹2004『一般国道297号交通安全施設等整備委託（埋蔵文化財調査）報告書－市原市郡本遺跡－』千葉県文化財センター調査報告書第491集　財団法人千葉県文化財センター
伊藤裕偉2005「“かたち”と“わざ”～中世の土製煮沸具から～」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～　発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
井上哲朗2010「房総における中世竪穴建物について」『房総の考古学　史館終刊記念』六一書房
小川浩一2004「郡本遺跡群」『市原市文化財センター年報　平成13・14年度』財団法人市原市文化財センター
小川浩一2008『平成19年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第7集　市原市教育委員会
小川浩一他1998『平成9年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
小川浩一・蜂屋孝之2000『市原市北野原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第68集　財団法人市原市文化財センター
小高春男1998「椎津城跡」（千葉県1998所収）
北見一弘1999『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
木對和紀1987『市原市郡本遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第14集　財団法人市原市文化財センター
木下良他1999『上総国府推定地歴史地理学的調査報告書』市原市教育委員会
小橋健司2000「姉崎棗塚遺跡（2次）」『市原市文化財センター年報　平成9年度』財団法人市原市文化財センター
小橋健司2006「姉崎棗塚遺跡出土中世人骨の鑑定と分析について」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅵ　財団法人市原市文化財センター
小橋健司他2013『平成24年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第27集　市原市教育委員会
近藤敏他1987『菊間手永遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第23集　財団法人市原市文化財セン

ター
近藤敏2001「能満城跡遺跡」『市原市文化財センター年報　平成12年度』財団法人市原市文化財センター
近藤敏2010『市原市郡本遺跡群（第12次）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第14集　市原市教育委員会
櫻井敦史1997a「分目要害遺跡」『市原市文化財センター年報　平成５年度』財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史1997b「椎津尾崎遺跡」『市原市文化財センター年報　平成６年度』財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史1998「分目要害遺跡」（千葉県1998所収）
櫻井敦史2002『市原市小鳥向遺跡Ⅱ』財団法人市原市文化財センター調査報告書第77集　財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史2003「県内における中世村落の発展について－百姓居宅の区画から－」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅳ　財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史2004『市原市片又木遺跡Ⅲ』財団法人市原市文化財センター調査報告書第87集　財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史2005「市原八幡宮と中世八幡の都市形成－文献・考古・石造物史料から－」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅴ　財団法人市原市文化財センター
櫻井敦史2009「10世紀末以降における土器変遷」（櫻井他2009所収）
櫻井敦史他2009『上総国分僧寺跡Ⅰ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第８集　市原市教育委員会
笹生衛1998「草刈六ノ台遺跡」（千葉県1998所収）
篠崎譲治2010『馬小屋の考古学』高志書院
篠崎四郎1980『日本金石文の研究』柏書房
柴田龍司2006『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書３－酒々井町墨古沢遺跡－』千葉県県教育振興財団調査報告第542集　財団法人千葉県教育振興財団
高橋誠2004『権現堂遺跡　四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査（Ⅱ）』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第203集　財団法人印旛郡市文化財センター
高橋康男1985『草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第６集　財団法人市原市文化財センター
高橋康男1994『市原市上総国府推定地確認調査報告書（1）』財団法人市原市文化財センター
高橋康男1997「古甲遺跡（地中レーダー探査）」『市原市文化財センター年報　平成５年度』財団法人市原市文化財センター
高橋康男2007「棗塚遺跡」『平成18年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第４集　市原市教育委員会
田所真1998「郡本遺跡群」（千葉県1998所収）
田所真2012「椎津尾崎遺跡第２地点」『平成23年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集　市原市教育委員会
田所真・忍澤成視2003『平成14年度市原市内遺跡緊急発掘調査概要』市原市教育委員会
田所真・米田耕之助1985『池ノ谷遺跡・福増遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第５集　財団法人市原市文化財センター
田中清美1995『市原市郡本遺跡（第２次）』財団法人市原市文化財センター調査報告書第56集　財団法人市原市文化財センター
千葉県1998『千葉県の歴史』資料編　中世１　考古資料　県史シリーズ14
鶴岡英一2012「棗塚遺跡第５次」『平成23年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第22集　市原市教育委員会
長原亘他2002『千葉市生実城跡　－昭和63年・平成３～６年度調査－』財団法人千葉市文化財調査協会
西野雅人2006「棗塚遺跡」『平成17年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
蜂屋孝之1998『共同研修会資料　姉崎棗塚遺跡』（財）市原市文化財センター
蜂屋孝之2000「姉崎棗塚遺跡」『市原市文化財センター年報　平成８年度』財団法人市原市文化財センター
半田堅三1998「台遺跡」（千葉県1998所収）
平野元三郎他1965「市原市上総国府関係遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会
牧野光隆2010『平成21年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第16集　市原市教育委員会
牧野光隆他2011『平成22年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第19集　市原市教育委員会
牧野光隆・忍澤成視2009『平成20年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第11集 市原市教育委員会
宮本敬一他1999『能満上細工多遺跡・能満上新開遺跡・能満番面台遺跡・能満旧三山塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第14集　財団法人市原市文化財センター
簗瀬裕一2000「房総の地下式坑について－倉庫説を軸に－」『千葉史学』第37号　千葉歴史学会
簗瀬裕一2004「房総の中世集落－台地上集落を中心に－」『中世東国の世界２ 南関東』高志書院
山口直樹1984『小田部新地遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第４集　財団法人市原市文化財センター

表4　土器観察表

図番号		遺構番号	注記	種別	器種	寸法 cm			色調		特徴		備考
						口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	
8	1	004	004C-54	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	11.4	2.4	6.7	2.5Y7/2灰黄 釉：7.5Y6/3オリーブ黄	2.5Y7/1灰白 釉：7.5Y6/3オリーブ黄	ヨコナデ→口縁部：釉がかかる（部分的に褐釉が付着する）。	ヨコナデ→口縁部：釉がかかる。	後II期　反転復元
8	2	004	004B-39	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	11.8	(1.9)	－	2.5Y8/2灰白 釉：7.5Y6/3オリーブ黄	2.5Y8/3淡黄 釉：7.5Y7/3浅黄	ヨコナデ→口縁部：釉がかかる。	ヨコナデ→口縁部：釉がかかる（外面より幅広）。	後II期　反転復元
8	3	004	004B-14	中世陶器	常滑　広口壺	13.6	(4.4)	－	5YR4/3にぶい赤褐	2.5YR4/4にぶい赤褐	折り返す形で口縁肥厚部を形成→ヨコナデ。全体に自然釉がかかる。破断面に補修と思われる漆状の付着物がある。	ヨコナデ。自然釉がかかる。	10型式　反転復元
8	4	004	004E-157	中世陶器	常滑　甕	－	(2.6)	－	7.5YR5/2灰褐	7.5YR5/1褐灰	折り返したのち上方に粘土を付加して肥厚口縁を形成する。口縁端部上面は平坦。ヨコナデ。自然釉がかかる。	ヨコナデ。自然釉がかかる。	6b型式
8	5	004	004E-181	中世陶器	常滑　片口鉢II類	26.4	(4.0)	－	10R4/3赤褐	5YR6/4にぶい橙	ヨコナデで口縁端部を撥形に拡張する。自然釉がかかる。	ヨコナデ。若干器面が磨滅する。	10型式　反転復元
8	6	004	004D159	中世陶器	瀬戸美濃　平碗	－	(2.3)	4.9	5Y8/3淡黄	釉：2.5Y5/3黄褐	底面：糸切り（向き不明）→高台削り出し。底部付近：回転ヘラケズリ→体部：ヨコナデ。	全体に釉がかかる（被熱のためか茶色に変色）。見込外周が沈線状にくぼむ。見込外周より5mmほど上のラインに5箇所トチン剥離痕がある。	後II期　一部反転復元
8	7	004	004C-119	白磁	椀	－	(2.0)	7.2	5Y7/2灰白、釉：5Y7/1灰白	7.5Y7/2灰白	底面：高台削り出し（孤状の工具痕）。体部：大部分に釉がかかる。	釉がかかる。	15世紀　反転復元
8	8	004	004D一括	土器	カワラケ　小皿	6.8	1.6	4.0	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（向き不明）。体部：ヨコナデ。	ヨコナデ。	白船2次　反転復元
8	9	004	004C-113	土器	カワラケ　小皿	7.8	1.6	5.2	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（左）→シノ圧痕？（不明瞭）。体部：ヨコナデ	ヨコナデ→見込：径方向のナデ。	反転復元
8	10	004	004A-19	土器	カワラケ　小皿	11.8	(2.8)	－	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙 ～5/2灰黄褐	ヨコナデ。	ヨコナデ。見込外周が明瞭に屈曲する。	白船2次　反転復元
8	11	004	004-218	土器	カワラケ　杯	11.0	2.5	5.8	7.5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙～ 7.5YR4/1褐灰	底面：回転糸切り？→スノコ状圧痕。体部：ヨコナデ。	ヨコナデ。被熱のためか黒変する。	反転復元
8	12	004	004C-90	土器	在地　内耳鍋	27.6	(7.9)	－	10YR1.7/1黒	10YR6/4にぶい黄橙	破片全体にススが付着する。	ヨコナデ。口縁端部下を若干突出させる。	反転復元
8	13	004	004D-201	土器	南伊勢系　羽釜	－	(1.7)	－	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	内弯する口縁の端部が幅7mmほど肥厚される。	ヨコナデ	15世紀（前半？）
8	14	004	004E-144	土器	南伊勢系　羽釜	－	(1.6)	－	ススス・黒変：10YR2/1黒 7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙 黒変：10YR4/2灰黄褐	器壁と同じぐらいの厚さで鍔を巡らせる。鍔端部はゆるい面を持ち、若干つまみあげられている。鍔の下側は使用によりスス付着・黒変が著しい。	ナデ。一部黒変する。	15世紀
8	15	004	004C-67	土器	南伊勢系　羽釜	－	(1.7)	－	スス：10YR6/2灰黄褐 2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	端部に明瞭な拡張面を持つ鍔が巡る。鍔下面はススが付着し黒変する。	ナデ。	15世紀
10	1	020	020-1	中世陶器	瀬戸美濃　平碗	14.0	(4.3)	－	10YR7/1灰白 釉：7.5Y6/2灰オリーブ	7.5Y6/2～5/3灰オリーブ	ヨコナデ→口縁部に幅広く釉がかかる。	遺存部全体に釉がかかる	後II～III期　反転復元
10	2	047	047-2	中世陶器	東海産　山茶碗	－	(2.7)	7.7	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	底面：回転糸切り（向き不明）→高台貼り付け→体部：ヨコナデ。	ヨコナデ？磨滅によって平滑になっている。	12世紀中～後 反転復元
10	3	035	035-1、-2 （4片接合） （同各1片）	土器	カワラケ　小皿	8.8	2.3	5.2	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	底面：回転糸切り（左か）→丁寧なナデ（糸切り痕がほとんどない）→スノコ状圧痕。体部：ヨコナデ	ヨコナデ→見込：径方向のナデ。	一部反転復元
10	4	028	028-2	土器	南伊勢系　羽釜	－	(2.7)	－	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	内傾する口縁端部を幅1.5cmほど肥厚する。ヨコナデ。	ヨコナデ	15世紀
10	5	039	039-1、-2	土器	カワラケ　中皿	12.8	2.3	7.0	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（右）→体部：ヨコナデ。	ヨコナデ→見込：径方向のナデ。	白船2次　反転復元
10	6	039	039-3	土器	カワラケ　中皿	12.0	2.5	6.2	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（向き不明）→一部ナデ。体部：ヨコナデ（部分的にヌタあり）。	ヨコナデ→見込：径方向のナデ。	白船2次　反転復元
10	7	029	029-1 （同他1片）	土器	カワラケ　中皿	12.0	2.2	5.6	10YR7/4にぶい黄橙 ～4/2灰黄褐	10YR7/4にぶい黄橙 ～5/3にぶい黄褐	底面：糸切り（向き不明）→ナデ。体部：ヨコナデ。底部付近が黒変する。	体部：ヨコナデ→見込：径方向のナデ	15世紀　反転復元
17	1	026	026-1	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	10.0	2.1	4.4	2.5Y8/3淡黄 釉：5Y6/4オリーブ黄	2.5Y8/3淡黄 釉：5Y7/3浅黄～5/3灰オリーブ	底面：回転糸切り（向き不明）→体部：ヨコナデ→口縁端部付近釉がかかる。体部中位に糸切りの糸の擦痕がある。	ヨコナデ→口縁付近に釉がかかる。見込が使用により磨滅し非常に平滑になっている。	後IV期（古） 反転復元
17	2	027	027-2	中世陶器	瀬戸美濃　平碗	15.0	(4.9)	－	釉：2.5Y7/4浅黄 2.5Y8/3淡黄	2.5Y6/4にぶい黄	口縁以下5.5cmほどの幅で釉がかかる。以下、ヘラケズり。	全体に釉がかかる。	後I～II期　反転復元
18	1	016	016-2	中世陶器	瀬戸美濃　卸目付大皿	29.8	(2.8)	－	2.5Y8/2灰白 釉：7.5Y5/3灰オリーブ	2.5Y8/2灰白 釉：7.5Y4/3暗オリーブ	凹凸が明瞭なヨコナデ→口縁端部を半円状に切り抜き、粘土板を半截筒状に付加し注口を形成する。全体に釉がかかる。	ヨコナデ→口縁端部下に断面三角形の隆帯を巡らせる。全体に釉がかかる。	後II～III期　反転復元
18	2	016	016-101	中世陶器	常滑　片口鉢II類	25.4	(7.3)	－	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/8橙	体部：タタキメ（4本/cm）→口縁端部：ヨコナデで撥形に拡張→指で押し下げ注口部をつくる。破断面に漆状の付着物があり、修繕しながら使用したことが推定される。	使用により口縁端部直下まで摩滅し、器面が平滑になっている。	10型式

図番号		遺構番号	注記	種別	器種	寸法 cm			色調		特徴		備考
						口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	
19	1	030	030-1	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	9.8	(1.8)	—	2.5Y8/3淡黄 釉：7.5Y5/3灰オリーブ	2.5Y8/3淡黄 釉：7.5Y4/3暗オリーブ	ヨコナデ。口縁端部近くに釉がかかる。	ヨコナデ。口縁端部に釉がかかる。	後III期　反転復元
19	2	030	030-3	中世陶器	瀬戸美濃	9.8	1.9	5.8	10YR7/3にぶい黄橙 釉：5Y5/2灰オリーブ ～8/2灰白	10YR7/3にぶい黄橙 釉：5Y8/2灰白 ～10YR3/2黒褐	ヨコナデ→口縁部に釉がかかる。被熱のためか変色する。	ヨコナデ→口縁部に釉がかかる。被熱のためか灰白や黒褐に変色する。	後III期 反転復元
19	3	030	030-2	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	11.6	2.1	6.6	10Y8/1灰白 釉：10Y6/2オリーブ灰	10Y8/1灰白 釉：7.5Y6/3オリーブ黄	底面：回転糸切り（右か）→体部：ヨコナデ→口縁端部付近に釉がかかる。体部中位に糸切りの糸の擦痕がある。	ヨコナデ。口縁部に釉がかかる。	後III期　反転復元
19	4	030	030-6、-7	土器	カワラケ　杯	—	(2.1)	6.2	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（右か）→体部：ヨコナデ。底面にシノ状圧痕が数条見られる。	ヨコナデ→見込：径方向のナデ	15世紀 一部反転復元
19	5	030	030-5	土器	カワラケ　大型杯	—	(1.9)	9.8	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（左）→体部：ヨコナデ。底面にシノ状圧痕が少し見られる。	ヨコナデ→見込：径方向のナデ（ヘソ付近をナデ消す）。	15世紀以前 反転復元
21	1	038	038-5	中世陶器	瀬戸美濃　卸皿	15.4	(2.6)	—	釉：5Y7/2灰白 ～6/3オリーブ黄	釉：5Y7/2灰白 ～6/3オリーブ黄	ヨコナデ→釉がかかる。	ヨコナデ。薄い板状の先端で斜格子状の卸目が付けられる（縦→斜）→釉がかかる。	中I期
22	1	042	042主室中央床	土器	カワラケ　杯	14.1	(3.4)	—	10YR5/4にぶい黄褐 ～3/2黒褐	10YR5/4にぶい黄褐 ～3/2黒褐	ヨコナデ。被熱のためか黒変する。	ヨコナデ。被熱のためか黒変する。	反転復元
22	2	042	042-3	中世陶器	瀬戸美濃　卸皿	16.3	(2.6)	—	2.5Y8/3淡黄 釉：7.5YR8/4浅黄橙	2.5Y8/3淡黄 釉：2.5YR6/1黄灰	ヨコナデ。口縁部に釉がかかる（被熱のためかガラス質が白化している）。	口縁端部下に断面三角形の隆帯を巡らす。口縁付近釉がかかる。	後III期　反転復元
24	3	046	046-5	土器	在地　すり鉢	—	(1.4)	15.2	10YR6/2灰黄褐～2.5Y2/1黒	5YR5/8明赤褐 ～5YR4/3にぶい赤褐	底面：回転糸切り（向き不明）。スス付着。	使用による磨滅・剥落が認められる。	後IV期並行　反転復元
24	4	025	025-4	中世陶器	常滑　甕	20.6	(4.1)	—	7.5R2/1赤黒	10YR4/1褐灰	口縁端部を折り返したのちに立ち上がり部を付加している。ヨコナデ。	口縁付近：ヨコナデ、以下：ナデ。	6b型式　反転復元
24	5	063	063-5	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	11.2	(2.0)	—	5Y8/2灰白 釉：10Y6/2オリーブ灰	釉：10Y6/2オリーブ灰～8/2灰白	凹凸が明瞭なヨコナデ。口縁部付近に釉がかかる。	釉がかかる。	後II期　反転復元
24	6	063	063-6	土器	カワラケ　杯	—	(2.6)	8.8	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	底面：回転糸切り（向き不明）→底部外周にシノ状圧痕。体部：ハケメ状の条線を伴うヨコナデ。	ヨコナデ→見込：径方向のナデ？（不明瞭）	
24	7	069	069-1	白磁	皿	—	(1.3)	—	10GY8/1明緑灰	10GY8/1明緑灰	内外とも釉がかかるものの被熱によりガラス質が粒状化しザラザラになっている。	刷毛目状の弧文が描かれる（11本/1.2cm）	
30	1	055	055-2	土器	カワラケ　小皿	—	(1.7)	5.2	7.5Y6/4にぶい橙 ～5/2灰黄褐	10YR7/4にぶい黄橙 ～5/2灰黄褐	底面：切り離し後ナデ。体部：ヨコナデ。	胎土に風化雲母微粒目立つ。見込：径方向のナデ	僧寺XIII
30	2	055	055-3	土器	白カワラケ	—	(1.8)	5.0	10YR8/3浅黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	底面：回転糸切り（向き不明）→体部：ヨコナデ。	ヨコナデ→見込：径方向のナデ。やや磨滅する。	僧寺XIII　反転復元
31	1	059	059-1	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	12.4	(2.1)	—	2.5YR7/2灰黄 釉：5Y5/3灰オリーブ	5Y7/2灰白 釉：5Y5/3灰オリーブ	ヨコナデ。口縁のみ釉がかかる。	釉がかかる（口縁の下は刷毛塗）。	後I期　反転復元
31	2	059	059-2	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	—	(1.3)	4.9	5Y7/2灰白 釉：5Y6/3灰オリーブ	5Y7/2灰白 釉：5Y7/3浅黄	底面：回転糸切り（左）→体部：ヨコナデ。まだらに釉薬が付着する。底部外周付近に3箇所のトチン剥離痕あり。	全体に釉がかかる（見込：螺旋状に刷毛塗）。見込外周に1箇所トチン剥離痕あり。	後I期
31	3	059	059-1	土器	カワラケ　小皿	8.6	1.9	5.4	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（向き不明）→体部：ヨコナデ。	ヨコナデ。	僧寺XIII～XIV 反転復元
31	4	076	076隣接ピット-5	土器	土師器　小皿	—	(1.3)	4.6	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙～5YR6/6橙	底面：静止糸切り。体部：ヨコナデ。	ナデ・ヨコナデ。	11世紀
31	5	068	068-10 （同一片 068-7、-10）	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	11.0	2.4	5.9	5Y8/2灰白～3/1灰白 釉：10Y6/2オリーブ黒	2.5Y7/2灰黄 釉：2.5Y7/1暗オリーブ褐	底面：回転糸切り（左か）→体部：ヨコナデ。体部の一部に糸切りの糸の擦痕がある。釉薬が口縁部にかかる。被熱による黒変が認められる。	見込は使用による摩滅で平滑になっている。ヨコナデ→釉薬が全面にかかる（見込は刷毛塗）。被熱による黒変が認められる。	後II期　反転復元
31	6	068	068-5	中世陶器	瀬戸美濃　縁釉小皿	12.7	(2.3)	—	2.5Y7/1灰白 釉：7.5Y5/3灰オリーブ	釉：7.5Y5/3灰オリーブ～6/2灰オリーブ	ヨコナデ→口縁部に釉がかかる。	ヨコナデ→釉がかかる。	後II期　反転復元
31	7	068	068-8	中世陶器	瀬戸美濃　花瓶III類	—	(4.4)	—	釉：5Y7/3浅黄～6/3浅黄	5Y8/2灰白	ヨコナデ（部分的に凹部が明瞭）→釉がかかる。	ヨコナデ。	後III期　反転復元
32	1	080	080-2	土器	カワラケ　杯	—	(1.5)	6.2	10YR6/4にぶい黄橙～ 7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	底面：回転糸切り（右）→まばらで弱いナデ。底部外周が突出する。	胎土に風化雲母微粒が目立つ。ナデ。	僧寺XI 一部反転復元
34	1	082	082-2	土器	カワラケ　杯	12.8	3.8	6.8	10YR6/4にぶい黄橙 ～4/2灰黄褐	10YR6/4にぶい黄橙～ 10YR6/6明黄褐	底面：回転糸切り（右）→ナデ・シノ状圧痕。体部：条線の目立つヨコナデ。	ヨコナデ（見込外周が少しくぼむ）→見込：径方向のナデ（ヘソをナデ消す程度）。	14～15世紀
34	2	086	086-1	土器	カワラケ　杯	11.8	3.2	7.0	10YR3/1黒褐	10YR4/2灰黄褐	底面：回転糸切り（右）→体部：ヨコナデ。被熱によるとみられる黒変が著しい。	ヨコナデ→見込：径方向のナデ（ヘソは押さえているが、他は目立たない）。全体が黒変する。	14～15世紀 一部反転復元
35	1	077	077-6主室床直	土器	カワラケ　杯	—	(1.5)	6.5	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	底面：回転糸切り（右）→まばらな一方向のナデ。体部：ヨコナデ	ヨコナデ→見込：径方向のナデ（ヘソをナデ消す）。	15世紀第2四半期 （後II～III期並行か）
40	1	002	002-2	土器	高杯	—	(3.2)	—	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	脚部貼り付け→ヨコナデ。	ヨコナデ・ナデ。中央部がくぼむ。	中世在地土器　反転復元

表5　鉄製品一覧

図番号		遺構	注記	種別	寸法cm					特徴
					長軸	短軸	高さ	重量g	その他	
9	8	004	004B-34	内耳鍋	6.9	4.5	―	30.6	体部厚2.5～4mm	口縁が外方に屈曲する。内耳は丸棒で構成され、横向き棒を斜め棒が支える形状に鋳出されている。破片はやや歪み、破断部の一部が鈍くなっているため、再利用素材の可能性がある。
9	9	004	004B-41	板状品	2.8	1.9	―	1.8	厚1～2mm	方形の板状品。全体に薄いが刃部は認められない。
9	10	004	004F-172	方形板状品（クサビ？）	4.4	1.9	1.1	16.1	―	一端がやや薄くなる方形板状品。刃部は無い。クサビか。銹化による割れがすすむ。
9	11	004	004-200	板状品	5.2	5.1	0.7	28.1	―	不明板状品。不定形で未加工。素材か。銹化の進行が著しく、錆膨れ・剥落が進む。非常に脆弱。
9	12	004	004-162	方形板状品	4.2	2.5	1.3	28.7	―	方形の板状品。長辺端部に折り返し構造が認められる。刃部等、作用部がないため、クサビ等ではなく素材の可能性がある。
9	13	004	004E-152	板状品	3.5	2.9	―	8.8	厚5mm	不定形板状品。錆膨れ・ヒビ多く脆弱。素材か。
9	14	004	004E-155	板状品	3.4	2.3	―	4.3	厚4mm	不定形の板状品。図化面がわずかに内弯する。素材か。
9	15	004	004C-192	釘	4.6	0.8	―	4.3	厚5mm	断面長方形の棒状品で一端に向かって若干細くなる。頭部を欠損した釘である可能性が高い。先端部の欠損の破断面は古い。
9	16	004	004B一括	釘	2.5	0.7	―	1.3	厚5mm	折頭型の釘。先端欠損は調査時。
9	17	004	004C-141	釘	3.4	0.8	―	1.5	厚1～4mm	折頭型の釘。完形。頭部の折り返しが体部に着くほど曲がっている。
9	18	004	004B-8	釘	3.6	0.7	―	1.4	厚4mm	頭部を欠損する折頭型の釘。錆びで体部がずれるがほぼ完形。
9	19	004	004C-59	釘	3.2	0.8	―	2.2	厚6mm	先端を欠損する折頭型の釘。
9	20	004	004E-146	釘	3.9	0.6	―	1.5	厚2～4mm	折頭型の釘。完形。錆膨れが目立つ。
9	21	004	004C-60	角棒状品（釘？）	2.5	0.6	―	1.5	厚4mm	両端を欠損する棒状品。一端に向かって若干細くなる。釘か。
10	8	022	022-1	鑿	7.3	1.9	―	62.3	厚3～16mm	小さい錆膨れが表面を覆うが概して遺存は良好。刃部は体部から明確に屈曲してつくられる。反対面はほぼ平坦。刃部先端は使用のためか、少し折れている。
10	9	019	019-2	角棒状品	4.8	1.1	―	5.7	厚4～5mm	錆びによって縦に割れた棒状品。全形不明。
10	10	028	028-1	刀子？	6.5	1.6	―	13.0	厚4mm	錆膨れ、剥落が著しく原形不明。刀子とするには刃部が鈍い。
10	11	029	029-1	釘	3.7	0.9	―	2.3	厚2.3mm	折頭型の釘か。錆び割れ、剥落が進みほぼ原形がない。
10	12	043	043-2	板状品	4.2	2.5	―	8.6	厚2～6mm	若干上面が内弯する。厚さがほぼ一定で刃部等の作用部も認められないため、素材と考えられる。
21	2	038	038-1	角棒状品（釘？）	3.2	0.8	―	4.1	厚4mm	錆膨れが顕著な角棒状品。一端が細くなるので釘の可能性がある。破断面は古い。
21	3	038	038-1	角棒状品（釘？）	5.3	0.8	―	4.6	厚4～7mm	両端を欠損する棒状品。一端に向かって若干細くなる。釘か。先端破断面は古いが、頭側は新しい。
24	9	063	063-2	板状品	3.7	3.1	1.3	8.5	板部厚4mm	若干湾曲する三角形の板状品。内弯面に断面方形の隆帯がつくられる。再利用素材か。
29	1	053	053-2	板状品	4.7	3.6	―	23.4	厚6～9mm	不定形の板状品。反りはほとんどなく、厚さもほぼ一定。刃部等の作用部が認められないため、素材と考えられる。
31	12	076	076-2	釘	4.4	0.8	―	3.6	厚3～8mm	折頭型の釘。先端が少し欠損するほかは完存。先端がややねじれている。
36	1	094	094-2	鏃	7.3	4.4	1.5	18.1	茎長15.5mm	雁又形の鏃。二又の刃部（内側のみ）の一方を欠損する。茎・鏃身とも断面方形。箆被は鏃身平面部方向に厚い。
36	2	083	083-3	鎌	8.2	3.5	0.5	39.7	体部厚3mm前後	先端を欠損するほかはほぼ完形の直刃鎌。背はゆるく湾曲する。長辺一端を折り曲げ着柄部とする。折り曲げを左とした場合、手前が刃部になる。

表6　鉄滓一覧

図番号		遺構番号	注記	種別	寸法cm					特徴
					長軸	短軸	高さ	重量g	その他	
9	26	004	004B一括	羽口（炉壁？）片	3.1	2.8	2.6	16.1	孔径3.6cm	磁着なし。高温被熱でガラス質が生じている。高温でガラス質化した羽口先端の破片か。
9	27	004	004C-52	炉壁	2.7	2.5	1.4	7.5	―	炉壁と見られる砂質の胎土の一面が高温を受けガラス質化している。
18	3	016	016-1	鉄滓	4.0	3.8	2.2	33.6	―	多孔質を示す広面は磁着を示す。反対面はほぼ平坦で、砂粒上の凹凸が生じており、生成時の接地面である可能性がある。
35	3	077	077主室内黒色土一括	鉄滓（椀形滓）	6.4	6.3	3.2	134.9	―	凸面は多孔質だが、凹面（上面か）は孔状の空隙は目立たない。磁着は示さない。

表7　石製品一覧

図番号		遺構番号	注記	種別	寸法cm				特徴
					長軸	短軸	高さ	重量g	
9	1	004	004D-168、004f-209、004f-221	台石片（金床石？）	14.1	10.2	5.1	728	3片接合。被熱による黒変部が上面に目立つ。加撃・被熱で破砕されたように見受けられる。遺存面は敲打圧擦により平滑になっており、一部に使用によると見られる剥落が認められる。
9	2	004	004f-210	金床石片	9.1	6.3	8.7	869	作業面と接地面と見られる平面が見られる。鉄器の鍛打に由来すると思われる赤変および鉄分の付着が認められる。破断面の一部は磨滅しており、破片化後の二次利用もあったらしい。
9	3	004	004B-198	礫器（磨石）	5.4	5.2	3.9	157.0	栗の実下半のように下面がやや平坦になっている。全体的に平滑だが、下面は周囲よりとくに平滑になっているため、作用面だったと思われる。全体が黒変する。
9	4	004	004B-197	台石片	7.8	7.7	4.6	246.7	平坦面と磨滅による平滑な表面をもつ大ぶりの石片。
9	5	004	004C-135	硯？片	4.4	3.3	0.9	10.3	非常にきめ細かい材質で砥石ではないと見られる。層状節理を示す。頁岩か。2片と1角が遺存し、長方板状の全体形が推定できる。平面部には黒ずんだごく浅い窪みが認められる。使用痕か。
9	6	004	004t柱穴　一括	砥石	5.4	3.0	2.3	6.6	軽石製の砥石。線状の研磨痕が多く認められる。平坦な面に特に多い。
9	7	004	004s-220	棒状砥石片	4.9	3.8	2.2	55.2	断面方形の棒状砥石の一部で長軸方向が大きく研ぎ減っている。長辺には穿孔状の研ぎ減りがある（直径7～10mm）。丸棒状の金属製品の研磨痕か。
17	3	027	027-3	台石片（金床石？）	14.3	10.1	11.2	1433	被熱により砕けたように見える。破断面にススが付着する箇所も認められる。破片化後、もしくは破砕時に被熱したものと思われる。作業面と見られる平面は特に平滑で黒みも強い。遺存面は敲打圧擦によりおおむね平滑に磨滅している。
17	4	027	027-3	台石片	9.2	9.0	7.3	661	遺存面が平滑になっている。破断面に顕著な黒変が認められ、破片化に強い被熱の伴ったことが推定できる。
24	1	025	025-2	砥石片	6.6	4.1	4.2	74.4	発泡質で軽石に近いが硬さがある。全面に研ぎ減り、研ぎ傷が認められる。
24	2	025	025-3	棒状砥石片	3.9	3.1	1.8	17.0	大きく研ぎ減った棒状砥石の端部破片。全体に黒変した面が見られるので被熱があったと考えられる。
24	8	063	063-4	礫器（敲石）	6.4	5.8	3.2	172.0	長軸両端を除きおおむね平滑になっている。敲打によって大きく剥落した箇所が作用面か。表面が赤変しており被熱が推定される。
24	10	069	069-1	火打石？片	5.3	2.5	2.6	24.1	玉随か。明確な使用痕は認められない。三角柱状の剥片。
24	11	069	069-2	礫器（磨石？）片	7.3	3.6	1.6	63.4	磨滅による非常に平滑な平坦面を持つ石片。被熱による黒変・赤変が目立つ。破断面に変色は及んでいない。
31	8	068	068-9	硯片	13.5	6.5	1.8	143.5	非常にきめ細かい材質で砥石ではないと見られる。暗赤灰色。層状節理によって剥離した箇所が目立つ。粘板岩か。加工・使用にともなうと見られる多数の線条痕が長軸に対し斜方向に認められる。線条痕の多い面の反対面は非常に平滑になっているので、使用面と考えられる。
31	9	068	068-6（他同一5片）	金床石片	7.6	5.8	―	23.8（+24.5）	遺存面は全体的に平滑だが敲打により剥落した凹部が目立つ。被熱による赤変・黒変が認められる。ガラス質の金属加工に伴うと見られる飛沫状付着物が表面に認められる。破片自体は被熱等により剥落したように見受けられる。厚さ5mm。
31	10	076	076-4 隣接ピット	棒状砥石片	4.6	2.5	2.5	38.6	長軸両端を欠損する棒状砥石片。長辺中央部が研ぎ減っている。
31	11	058	058-4	棒状砥石片	4.9	2.1	1.6	21.1	長辺中央が大きく研ぎ減る棒状砥石の破片。破断面以外は使用により平滑となる。破断面は古い。
35	2	077	077-3	金床石片	11.1	9.2	5.5	538	全面が被熱により黒変あるいは赤変する。平面には鉄分と見られる赤い付着物が認められ、敲打圧擦によりやや平滑になっている。作業面と見られる。
36	3	083	083-2	棒状砥石片	10.6	3.8	3.6	118.3	長軸に沿って各面が大きく研ぎ減った棒状砥石。一端を欠損する。破断面は古い。端部を中心に研ぎ傷が多く認められる。
37	1	060	060-3	台石片（金床石？）	11.7	8.8	6.1	484	被熱による黒変が目立つ。広面には敲打によって平面が形成されているが平滑ではない。
37	2	060	060-5	台石片	8.8	7.7	6.8	455	角の丸い直方体を呈する石製品の一部。遺存面は全体的に平滑。
37	3	グリッド	3B55 10m四方	礫器（磨石）	10.3	9.3	3.4	501	円盤状の磨石。側縁部に敲打痕がめぐるほかは磨滅によって平滑になっている。

郡本遺跡群第 15 次調査区周辺（1961 年 国土地理院）

004号台地整形区画および遺構群

004号台地整形区画南東部

004号台地整形区画内遺構群

024号・025号竪穴遺構周辺

調査区中央部遺構群

調査区南部遺構群

004号台地整形区画検出状況

001号混貝土層検出状況

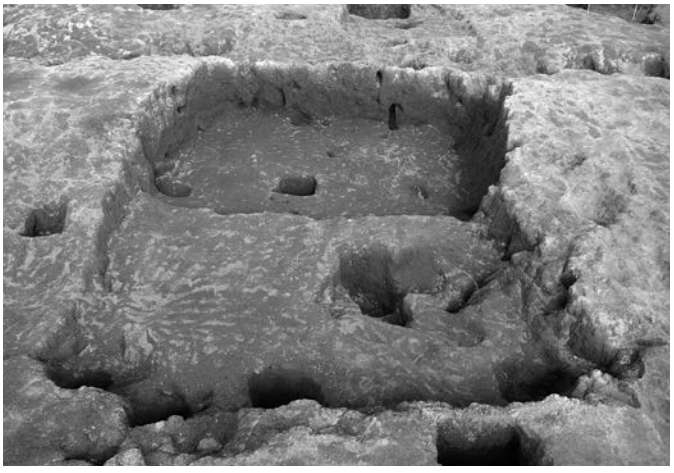
021号貝層（004号内堆積）

004号台地整形区画および043号区画溝

008号土壙墓土層断面

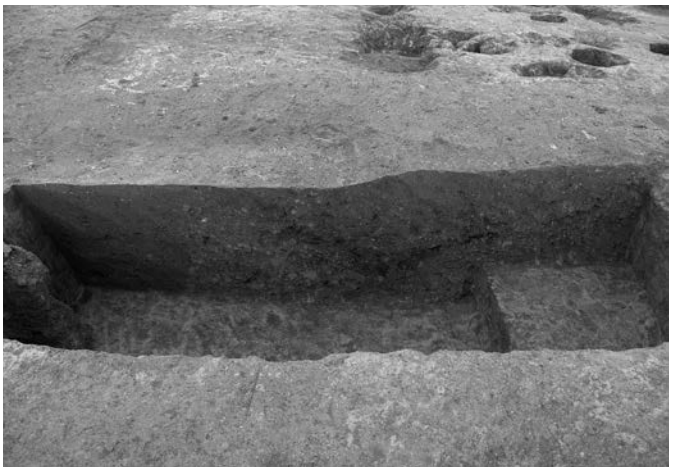
008号土壙墓人骨検出状況

028号遺構全景

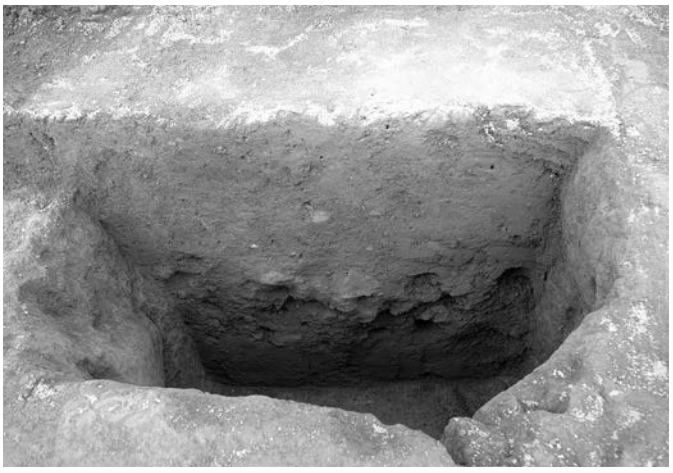


034・040号竪穴遺構全景

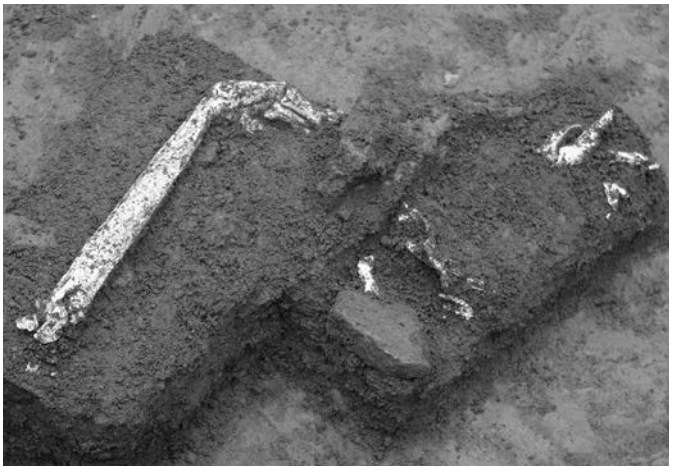
043号溝北辺西端部土層断面

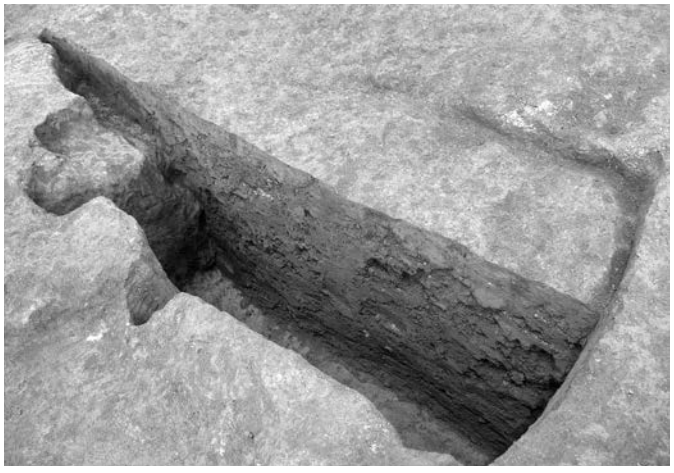

038号竪穴遺構・095号火葬遺構土層断面

038号竪穴遺構・095号火葬遺構全景


016号地下式坑竪坑土層断面

016号地下式坑遺物検出状況


016号地下式坑主室シカ骨等検出状況


026号地下式坑土層断面

026号地下式坑全景

026号・027号地下式坑全景

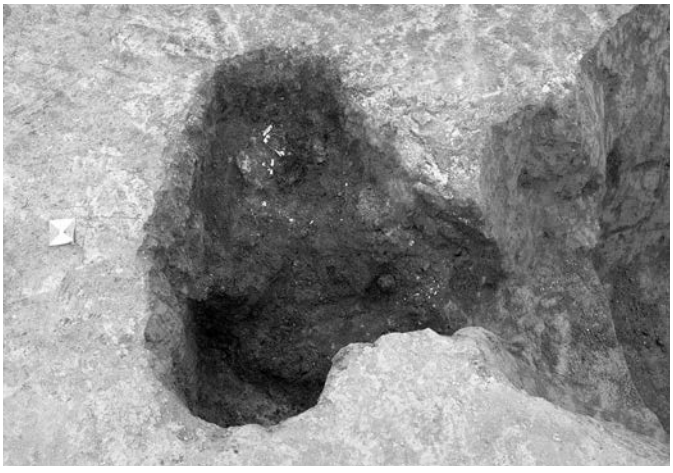
026号地下式坑竪坑・足掛穴

027号地下式坑竪坑・足掛穴

030号地下式坑主室土層断面

030号地下式坑全景

030号地下式坑主室奥壁


096号火葬遺構検出状況

096号火葬遺構炭化物検出状況

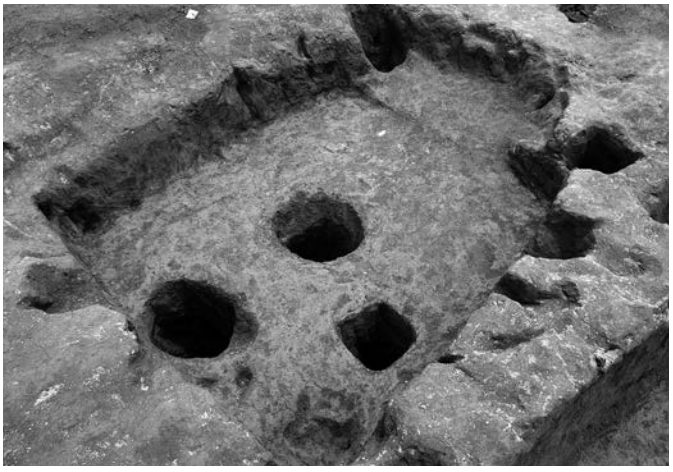
042号地下式坑竪坑貝層検出状況

042号竪坑内門部検出状況

042号地下式坑全景

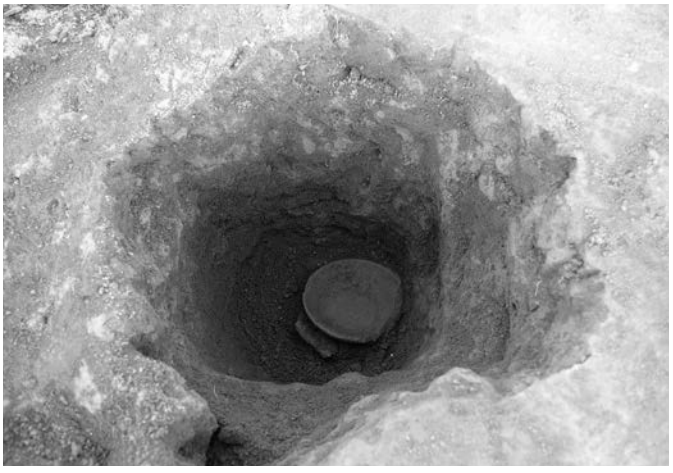
042号地下式坑全景

024号竪穴遺構検出状況



025号竪穴遺構検出状況

048号ピット銅銭出土状況



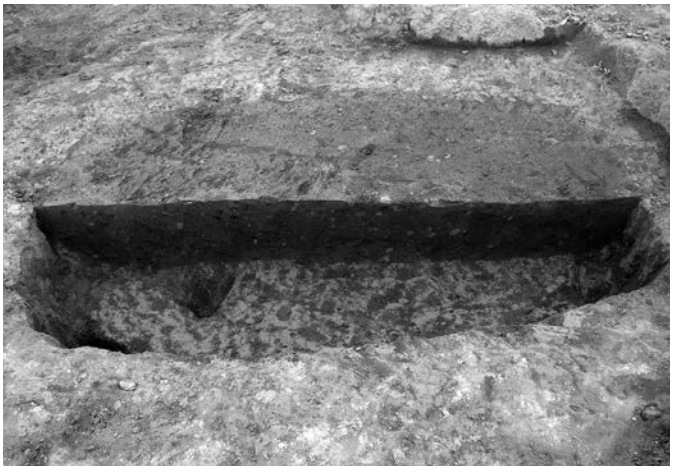
082号ピットカワラケ出土状況

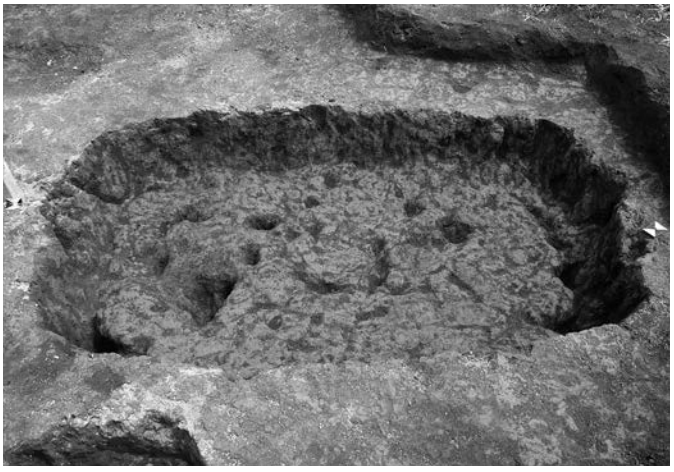
044号遺構土層断面

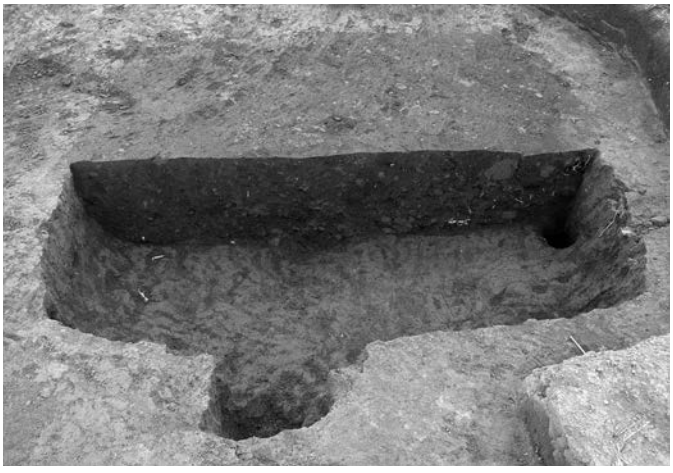
045号遺構土層断面

046号遺構土層断面

044・045・046号遺構全景

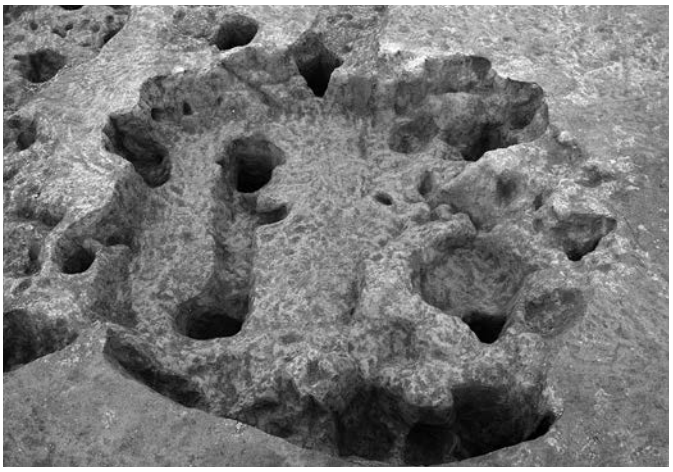

052号遺構土層断面


052号遺構全景

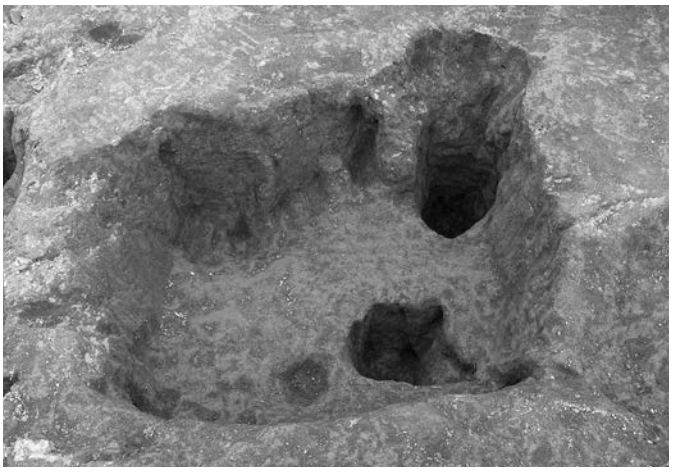

053号遺構土層断面

053号遺構全景

063号遺構土層断面

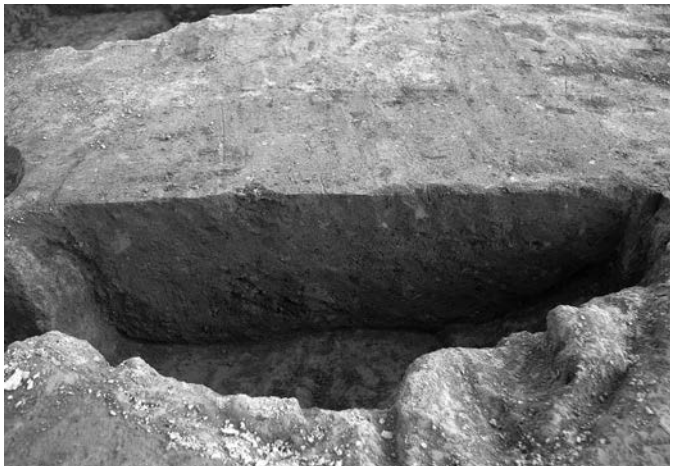

063号遺構全景

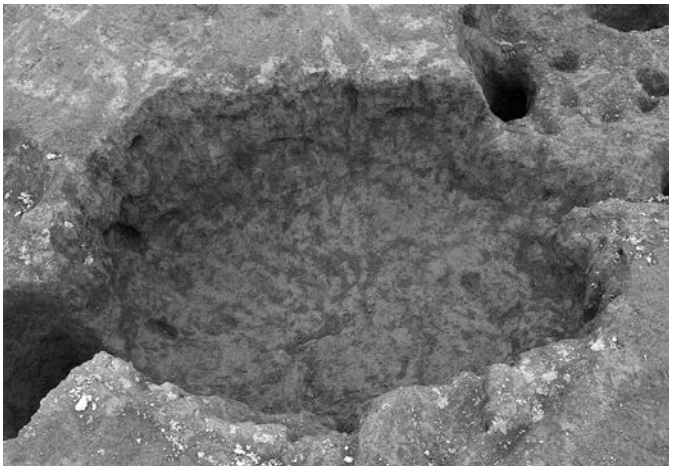
064号遺構土層断面


064号遺構全景

069号遺構土層断面

069号遺構全景


062号遺構土層断面

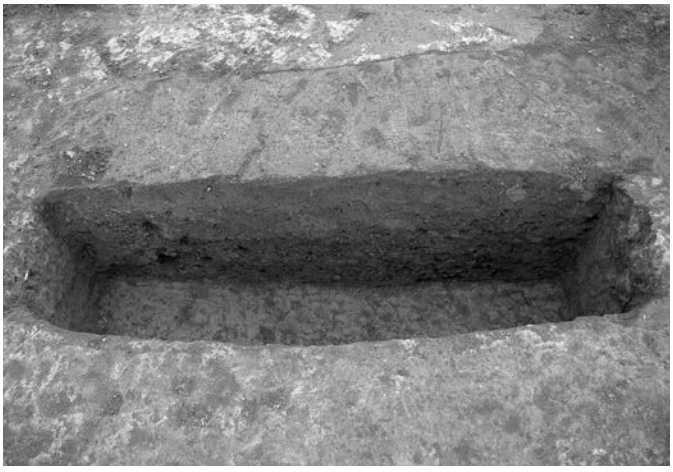

062号遺構全景

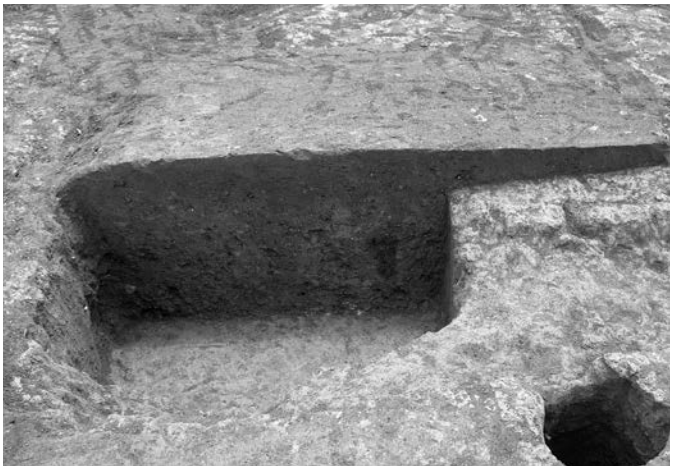
061号遺構土層断面

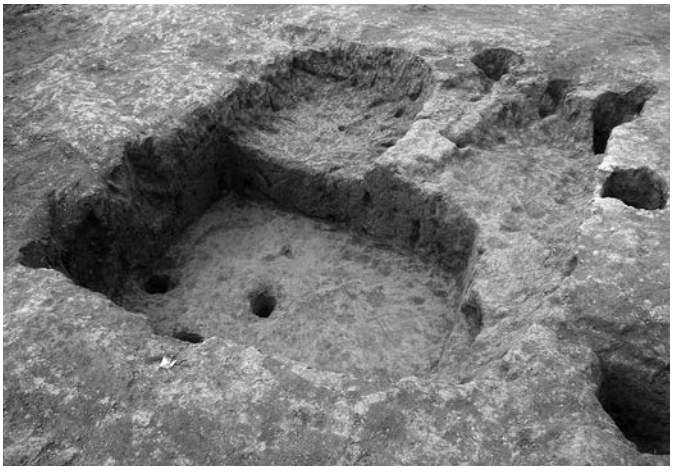
065号火葬遺構土層断面

065号火葬遺構炭化物・骨片検出状況

075号遺構土層断面


072号遺構土層断面

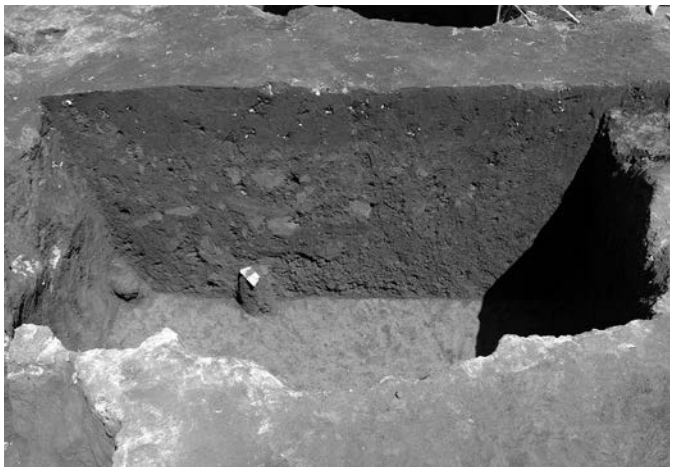

059号遺構土層断面


059号遺構全景

070号遺構土層断面

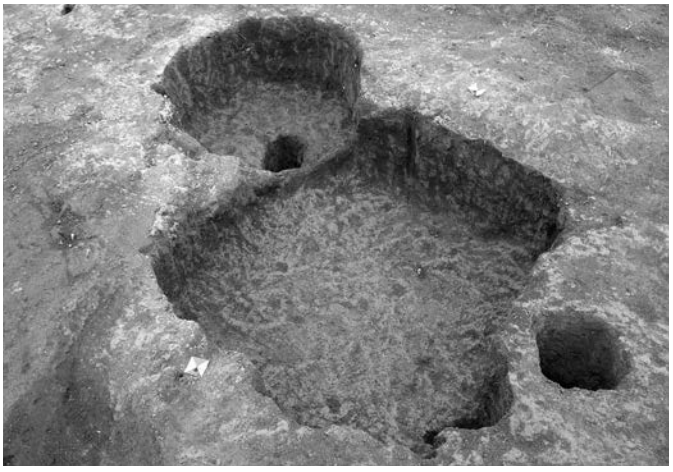
058号遺構土層断面

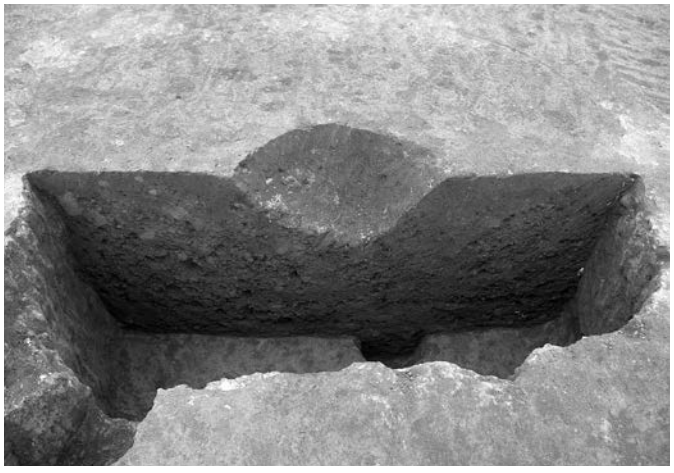
073号遺構土層断面


068号遺構土層断面

085号遺構土層断面

066号遺構貝層堆積状況

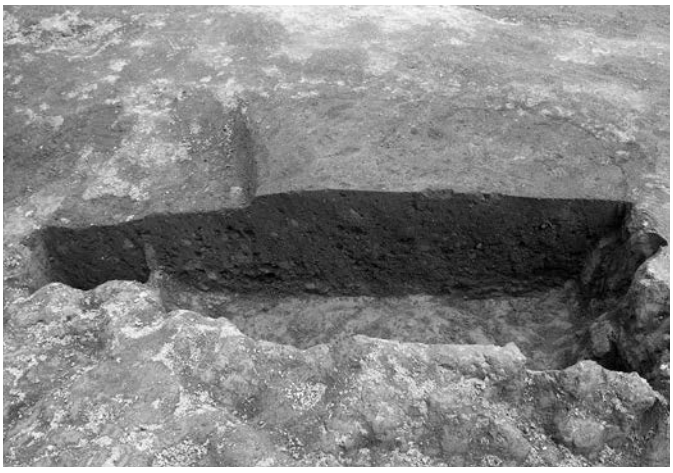

066号遺構全景

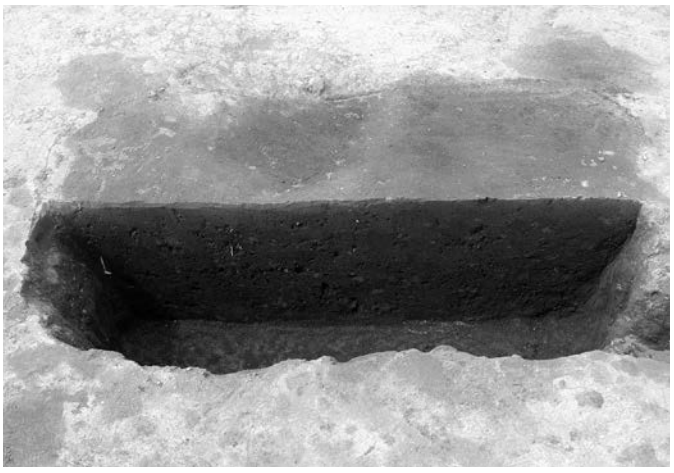

067号遺構土層断面

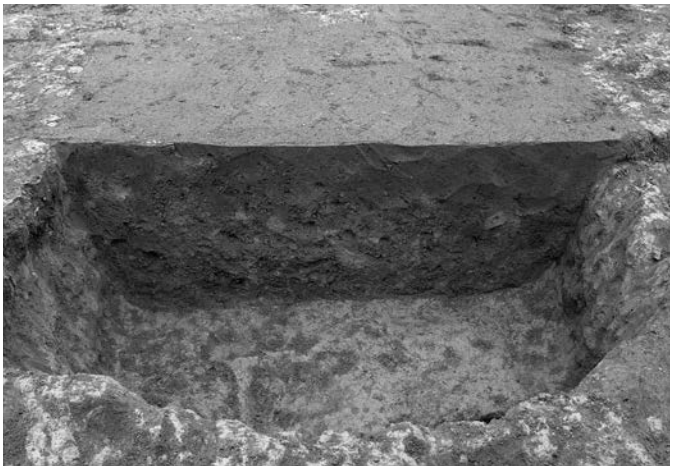
067号遺構全景

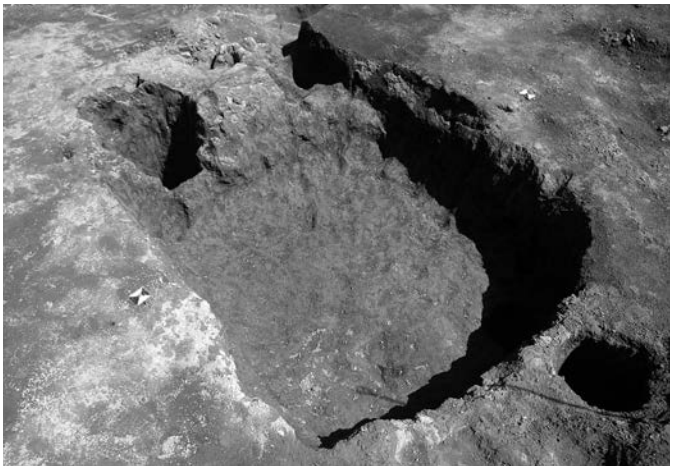
074号粘土貼土坑検出状況

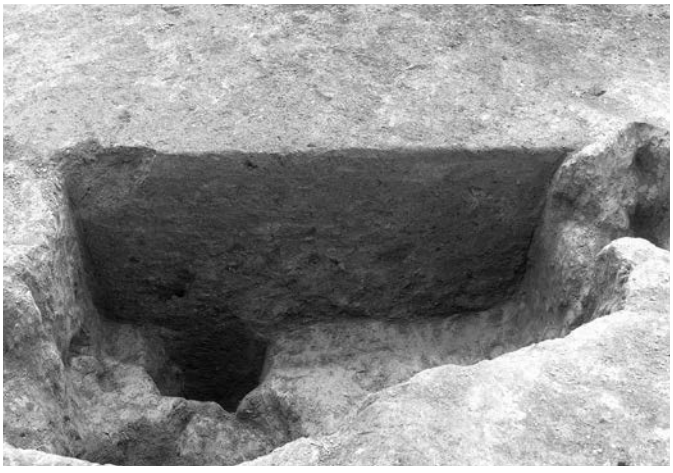
074号粘土貼土坑全景


081号遺構土層断面


083号遺構土層断面

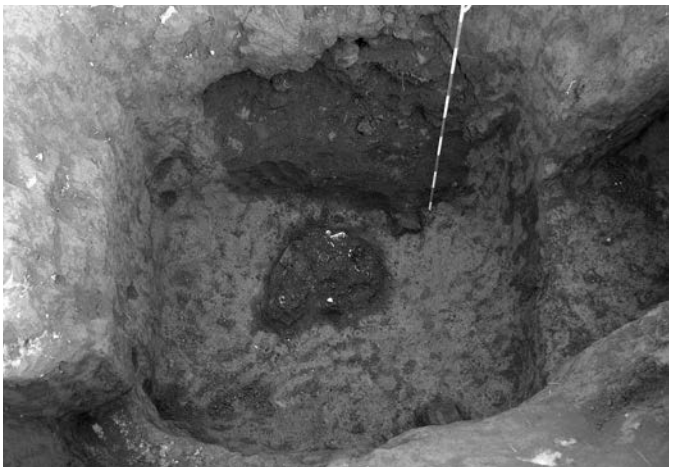

057号遺構土層断面


057号遺構全景


076号遺構土層断面

078号遺構土層断面

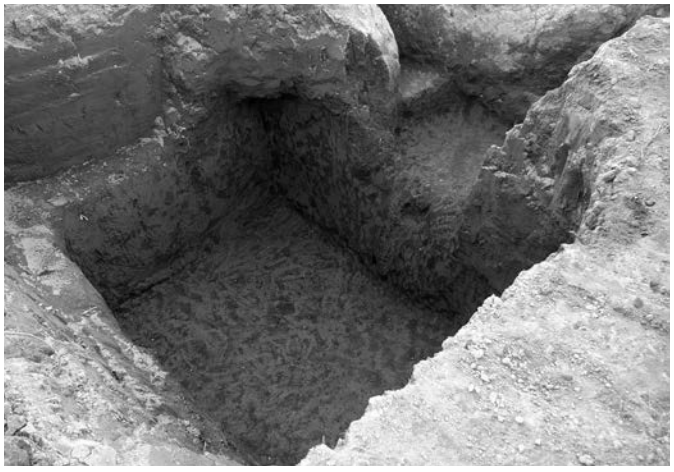
077号地下式坑竪坑土層断面



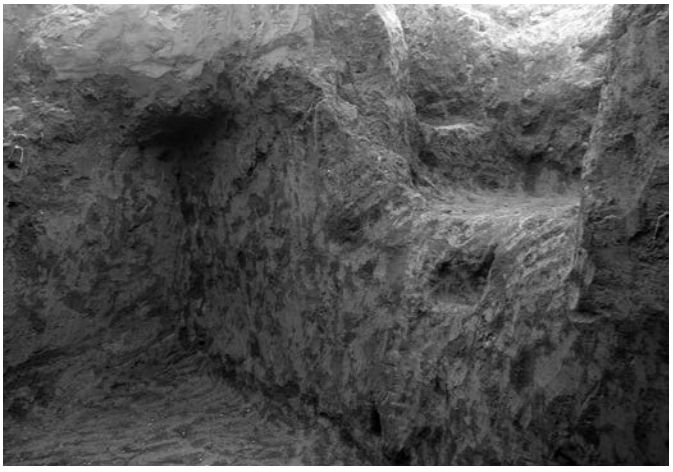
077号地下式坑竪坑内門部検出状況

077号主室床面ウマ骨検出状況

077号地下式坑全景



077号地下式坑全景



077号地下式坑竪坑・主室天井部隅角検出状況

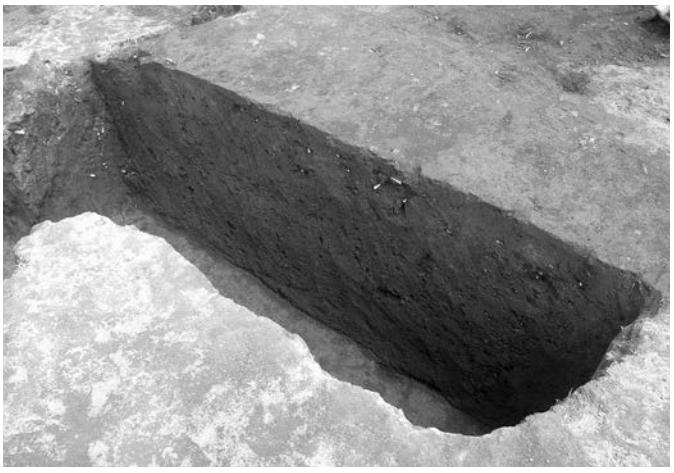
054号遺構土層断面

080号遺構土層断面

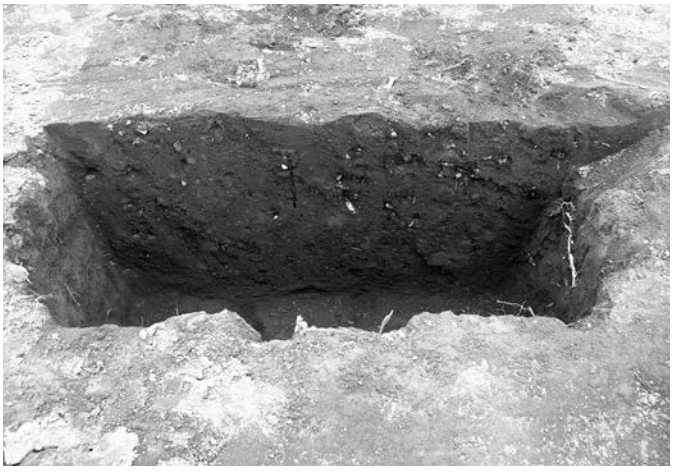
087号遺構土層断面

087号遺構全景

088号遺構全景

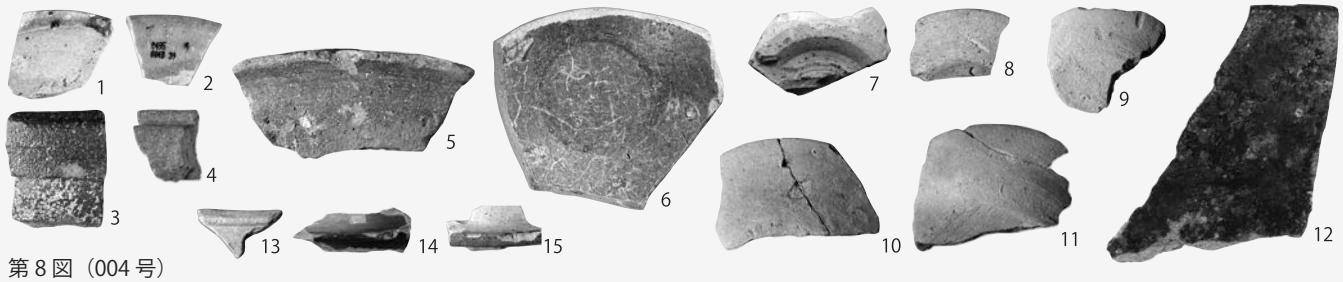

090号遺構土層断面

091号遺構土層断面

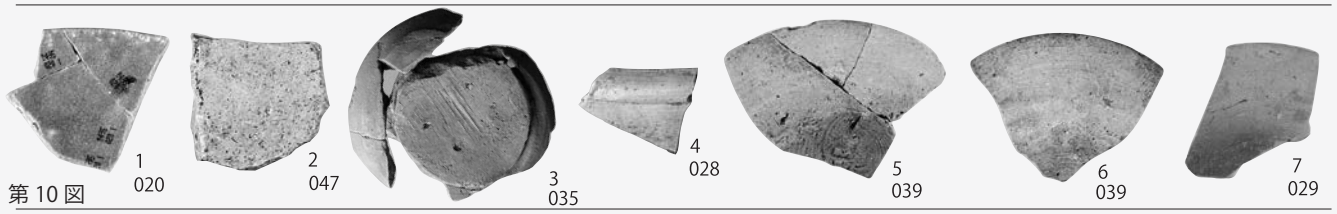

092号遺構土層断面

093号遺構土層断面

調査区南端060号溝付近

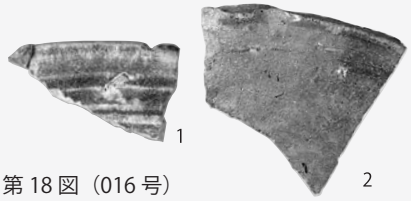


第 8 図（004 号）



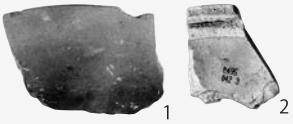
第 10 図

第 17 図



第 18 図（016 号）

第 21 図（038 号）

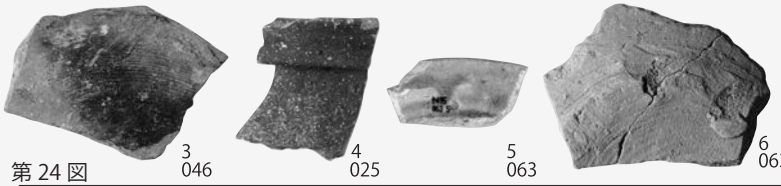


第 22 図（042 号）

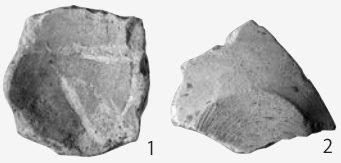
第 19 図（030 号）

第 32 図（080 号）

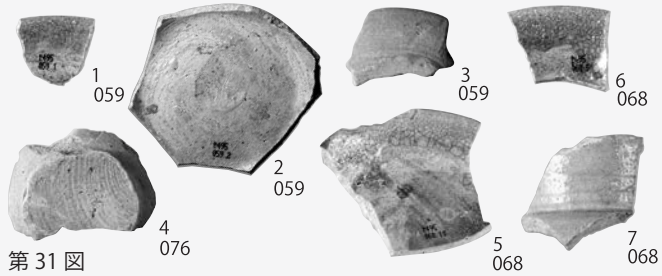
第 40 図（002 号）



第 24 図



第 30 図（055 号）

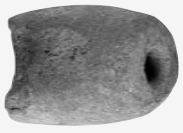


第 31 図

第 35 図（077 号）

第 34 図

第 19 図（030 号）



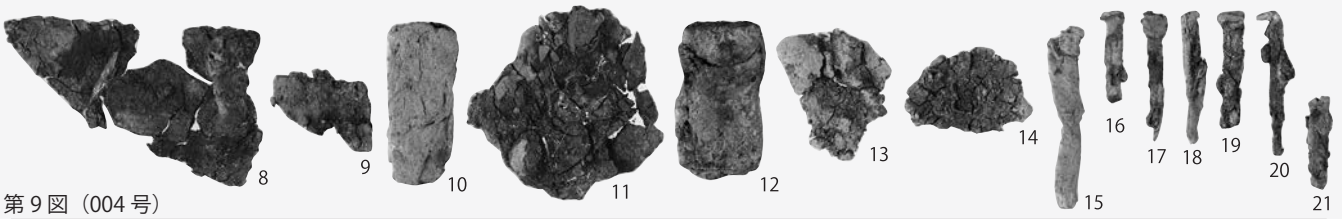
第 31 図（058 号）

第 9 図（004 号）

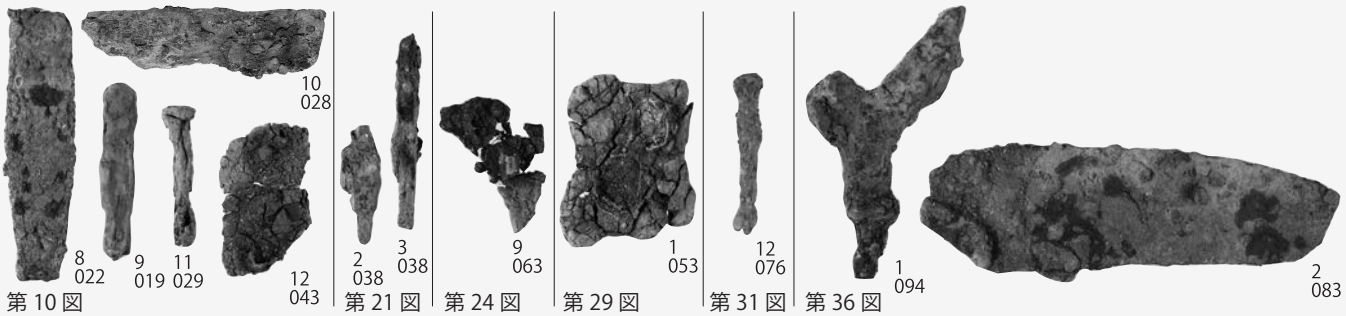
第 18 図（016 号）

第 35 図（077 号）

第 37 図

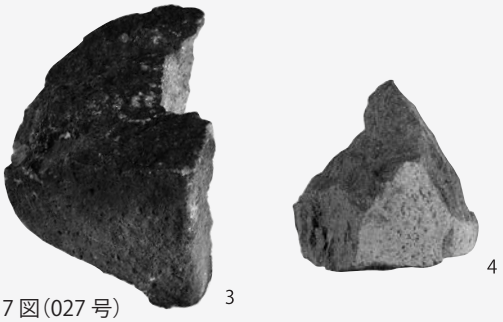


第 9 図（004 号）

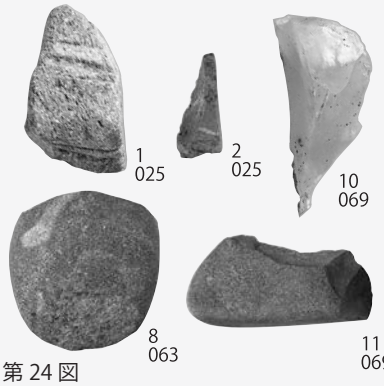


第 10 図　第 21 図　第 24 図　第 29 図　第 31 図　第 36 図

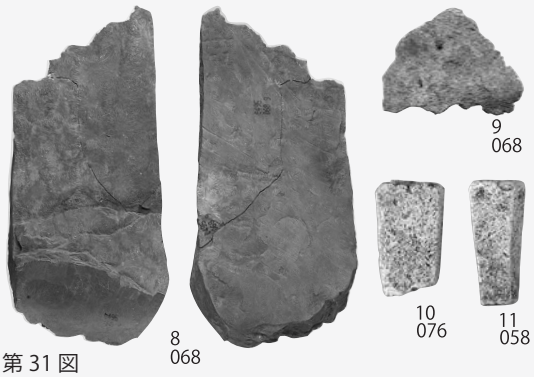
第 9 図（004 号）



第 17 図（027 号）



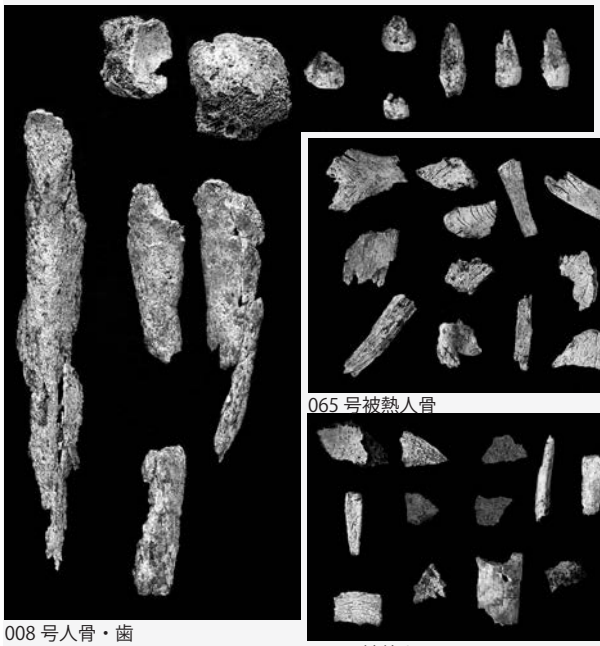
第 24 図



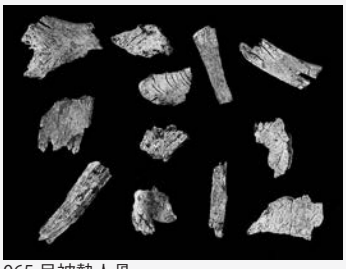
第 31 図

第 35 図（077 号）

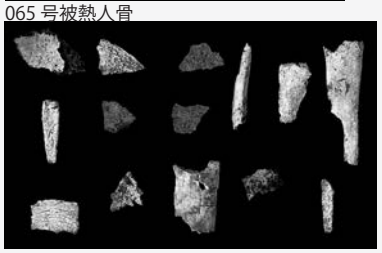
第 36 図（083 号）



008 号人骨・歯



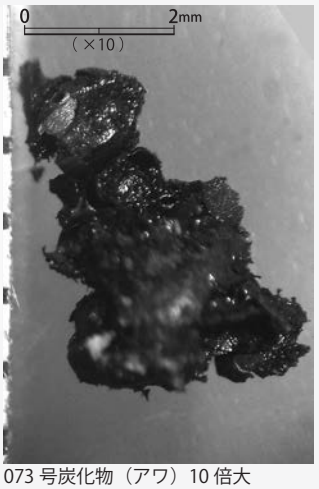
065 号被熱人骨



096 号被熱人骨

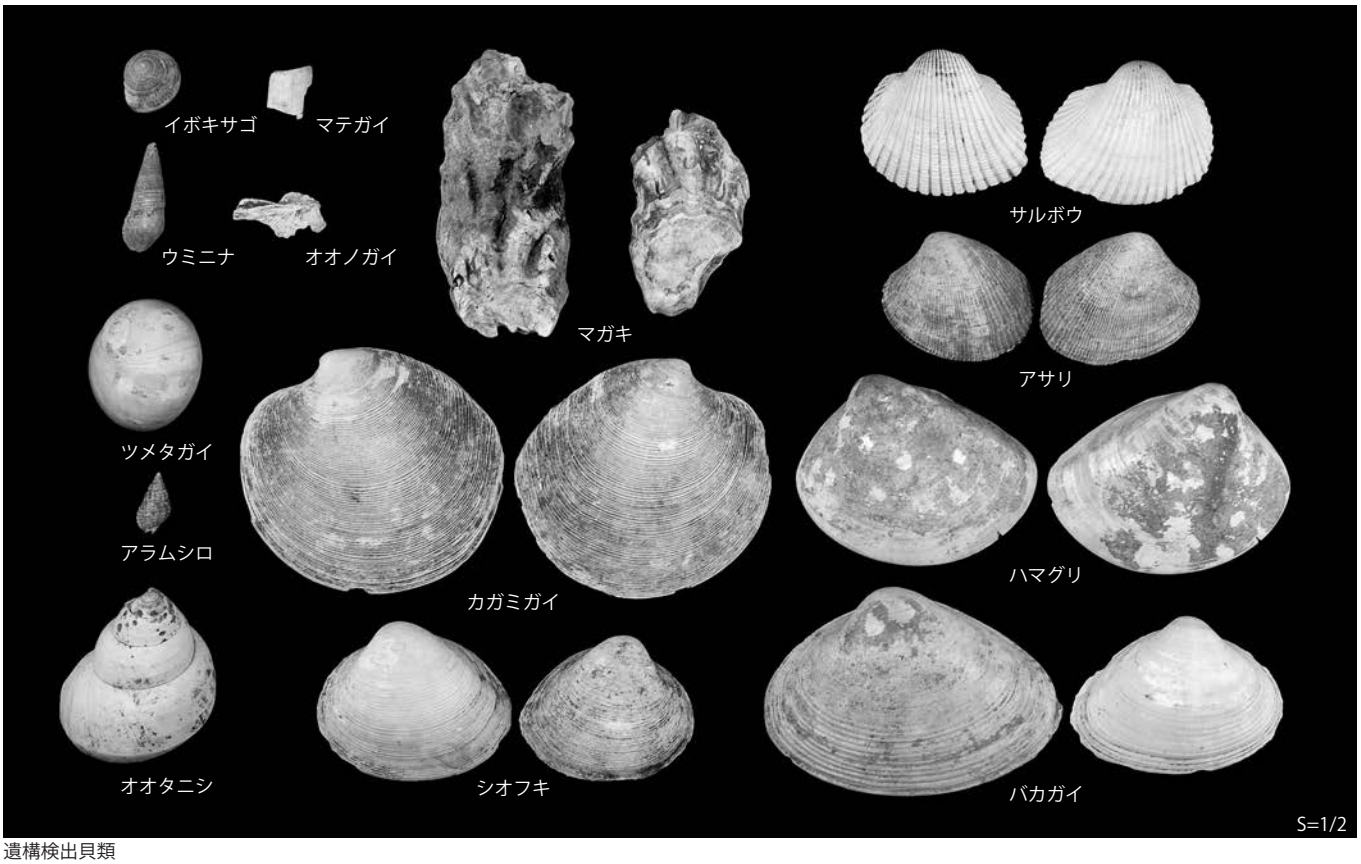
073 号炭化物（アワ・柾目板）

072 号炭化物（粥状？）約 2 倍大

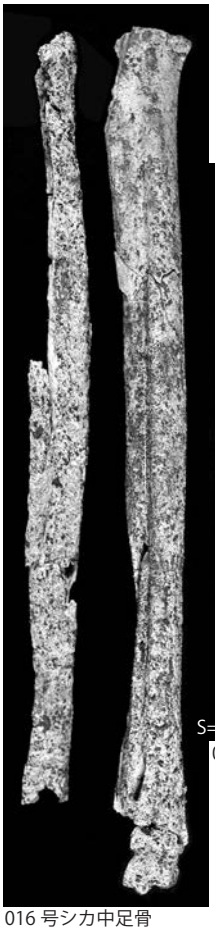


073 号炭化物（アワ）10 倍大

一部を除き
土器 S=1/3
石器 S=1/3
鉄器 S=1/2



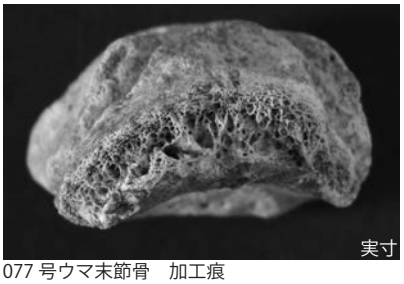
遺構検出貝類



016 号シカ中足骨

016 号シカ指骨

077 号ウマ中手骨



077 号ウマ末節骨　加工痕

077 号ウマ指骨

077 号ウマ骨

報告書抄録

ふりがな	いちはらしこおりもといせきぐんだいじゅうごじ
書名	市原市郡本遺跡群（第15次）
副書名	
巻次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第 26集
編著者名	小橋健司・櫻井敦史・金子浩昌
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒290−0011　千葉県市原市能満 1489 番地　　TEL 0436（41）9000
発行年月日	2013 年3月 22 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
郡本遺跡群（こおりもといせきぐん）	千葉県市原市（ちばけんいちはらし） 郡本1丁目（こおりもといっちょうめ） 237・238ほか	12219	セ 493 セ 495	35° 30′ 30″	140° 07′ 25″	20120228 〜 20120312 20120528 〜 20120727	264㎡／ 2,640㎡ 確認調査 1,050㎡ 本調査	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡本遺跡群	包蔵地	中世	台地整形区画1箇所 掘立柱建物跡3棟 地下式坑6基・粘土貼土坑1基 小竪穴・土坑75基 土壙墓1基・火葬遺構3基 溝状遺構3条・貝層5箇所	中世土器・カワラケ 中世陶器・陶磁器・石製品 銅銭・鉄製品・鉄滓 ウマ骨・シカ骨	中世（15世紀代）の屋敷跡と見られる区画を検出した。

要約

養老川下流右岸台地上、東京湾を望む海食崖近くの平坦面で中世後期の生活址を検出した。地山ローム層を掘り込んだ整地面に、掘立柱建物跡3棟・地下式坑4基等を確認した。区画外にも多数の小竪穴・土坑・ピットが分布し、調査区南端の溝まで生活空間の広がることを確認できた。

遺構の多くは時期不明だが、出土土器の様相から15世紀前半が主体だと考えられる。地下式坑の竪坑などから貝層が検出され、イボキサゴが圧倒的な数量を占める共通する様相が確認されている。地下式坑からは他にウマ・シカの肢骨が出土している。馬小屋遺構の可能性もある小竪穴も存在し、中世後期の居住域の構成を示す好例と思われる。

土器類の出土密度と組成は、東京湾沿岸の沖積地に展開する街村集落遺跡に匹敵するもので、中世上総の政治的中心部に近いことを反映している可能性がある。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第26集

市原市郡本遺跡群（第15次）

平成25年3月22日発行

編　集　　市原市埋蔵文化財調査センター
市原市能満1489

発　行　　株式会社　ラ　イ　フ

千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1−1−1

印　刷　　株式会社　弘　文　社
市川市市川南２−７−２